
闇の断罪者と無の還元者～世界の秘密と魔法使い～

clown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の断罪者と無の還元者〜世界の秘密と魔法使い〜

【Nコード】

N2153X

【作者名】

clown

【あらすじ】

元々、この世界には魔力と呼ぶものがあり、その力は世界を循環していた。しかし、人は魔力の存在に気付かずに過ごしていた。ある時、人に魔力をそして、それを操る術・・・魔法を教えた存在がいた。

魔法は世界に広がり、6つの組織が世界の秩序を守るため、魔法使いを管理し始めた。『魔法教会』、『聖王騎士団』、『盾を掲げる者』、『賢者の知恵』、『世界樹の頂』、『神々の使途』、この6

つの組織は六魔天と呼ばれ、この世界で絶大な力を誇っている。
これは、己の護りたいもののために、六魔天や世界にさえ抗うもの
たちの話。

プロローグ

そこは、世界のどこかにある城。その廊下を一人の少年が歩いている。

年は14か15位、黒い髪に黒い瞳。黒いスーツに身を包んでる。正直、スーツが似合っていない。まあ、年も年なのだから当たり前だ。

少年は一つの扉の前で立ち止まった。

ノックをすると返事を待たず入っていった。

「慧^{けい}、ノックをしたら返事を待つのが本当だろ？
直ぐに入ってくる奴があるか・・・」

中には一人の男がいた。少年・・・慧と同じ黒い髪に黒い瞳、同じスーツに身を包んだ男性だ。年は40代前半といったところか・・・
少年と違いスーツを着こなしている。

慧の行動を呆れた声で嗜める。

「それはすまなかった。」

「全然反省していないだろ、お前・・・」

まったく反省の色が見えない慧の態度に諦めたように溜息をつく。

「それで、慧。話とはなんだ？」

書類の仕事をしながら慧に問う。そもそも、慧から話があると言ってきたのだ。

いつも面倒臭そうにしている慧だが、その時は珍しく真剣な面持ちだった。

「ああ、俺、組織を止めるから。」

「そうか・・・って！何を言っている！？」

当たり前のように言う慧の言葉に思わず頷くが、その意味に気がき、改めて問い返す。

「だから、この組織を止める。」

「何を言っている？悪い冗談だ。いくらなんでも本気で怒るぞ？」

そう言って怒気を発する。この男が本気で怒ることは珍しい。それほどの言葉だったのだろう。

「いや、本気だ。」

「・・・理由は？ふざけた理由なら・・・」

「親父が再婚するらしい・・・」

その言葉に続けようとしていた言葉を吞み込む

「・・・・・・・・」

「相手もバツイチで子もいるらしい。

俺が、ここに留まり続けるとその人達にも迷惑がかかるかも知れない。」

「・・・お前がそこまで気を使う必要があるのか？お前の父親は・・・」

「あんたには感謝している。

あんたが、あの時、この組織に誘ってくれなければここまで強くはなれなかった。」

男の言葉を遮り、慧は言う。その言葉に、何を言っても聞かないであろうことは、長い付き合いだ。直ぐに理解できた。

よって、返す言葉は引き留める言葉ではなく、送るための言葉だ。

「ふっ・・・なに、俺が与えたのはきっかけに過ぎない。

それに、お前のおかげで随分助けられた。礼を言うならこっちの方だ。」

「「・・・・・・・・」」

沈黙の後、慧は入って来た扉へと向かった。

「また会おう。黒澤 慧。」

「ああ、またな。夜城 晟。」

慧が出て行った後、残ったのは夜城一人・・・

「良かったのですか？慧を止めさせて。」

いや、一人ではなかった。どこからともなく一人の男性が現れた。

白い髪に赤い瞳、着ているスーツは夜城や慧と同じものだ。

「盗み聞きとは感心しないな。白河^{しろかわ}。」

「おや、気付いていたでしょ？」

「まあ・・・な。」

「それで、いいのですか？」

「あいつが決めた事だ。それに、止めても無駄だろう。」

「そうですね。しかし、これから寂しくなりますね・・・」

「・・・そうだな。」

夜城はそう言うと言子から立ち上がり後ろにある窓から空を眺めた。

鮮やかな夕焼けの空を眺める夜城の背中はどこか寂しそうに見えた。

「あいつは簡単に辞めると言ったが、何かとあるだろう。白河、フォローを頼む。」

「ええ、わかっています。慧は私達にとって、家族みたいなものですからね。」

その後の二人を見た者達は、子離れを体験した父親の様だと、後に口をそろえて言っていたという。

プロローグ（後書き）

注意、白河は男です。

プロローグ 2

「ここが、俺達がこれから暮らす家・・・か。」

慧が今いるのは櫻木市という街にある住宅街の一軒家。

本来、慧はことは別の場所で一人暮らしをしていたのだが、父親の結婚相手の子がどうしても転校したくないということで、慧が引っ越すことになった。

理不尽に思うが、まあ、慧自身、別に拘る事もないので、了承した。

一つ気がかりがあるとすれば、向こうの友人だ。よく学校をサボっていた慧に良く話しかけてくれたり遊びに誘ってくれたり、一緒にバカをやった友人が少ないが、いたのだ。

しかし、まあ、話せばわかってくれるだろうと、とりあえず、考えないことにした。

「再婚相手の人が良い人だといいな、銀^{イシ}」

「わん！」

その慧の言葉に答えたのは一匹の犬・・・いや狼。慧は犬と言いつけている。綺麗な銀色の毛並と金色の瞳が特徴のおおか・・・犬だ。

慧の母親は早くに亡くなり父親に育てられてきた。しかし、父親も仕事で忙しく、家にはほとんど帰ってこないため、一人暮らしのようなものだった。

そんな時、傷ついているこの狼・・・いや、犬を見つけ、飼う事になった。

父親は慧が10歳になると全く帰ってこなくなったため、これまで住んでいた一軒家から引っ越し、慧はアパートで一人暮らしをする事になった。

なお、必須条件は動物も大丈夫な所だ。

お金はちゃんと振り込まれたため生活には困らなかった。むしろ、周りの眼をごまかす方が苦労した。

その間にある事件に巻き込まれ、いや、自分から飛び込み、ある組織に入る決心をしたのだが、それはまた別の機会に・・・

それから5年が過ぎ、いきなり再婚する事になったと聞いた時、予想はしていたとはいえ、慧の心境は複雑だった。

それもそのはず。いきなり再婚するといっただけならまだしも、一緒に暮らそうと言ってきたのだ。

正直不満ではあるが、母親が亡くなったのは自分のせいという負い目もあり了承した。

もともと、体が弱く、無事出産できるか危うい状況だったらしい。それでも慧を産むと断固として譲らなかつたそうだ。

無事出産を終えたと思われたが、その1年後息を引き取ったという。

帰ってこなかったのは再婚相手の家にほとんど同居という形で暮らしていたからだが、慧は知っていて気付かないふりをしていた。気付いた時には慧にも秘密が出来ており、むしろ帰ってこられる

と困ったからだ。

「さて、それじゃお邪魔しますか。」

「わん！」

家の門の脇にあるインターフォンを押した。

「どちら様でしょうか？」

インターフォンを鳴らすと若い女性の声が聞こえてきた。

「俺・・・私は黒澤 慧、黒澤 瀧（そら）の息子です。」

「あ！あなたが慧君？ちょっと待ってね。今、開けるから。」

ドアが開くと中からでてきたのは茶色い髪をショートにした綺麗な女性だった。見た目は20代後半位だが、これでも子供がいるらしいのもっと年は上だろう。

本来は驚くところだが、世界の不思議を見てきた慧にとってこの程度、世界は広く、見た目少女の300歳もいる位なのだ。

「初めまして。黒澤 慧です。そして、こっちが銀（いん）です。」

「わん！」

「初めまして。花咲 桔梗（はなさき けいよう）です。よろしくね、慧君。銀ちゃん。」

「はい、よろしく願います。」

「わん！わん！」

「ふふ、さあ、中に入って。皆待っているわ。」

「どうやら、瀧も既にいるようだ。子供もいるという話だからその子も揃っているのだろう。」

「お邪魔します。」

「ワフ。」

「ここはこれからあなた達のお家にもなるのだから『ただいま』でいいのよ？」

「は、はあ、次は気をつけます。」

「ワン！」

「そういつて桔梗さんがドアを開けると久しぶりに見る父親と始めて見る三人の女の子がそこにいた。」

「・・・は？」

「（え？3人？しかも女の子？聞いてねー！）

「どうした、慧？突っ立ってないで中に入れ。って、銀も中にいたのか？」

「あ、ああ・・・」

「グルルル！」

ちなみに銀は瀧を嫌っている。それは瀧も同じだ。

「構いませんよ。その子も家族になるんですから。」

「桔梗さん……」

（親父、デレるな。キモイ。）

そんな瀧を無視し、中に入ると……

「う……」

強烈な敵意の視線を浴びた。

どうやらこの三姉妹は慧を歓迎してはいないようだ。正確には二人、見たところ上二人が反対。一番下は恐怖……の表情を浮かべている。

「グルルル……」

そんな三人に向かい、銀は警戒の色をあらわにした。

銀に唸られた三人は怯えてしまった。

「こら、銀。落ち着け。」

慧が嗜めた事で、落ち着いたが、三人からの視線がより強くなっ

たようだ。もちろん好意の色は見えない。

「さて、全員揃ったことだし、自己紹介から始めようか。」

瀧の言葉で自己紹介が始まった。母親が花咲 桔梗。瀧と同業でそれが出会いらしい。まあ、あることだ。

長女が葵さん。あおい天城ヶ丘学園高等部の1年。

次女が薫さん。かおる天城ヶ丘学園中等部の3年。

三女が堇さん。すみれ天城ヶ丘学園中等部の2年。

「それでだ。慧。これからお前は花咲 慧だ。」

「いや、なんでよ?」

いきなり名字を変えられ反論する。

「そりゃあ、父さんが婿養子の形で結婚したからな。」

「.....」

「いや、桔梗さんの家は結構な名家でな。結婚するなら婿養子で、と言う事になったんだよ。」

（勝手な事を。なら親父は花咲 瀧・・・はな、さきそう だろ。ギャグか!）

「慧?」

「・・・はあ、断る。」

「慧！」

慌てたように、声を荒げた。

三女はその声に怯えてしまっている。

「黙れ、クソ親父。あんたの再婚は別に構わない。反対しないし、したところで無意味な事はわかる。だが、俺の名字を変えるのは断る。」

「・・・何故だ。」

「愛着があるんだよ。別に、結婚に反対しないし構わないだろ。先方は親父が婿養子になる事を条件にしているが、俺がそれを名乗る事までは含まれていないだろ？」

慧にとって、黒澤の姓は母親との繋がりであり、それを変えることは、夜城や白河といったころの自分をなかったことにされるように思えたため反論したのだ。

「それは・・・まあ・・・」

慧にとって、それは確定事項であり、どう言われようと変えるつもりはない。

今はそんな事よりも・・・

「親父、それより聞きたい事がある。」

「なんだ？」

「なんで、桔梗さんの子供が娘で三人いるって教えなかった？」

「それは、忘れていたけど！」

胸を張って言う瀧に、呆れる慧。

「はあ、とりあえず、結婚おめでとう。それだけだ。じゃあな。」

「ちょっと待て！どこに行く？」

祝福の言葉だけ送り、この家を後にしようとする。

「どこって、帰るんだよ、家に。」

「お前の家はここだろ？」

「あのな、いくらなんでも年頃の娘と一緒に住めって、無理があるだろ。向こうだって嫌なはずだろ？」

最初はこちらに引越す気でいたが、一緒に暮らすのが同年代の子ということもあり気が変わった慧は元の家に戻ることにした。

その慧の言葉に桔梗が娘達に質問する。

「そうなの？」

「そんなことないよ、お母さん。私達は歓迎するよ。」

長女が代表して答えたが、慧を見る目が敵意まるだしだ。・・・
が、瀧と桔梗は気付いてないようだ。

「ほら、葵ちゃんはこう言ってくれている。」

（親父にそんな、どうよって顔されてもな。）

慧が戸惑っていると薫が近づいてきた。

「ね？一緒に暮らそう？慧君。」（素直に頷きなさい。でないと後で酷い目、見せるわよ？）

小声で慧にしか聞こえないようにそう呟いてきた。

「・・・わかった。一緒に暮らすのは了承する。だが、花咲の姓は名乗らない。これは譲らない。いいな？」

「まあ、いいだろ。さあ、夕御飯にしようじゃないか。」

ちなみに、銀は慧の足元で丸まりながら聞き耳を立てていた。

「はあ、居づらい・・・」

正直この家には慧の居場所はないとだろう。3姉妹は親父には心を開いているようで、楽しげに話すが、慧には自分から話かけようとすらしてこなかった。慧から話しかけても完全に無視されていた。

銀は今、桔梗の相手をしている。桔梗には珍しいことになったようだ。問題は娘たちだ。

これからどうするか考えていると部屋のドアがノックされた。

「開いてますよ」

「邪魔するわよ。」

そう言って入ってきたのは件の三姉妹だ。

「何かようか？」

「ええ、あなたに言う事があってね。あなたの父親、瀧さんは認めたわ。良い人だし、お母さんも幸せそうだから。でも、あなたは認めない。だから、今から言う事を守りなさい。

一つ、お母さんやお義父さんの前では仲の良いふりをしなさい。

二つ、あなたから私達に話かけないで。用がある時は私達から話すわ。

三つ、私達と一緒に暮らしていることを誰にも喋らない事。

わかった？」

「・・・俺がこの家から出て行くって選択肢は？」

「無いわ。お母さんが悲しむもの。」

「はあ、ふざけているのか？ 一方的に押し付けやがって。俺はお前らの所有物でもなければ、自分の自由を削ってまでお前らの母親のためにどうこうする気もない。」

（こいつらは、それが通ると思っているのか？）

「これからはあなたの母親にもなるのよ？」

「まあ、戸籍としてはな。だが、実際は違う。いきなり母親だ、なんて言われたところで実感なんか湧かないし母親として見るなんて言われて見れる訳が無い。俺の視点は親父の奥さんだよ。」

そう、慧にとっては、あくまで他人。父親の奥さん＝自分の母親という式は成り立たないのだ。

「・・・そう、なら仕方ないわね。こんなこと、したくなかったのだけど・・・」

言いながら近づいてきた長女は慧の手を取り・・・

「おい！ いったい何を・・・」

いきなり、自らの胸に押し付けた。

「な！？」

動揺していたら

パシヤ！パシヤ！

「え？」

写真を撮られ・・・

パン！

「痛った！」

平手打ちを喰らった。

「何しやが・・・！」

慧はいい加減頭に來たので怒ろうとしたのだが・・・

「これを見なさい。」

「うゝ・・・」

そこに写っていたのは長女の胸を触る慧の姿だった・・・

「この写真をばら撒かれたく無かったら言う事を聞きなさい。いいわね？」

ここまでやるとは思わず、声を押し殺す慧だったが・・・

「・・・分かったよ。だが、その写真で俺が言う事を聞くのはこの件だけだ。それ以上のことで脅してくるなら、それ相応の対応を取らせてもらう。・・・いいな？」

とりあえず了承と釘を刺すことにした。

「ふ、ふん。できるものならね。まあ、いいわ。私達としても、この条件さえ飲んでもらえればいいからね。それじゃ、お・や・す・み・な・さ・い！」

そう言い残すと三姉妹は俺の部屋を出て行った。

（晟のおっさんよ・・・止めたのは失敗だったかもしれない。）

プロログ2（後書き）

プロログ、まだ続きます。

プロローグ 3

慧がこの家に来て数日が経った。

転校も済ませ、なんとかこっちの生活にも慣れてきたところに事件は起こった。

「あゝ、あの家に帰らなきゃいけないのって本当に憂鬱だ・・・」

溜息をつく慧。それも仕方がない。3姉妹の態度は相変わらず。父親や桔梗はそれに気付かず、仲が良いと思っている。

それもまた、仕方がない。慧の様子が多少おかしくても、父親はもの心ついた時からあまり顔を合わせてこなかった。桔梗も慧と知り合ってまだ数日だ。気付くはずがない。

3姉妹、性格には上二人は気付かれない様に嫌がらせしてくる。本心では慧を追い出したいのだろう。親二人は何故気付かない？というレベルにそろそろ達するだろう。

「はぁ、もう着いちまった・・・か？」

家の前までくると、もう一度深い溜息をついた。そして、思いつきり息を吸い込み、覚悟を決めようとしたその時、かすかだが、確かに嗅ぎ慣れた匂いが鼻を刺激した。

「・・・血？」

地面を見ると、血の跡が点々と家の門から続き、どこかに向かっている。

その出発点はどうか、家のような。

何があったのか、慧は慌てて家の中へと駆け込んだ。

すると、自分以外のこの家で暮らす者達が、珍しい事に父親も含め、勢ぞろいしており、皆のこちらを見る目が、いつも以上に険しい。

いつもやさしい目を向ける桔梗さんも今日は悲しそうな目をしている。

「親父、一体何が？」

「何が・・・だと？これを見てみろ！」

父親が怒鳴りながら、次女、薫の腕を指さす。

そこには、包帯が巻かれており、血が滲んでいる。

「お前が連れてきた犬、銀が噛みついたのだ！お前は銀にどういう躰をしている！？」

「銀が？そいつに噛みついた？・・・」

父親の言葉に慧は黙り、何かを考え始めた。

「慧、何か言う事があるんじゃないか？」

その息子の態度に父親は苛立ちながらも、何かを催促する。明確には言っていないが、謝罪を求めているのだろう。

「・・・銀は何の理由もなしに誰かに噛みついたりしない。そいつが何か言うかしたんだろ？あいつは頭が良いから、人の言葉も理解しているからな。」

慧は父親の言葉、その意味に気付きながら、無視をした。慧は銀の事を良く知っている。それこそ父親の事よりも。よって、謝罪する必要がないと判断した。

そんな慧の言葉に対し、皆、糾弾しようとしたが、先に慧が口にした言葉に遮られた。

「それで？銀は？」

「・・・・・・・・」

「銀はどうしたかと聞いているんだが？」

嫌な予感はあるが、確証を得るため、この場にいたはずの友の名を口にする。

それに答えたのは桔梗だった。

「私達が帰ってきたら、調度、銀ちゃんが薫に噛みついているところでした。それに怒った瀧さんが、引き剥がして、それでも襲ってきたので、仕方なく・・・魔法で・・・」

「つまり、玄関から続いている血の痕は銀のものなんだな？」

確証を得た慧は家を飛び出そうと玄関に向かうが、

「待て！慧！」

父親に腕を取られ、止められた。

「どこへ行く？あの犬はもう助からない。諦めろ。」

「離せ！」

慧が強く腕を振ると、掴んでいた父親は吹き飛び、壁へ強かに背中を打ちつけた。

「う・・・」

呻いている父親と父親に駆け寄る桔梗達に慧は告げた。

「俺は、もうこの家に帰らない。戻ってこない。俺の荷物は燃やすなり捨てるなりしてくれ。」

そう、言い残し、慧は花咲家を後にした。

それから、血の痕を辿り銀を探した。そして、思ったより早く見つかる事ができた。

が、先客がいた。

「オラ！邪魔なんだよ！クソ犬が！」

「つたく、汚ねえ、犬だ。血まみれじゃねえか。」

そこには、柄の悪い男達と血まみれで丸まっている銀がいた。

男達は銀を蹴り、踏みつけている。何度も、何度も・・・

「・・・お前ら、何をやっている？」

その、声はとても冷たく、男達は思わず振り返っていた。しかし、ただの少年しかも一人と分かると途端、下ひた笑いを顔に浮かべ始めた。

「何だ？テメー、この犬の飼い主か？なら、ちょうどいい。この犬が俺のズボンを汚しやがったんだ。ほら、見ろよ。ここ、血がついているだろ？」

そう言いながら、ズボンを見せてくる。そこにはかすかに血が付着していた。

慧はそれを一瞥すると、銀の所へ向かおうとしたが・・・

「何、無視してんだ。いいか？俺のズボンを汚したんだ。クリーニング代払って貰おうか？」

一人の男がそう言うと、周りの男たちは笑い始めた・・・が、次の瞬間その顔は凍りついた。

「五月蠅い、消えろ・・・邪魔をするなら、殺す・・・」

慧の殺気をその身に浴びたからだ。押し殺しているとはいえ、滲

み出た殺気に男達は震え始めた。

「もう一度だけ言う・・・消えろ！」

その声に、ほとんどの者は逃げようとしたが、ズボンが汚れたと言ってきた男だけは違った。頭に血が上り、慧の殺気にも気付かず、逆上し慧に殴りかかった。

「警告は、したぞ？」

次の瞬間、闇が、光さえ吞み込む深淵の闇が男を吞み込み、それも数秒、闇が無くなると、男はボロ雑巾の様に、倒れていた。

「ヒィ！」

周囲の男たちの目には怯えの色しか見えなくなった。

「とつとつ、そいつを連れて消えろ・・・」

「は、はい！」

男達が消え、やっと静かになった。

「・・・銀・・・大丈夫か？」

「・・・クウン・・・」

慧の言葉に、弱々しくも答える銀。しかし、その命は長くないと目に見えて分かる。

「ゴメンな。俺のせいだよな。あいつらに好き勝手言わせてきた俺の・・・お前は俺の変りに怒ってくれただけなんだよな。」

薄々分かっていった。何故、薫に噛みついたのか・・・

最近、薫の嫌がらせが一番酷くなってきたからだ。

今回、銀に見過ごせない位のものだったのだろう。

「・・・・・・・・」

「銀・・・？」

鼓動がだんだん弱くなるのを感じる。血は、闇で止めているが、失われた血は戻すことはできない。

「銀！銀！しっかりしろ！」

このままでは確実に銀の命は失われるであろう。

「銀！」

その胸に抱きかかえ、何度も呼びかけるが反応はもう返ってこない。ほんの微かな鼓動だけが、まだ生きていることを告げるが、もうすぐその鼓動も消えるだろう・・・

「銀・・・死なせるかよ・・・死なせてたまるかよ！」

慧は銀を死なせたくなかった。

「ゴメンな銀、こんな事でしかお前を助けられない・・・恨んでも構わないから・・・だから・・・」

その方法はけして褒められたことではない。銀の存在を変質させるその行いは銀をも不幸にするかもしれない。しかし、それでも慧は銀を助けたかった。それが、自分勝手な我儘だとわかっていても・・・銀を縛ってしまう行いだとしても・・・

『我、深淵をその身に宿すもの・・・名を黒澤 慧、我が血を彼の者へ。我が血を彼のものと我とを繋ぐ証とし、ここに契約をなす。
コントラクト
願うなら、汝に幸運があらんことを・・・契約』

祝詞が唱え終わると銀は光に包まれそして・・・

『ん・・・』

銀色の毛並みから、黒く輝く銀・・・黒銀へと変わっていた。

「銀！」

『主・・・一体・・・私は死んだのでは・・・』

「・・・ごめんな。銀・・・使い魔の契約を・・・お前を縛ってしまった・・・」

コントラクト

契約とは使い魔にしたいものに自らの血を飲ませ、契約のための術式と祝詞を同時に行うものである。使い魔となったものは、存在が変質し、自ら魔力を取り込む事ができなくなり、主からの供給か、例外として魔力のこもった食物の摂取により補充することでしか魔力を得ることができない。

魔力が無くなった使い魔は動くことができなくなり、やがて死に至る。食事からの魔力摂取は決して効率がいいものとはいえず、主からの魔力供給がメインとなる。つまり、主に縛られてしまう様なものののだ。

『・・・構いません。あなたとこうして、歩むことができるなら・・・』

銀は、本能で理解した。自分が慧と離れることはもう無くなったということ、かつての自分とは異なった存在へとなったこと、そして、それを眼の前の主が気に病んでいることを・・・だから、答えた。自分は主と生きることができればそれで良いということを・・・

「・・・銀・・・ありがとう。」

慧は感謝した。出会ってから、いつも自分の一番近くにいてくれた存在に・・・

パチパチパチ！

そこに、いきなり拍手が鳴った。

「誰だ？君は？」

『グルルル！』

いきなりの客人に慧と銀は警戒をあらわにした。

「驚かせてしまったようね。ごめんなさい。それと、私は神風^{かんなぎ} 美夜^{みや}。よろしくね。黒澤 慧？」

（神風・・・？面倒なのに見つかったな。）

「天城ヶ丘学園高等部一年の神風 美夜・・・俺なんかになんの用だ？」

「あら？私を知っているの？」

「そりゃね・・・で？神風財閥の御令嬢がいったいなんの用だ？」

神風とは日本でも有数の魔法使いの家だ。魔法使いを束ね、管理する六つの組織、『六魔天』の内、魔法協会に所属しており、その発言権はかなり強い。

そして、この神風 美夜は慧が転校してそれほど日にちが経っていないのにもかかわらず何度も耳にした名前だ。

もちろん、神風の娘ということもあるが、まだ、一年であるのにも関わらず他の上級生を退け、高等部の生徒会長に君臨しており、魔法の実力は現段階で、魔法協会の大アルカナ22人にひけを取らないと言われている。将来的にはトップの7人、『七大法典』に届く時まで言われている。

（そんな奴がいったい何の用だ？）

「ふふ、そんなに警戒しないでよ。私がここにいるのは偶然よ。でも、私はその偶然に感謝するわ。あなたに会えたもの。」

「・・・」

（俺は、不幸だがな。）

「そんな不幸そうな顔をしないでよ。不愉快よ？まあ、それはいいわ。それよりも、あなた、その子を使い魔にしたんでしょ？そんなことが出来る人間は・・・それだけの事ができる魔法使いは数が少ない。」

（ちっ！見られていたか・・・通りで俺の名前を知っている訳だ。）

契約は誰でもできる訳ではない。通常の魔法は詠唱を唱えることで術式を構成するが、使い魔契約は、複雑な術式の展開と祝詞を同時並列で別々に行うという特殊な方法で行われる上に、それだけの魔力も必要になるからだ。

「そして、使い魔契約は国、若しくは魔法協会他、六魔天の管理の元、行わなければならない・・・なのにあなたは勝手に行った・・・」

また、この契約は危険を伴う上、強引な契約を結ばれるという事件が過去起こったため、契約は合意の上である事を確認する必要がある、国、若しくは六魔天の監視の下行わなければならないことになっている。

なお、魔法に関しては、ほぼ六魔天が仕切っており、国で仕事をしている魔法使いも、六魔天からの派遣が多い。

「・・・何が言いたい・・・」

「つまり、もし、このまま通報すれば・・・」

「違う、お前の目的だ・・・」

「簡単よ・・・あなた、私のものになりなさい！」

腰に片腕を当て、もう片方の腕で、こちらを指差し、言い放った。

慧は少し悩んだ。これまで活動してきた組織は六魔天とはどちらかと言えば敵に当たる。かと言って、今通報されるのは面倒だ。銀に力の使い方も教えなければならない。

そして、選択した。まあ、選択肢などないようなものだが・・・

「選択肢は無い様なものだよな・・・いいだろう。だが、いくつか条件がある。」

「何？ できることなら聞いてあげるわよ？」

「一つ、銀も一緒だ。二つ、俺達は物じゃない。場合によってはお前に牙をむくぜ？ それでいいのなら、いいだろう。」

「ふふ、構わないわ。私は奴隷が欲しいわけじゃない。それに、その子も元々数に入っているわ。」

そう言うと、手を差し伸べてきた。

「よろしく。慧、銀。」

「ああ、よろしく。美夜。」

『よろしくお願いします。』

これが、黒澤 慧と神風 美夜の出会いだった。

この出会いが、どういう結末を迎えるのか、それはまだ分からない。

なぜなら、二人（と一匹）の物語はまだ始まったばかりなのだから。

第一話 慧の新たな家と美夜の目的

元々、この世界には魔力と呼ぶものがあり世界を循環していたが、人は魔力の存在に気付かずに過ごしていた。

そんな時、人に魔力、そしてそれを操る術・・・魔法を教えた存在がいた。

その者の名を『始まりの大賢者 オリジンⅡオブⅡワイズマン』と言う。

しかし、この名は後から勝手につけられたもので、実際に魔法を伝えた存在については分かっていない。

神、天使、悪魔、魔王・・・少なくとも、人ではない何かと言われている。

『始まりの大賢者』により魔法は少しずつ広がっていったが、その行いは世界へ広まる前に潰えた。魔法を教えられた一部の者達が、その力を独占しようと考えたからだ。

もちろん『始まりの大賢者』を始め、その意見に真っ向から対立した者達もいたが、力に魅せられ、溺れたものが多く、『始まりの大賢者』ですらその手にかけ、魔法を独占した。

この際、『始まりの大賢者』を殺した魔法を、神さえ殺す終わりの魔法・・・終焉魔法『エンド・オブ・オリジン原初の終り』と呼び、以降その魔法が歴史の中で使われることはなく、文献も残っていない。

話が逸れたが、その結果、魔法は世界に広まらず、魔法を使えないものが大多数となった。

その後、魔法使いが人を従えるかと思われたが、そうはならなかった。

『始まりの大賢者』との争いで多くの『魔法使い』は死に、この世界の全人工に対し、魔法使いの数が圧倒的に少なくなってしまうこと、『魔法』が万能でないことも理由の一つだろう。

魔法を使えない人々を支配しようとしたが、叶わず、不思議な力を持つ者達として排斥の対象となり、魔法使いは表舞台から追われた。

そして、魔法が使えない普通の人々により、科学が発展した。そんな中、魔法使いはその裏で数を増やしていった。過去の失敗を教訓にし、少しずつその数を増やしていき、魔法使いを管理する組織もではじめた。排斥運動も収まり、過去の事として、忘れられていった。

そして、ある時を境に人は再び魔法を知ることになる。革命家・クストフⅡRⅡフトスク・・・この男により魔法による革命が起こったからだ。

この男が革命を起こした理由の一つ。再び魔法を世界に広めるためだ。これを支持する魔法使いは多くなかった。

時期尚早という意見が多かったのだ。まだ、魔法社会の秩序の基盤が出来上がったばかりで、今の状態で世界に魔法が知られれば、再び魔法を独占しようとする者達や魔法で犯罪を起こそうと言う

者達が出てきた時、対応が満足にできず、再び排斥の対象となってしまう。それを恐れての意見だった。

しかし、クストフによる革命は進み、始め半信半疑だった人達も魔法の存在を認知せざる、おえなかつた。既に世界の情報を得る技術は浸透していたため、その情報に歯止めをかけることは出来ず、クストフおよび革命軍『新たなる世界』を倒した頃には魔法は世界に浸透してしまっていた。

魔法使いを管理してきた組織や国々はこうなっては仕方がないと考え、むしろそれを利用し、魔法を世界に広めることにした。もちろん当初からの危惧はそのままだが、このままではむしろ世界に混乱が生じてしまうからだ。

そして、その危惧は現実のものとなり、犯罪が増加した。また、魔法を独占しようとしたもの達もいた。しかし、その危惧は予定されていたものであり、それに対抗するため、魔法使いを管理してきた組織が中心となって対魔法犯罪へ対応を始めた。

その組織は全部で6つ、『魔法教会』、『聖王騎士団』、『盾を掲げる者』、『賢者の知恵』、『世界樹の頂』、『神々の使途』、現在六魔天と呼ばれる組織だ。

この組織と国々が中心となって、魔法犯罪に対する、マニュアルの作成や人材の育成、そして、魔法を正しく人に伝える方法が進められた。

ちなみに、その一つが、『魔法使い』を資格の一つとすることだ。もちろん資格が無くても魔法は使えるが、制限が設けられる。もし、資格もなく制限を越えた魔法を使えば捕まることもある。

また、『魔法使い』の資格にはランクがあり、ランクが高い程様

々な特典と共に、責務が発生する。

それは、六魔天からの協力要請に応えること。任意という事になってはいるが、一度断ると目を付けられ、なかなかランクを上げることが出来なくなる。

再び話が逸れたが、これが、今の世界の形だ。

魔法が当たり前に存在し、それが生活の一部となった世界。科学と魔法が融合した世界。

それでも世界は未だ秘密を抱えている。

この世界に魔法を扱う方法を持ち込んだものは一体何者なのか・

この世界は未だ不思議に満ちている・・・

「ところで慧、これからのことを話したいのだけど・・・とりあえず、その服、着替えてきてくれる？あと銀いんだったわね？その子も血の匂いが凄いわ。洗って来てあげたら？」

慧の服は銀の血で汚れ、銀も色が黒く変ってはいるが、血の匂いが凄い。早く洗わないと落ちなくなるだろう。

「と、言われてもなあ・・・帰る場所はもう無いし、引っ越してきたばかりだから、行くあてもないんだが・・・」

あの家にはもう帰る気はない。また、引っ越してきたばかりのた

め、親しい友人もない。以前住んでいた所なら、今の自分達を見ても受け入れてくれる奴に心当たりはあったのだがそれも無い慧は困り果てた。

目の前に川があるのでいっそのこと川で洗おうか・・・そんなことまで考えている。

「帰る場所が無い？詳しく聞かせてもらえる？」

「・・・他言無用で頼む。」

美夜が信用に足る人物であることはこれまで様々な人を見てきた慧は一目でわかった。また、銀も始めの警戒以外は大人しいものである。どういう人物か、性格などは分からないが、大丈夫だろうと判断し、こちらに来ることになった経緯から話した。

「そう、あの花咲姉妹が・・・」

「何だ？知っているのか？」

「そりゃそうよ。花咲家も神風に劣らない家柄よ？彼女の母親が本家の人間だから、あの姉妹も本家の血筋で魔法の腕もかなりのものよ。」

「本家！？桔梗さんが？」

「ええ、家は彼女の姉が継いだのだけだね。」

自分の父親の再婚相手が結構な名家の出だとは知っていたが、まさか、神風に劣らない程の家しかも本家の出だとは思ってもしなかった慧である。

何故、それほど名家である花咲家を慧か知らなかったのか、それは、歴史が新しいと言う事と、花咲家は六魔天の一つ『世界樹の頂き』に所属しており、慧が所属していた組織とはあまり絡まなかったからだ。逆に魔法協会とは事ある度に争っていたので、詳しく知っていたのである。

「まあ、花咲家のことは良いわ。それよりも今は、あなた達の今後の住む所ね・・・」

美夜は少し悩むそぶりを見せたが、直ぐに決断した。

「いいわ、あなた達、家に来なさい。部屋は余っているし、私のもになったんだし、都合がいいわ。」

「それは有りがたいが・・・タダじゃないかな？」

「私としては別にお金を請求するつもりはないのだけど・・・そうね、あなた達がそれを気に病むようなら、家の家事を手伝いなさい。それでいいわ。」

「・・・わかった。それが妥当だろう。これから世話になる。」

『お世話になります。美夜。』

「ええ、じゃあ、とりあえず・・・迎えの車を呼ぶからそこにいなさい。目立ちすぎるわ。」

そう言い、土手を上がり、携帯でどこかと連絡を取り合っている。

「なんか知らんが、運が良かったのかな？」

『どうでしょう？主は運が良い方ではなかったと思いますが？むしろ、面倒事を引き寄せていたような？』

「あ、やっぱりそう思う？せめて、魔法協会の『七大法典』や『大アルカナ22人』に合わないことだけでも願うかな。」

慧は遠い目をしながら希望的観測を口にする。

『主達は彼らと、良く戦っていましたからね。でも、彼女の素情と主の運の悪さから考えるとそれは難しいかと・・・』

銀はそんな希望をあっさり切り捨てる。

「だよなあ・・・まあ、なんとかなるさ。」

『そうですね。なんだかんだで、なんとかなりますよ。』

一人と一匹は気楽に考える事にした。難しく考えてもどうにもならない。お気楽思考は慣れたものだ。

「待たせたわね・・・って、何を二人して遠い目をしているの？」

電話を終え戻ってくると、川を眺めながらも、どこか違う場所を見ている様な二人に若干引いた美夜であった。

所変って、ここは美夜の家。高級マンションの一室。このフロア

全てが美夜の家だそうだ。しかも一人暮らし。贅沢である。

ちなみに何故一人暮らしか聞くと・・・

「お父様が見合いだ、なんだと五月蠅いのよ。」

とのことだ。更に、お嬢様が一人暮らしで問題無いか聞くと

「あら、心配してくれるの？大丈夫よ。私を襲おうとしたら、大事な部分を消してあげるから。」

思わず急所を隠した慧であった。

「ああ、さっぱりした。風呂、サンキューな。」

部屋に入ってすぐ風呂に案内され、銀と共にシャワーを浴びた。着替えは迎えに来たメイドさんが持ってきた。サイズをどうやって知ったかは定かではない。

「それじゃあ、座って。これからの事を話しましょう。」

「ああ、そうだな。」

美夜の向かいのソファに座り話す姿勢になる。銀は慧の足元に控えている。

「まずは、そうね。家事は一通りできる？」

「ああ、一人暮らしは長いからな。大丈夫だ。まあ、お嬢様のお口に合うものを作るかは知らないが、普通に食えると思うぞ？」

「そう、なら、分担にしましょう。そうね・・・」

こうして、とりあえずは、これから暮らすに当たっての注意事項やら何やらを話合った。1フロア丸々美夜の家なのだから別々の部屋でいいのでは？と慧は聞くが、美夜は

「一々出入りされるの、面倒じゃない。」

と一蹴。同じ部屋で過ごすことになった。

「さて、とりあえずここまでにして、御飯にしましょう。」

「わかった。今日は俺が作ろうか？」

「そうね・・・お願いするわ。あなたの腕、見ものね。」

「お手柔らかにお願いするよ。」

その後、夕御飯を食べ、食休みを入れてから、再びこれからのことに戻る。

ちなみに、慧の料理に対する美夜の評価は・・・

「・・・私より旨い・・・」

不満気だった。

「それで、さっきの続きね。なんであなたを私のものにしたかというと、私がこれから進む道に優秀な人材が必要だからよ。」

「これから進む道？魔法協会の『七大法典』のことか？」

美夜の実力ならこのまま精進を怠らず行けば辿りつけると言われている。それなら、別に慧がいる必要はない。

「違うわ。私は魔法協会に所属し続ける気はないわ。」

その言葉に若干驚く慧。将来を約束されているのにも関わらず自ら捨てると言っているのだ。

「何故か聞いていいか？」

「ええ、今の魔法協会を含む六魔天は国、いえ、世界にも影響力がある。でも、それぞれの組織で閉鎖的なうえ、技術を独占している。そして、なにより一番の問題は、一般人を顧みていないこと。」

そう。確かに、六魔天の影響力は絶大だ。その技術も一般の『魔法使い』よりワンランク以上だろう。

『魔法使い』という資格をもつものにはフリーと言われる者と、六魔天に所属する者に分けられ、結構な違いがある。『魔法使い』の資格を持つ者の大概は六魔天のどこかに入ることを目標としている。

六魔天は魔法を管理していた者達がそれぞれの思想に分かれ出来上がり、現在は魔法の管理と対魔法犯罪組織として機能している。

これらの理由により、国や警察に所属するフリーの『魔法使い』は少なく、六魔天の『魔法使い』を派遣してもらっている国や警察がほとんどだ。

美夜の言う閉鎖的や魔法の独占とは、本来魔法の知識は有用なものは一般に公開されることになっているのだが、そのほとんどの権利を六魔天が持っており、さらに、結構な数の魔法技術と知識を隠匿しているからだ。

更に、魔法犯罪組織は独自の魔法理論や禁忌と呼ばれる魔法に手を出していることが多い。それを狙い、六魔天同士で争い、犯罪組織を取り逃がしたり、果ては一般人を巻き込むことも多くなっている。

もちろん、全ての六魔天やそこに所属する人がそうとは限らないが、その様な風潮が強いのは確かだ。

それでも批判が少ないのは、それだけの力と実績があるからだろう。

「私は、そんな縛られた組織に所属し続けるのはごめんだわ。なら、どうしたらいいか、一個人では限界がある。なら、自分で組織を立ち上げればいいじゃないってね。」

「ふーん。随分と正義感がお強いことで。」

「違うわよ。ただ、私がそうしたいだけ。私が守りたいものは教会じゃ守れないと思ったから。自分勝手な我儘よ。」

「ククッ、それは教会と同じじゃないのか？」

「そうね。でも、目的はちがうわ。」

その意志のこもった目で見られ、慧は正直迷った。その意志、考

えは慧が以前所属していた組織と同じだ。だが、その道は綺麗事だけでは済まされない。

目の前の少女を、みすみすそんな世界に踏みいれさせていいのか、という考えまで至り、思いなおした。目の前の少女は多分とつくに踏みいれている。そしてなお、どうにかしたいとあがいていると。

「そうか、話は分かったが、一つ訂正させてくれ。俺は美夜が思う程優秀じゃないぞ?」

「嘘ね。だって、その子と使い魔の契約を交わしたじゃない。」

「いや、確かにそうだけど、だからといって、美夜が求める程かと言われるとそうでもないぞ? 学校の成績は平平凡凡だし、特技も特にななし。」

「そう、あなたがそこまで言うならそれはそれで良いわ。」

美夜は、納得はしていないが、その事を追求するのは止めた。

「で? 手伝ってくれるの? くないの? まあ、別に手伝ってくれなくても追い出さないから安心していいわよ?」

その言葉を聞き、慧は再び考える。以前所属していた組織の件がある・・・が、一度止めた以上、また戻るのも気恥しい、複雑な男心だった。

そして、出した結論は・・・

「わかった。俺なんかに何ができるか分からないが出来るだけ協力

しよう。」

その言葉を聞き、美夜はとても安堵した表情となった。

「そう、改めてよろしく、ね。それじゃ、互いの属性について確認しましょうか。」

魔力とは生きているものなら、その大きさは様々であるが、誰でも持っているものだ。そして、個人にはそれぞれに合った適正属性というものが一人一つ必ずある。しかし、まれに二つや三つ持っている人もいる。

なお、属性の相互作用から、最大で3つとなっている。

「ちなみに私は無属性よ。」

「俺は闇だ。」

属性は大きく火、水、風、土、光、闇に大別される。また、雷や氷、時や無はこの基本属性のバランスと合成により発生する属性で、この属性を持つものは例外なく、合成属性の魔法しか使えない。

例えば、風と水を合成することで氷となるが、氷の魔法を使えるのは氷属性をもつものか、風と水属性をもつものとなる。

しかし、氷属性のものは氷属性以外使えないが、風と水属性のものは風と水と氷を使えることになる。

「そう、ところで、気になっていたんだけど、その子どうして銀色に戻っているの？」

銀の毛並はいつの間にか、黒銀色から銀色に戻っていた。

「ああ、それは、契約の際に俺の魔力が強くてだからだと思う。今は落ち着いたから元に戻っているんだ。因みに、銀の属性は氷な。」

「え？その子、ただの犬じゃないの？」

通常普通の動物には属性は無い。もちろん魔力はあるし厳密に言えば属性もあるのだが、魔力が低いため、属性自体判別できず、出てこないからだ。

つまり、銀は珍しいおおか・・・犬なのだ。

「ええ、そうです。俗に言う魔狼と言う奴です。」

「へえゝ凄いのね。」

『当たり前です。主の使い魔ですから』

胸を張ってそう答える銀に、慧は恥ずかしそうに頬を掻き、美夜は微笑ましそうに見ている。

「ところで、慧。学校は？」

「美夜と同じ所の中部部3年。最近転校してきた。」

「・・・ああ！あなたがあの・・・」

何かに思い当たったのか、納得した様に頷いている。

「えっと、「あの」とは？」

「だって、こんな3学期の年明けに転校なんて珍しいにも程があるでしょ？だから結構な噂になっていたのよ。」

慧の知らない所で何故か面倒なことになっていたらしい。しかし、この様子だと名前や顔までは広まっていないうだ。

「そっか、私のことを知っていた様だし、同じ学校とは思っていたけど、後輩だったのね。」

「ええ、敬語のほうがよろしいですか？」

「いいわよ、今までどうりで。まあ、いいわ。明日は休みだし、あなた達に必要なもの、色々揃えなきゃね。」

そう言いながらソファを立つ。

「じゃあ、今日はここまでね。ついてきて、あなた達の部屋に案内するわ。」

「ああ、よろしく頼む。」

慧の長い一日が幕を閉じ、そして、慧にとって、少なくとも退屈しない日々が幕をあける。

第二話 慧と美夜と三姉妹く屋上での対峙く

「ほら、慧、もたもたしないで。さっさと行くわよ！」

「ちょっと待て、美夜！銀、スマンが留守番頼むな？」

『ええ、行つてらっしゃい。主、美夜。』

「「行つてきまあす！！」」

こうして、今日の幕が上がった。

慧達はあの後直ぐに眠りに就き次の日、予定通り慧達の私物を買
いに行く事となった。慧が必要ないと言うもののまで次々と買われ、
私物なのに自分で選ぶことはほとんどなく、全て美夜が選んだ。

そうしたのは慧自身にも原因があり、最初は二人で意見を出し合
っていたのだが、慧に聞くと必ず、色は黒。なるべく地味なやつ。
としか答えないため、諦め、美夜が全て決めていった。

その日はそれで終わり、次の日は銀に力のコントロールを教える
のに費やした。銀は呑み込みが早く、今週にでも基本的なことは教
え終わると慧は予想している。

美夜はその際、興味深そうに一人と一匹を眺めていた。

美夜曰く面白かったそうだが、慧にとっては何が面白いのかさっ
ぱりだった。

そんなこんなで休み明け、学生である以上、学校へ行かなければ

ならない。

が、慧は美夜が眠りに就いた後も自室で銀に使い魔となったことで、何が変わったのか、何に気を付けなければいけないかなどを遅くまで教えていた。

その結果、二人とも寝坊してしまい今に至る。

「今さらながらだが、良いのか？一緒に登校して？学校で騒がれないか？」

「別に気にすることは無いと思うわよ？少なくとも私は気にしない。」

その当事者とは思えない言葉に慧は呆れるが、こいつなら周りを黙らせるなど訳ないだろうと思いとどまる。が、それは自分には当てはまらないことに思い至る。

「いや、美夜はいいが、俺はどうしろと？」

「黙らせればいいでしょう？」

さも当たり前のように言う美夜。

「いや、俺はそんな力ないから！」

「なら遅刻する？」

「ぐっ・・・」

言葉を詰まらせる慧。遅刻する位なら、休む方が良いのだが、ここまで来て戻るのも面倒だ。しかし、学生服のまま近辺をうろつく和学校へ連絡が行きかねない。そうすると、父親にも連絡がいくだろう。結果、更に面倒なことになる。

走りながら、そこまで考え、仕方ないと諦める。まあ、転校したばかりで親しい友人もいない。そんなに面倒な事にはならないだろう・・・と結論付ける。

「つて、言うか、何で美夜まで寝坊しているんだよ？」

そう、何故か美夜まで一緒になって寝坊していた。昨日はそれほど遅くまで起きていなかったにも関わらずだ。部屋で何かやっていたのか？

疑問に思った慧は美夜に聞いてみた。

「うつ・・・それは・・・」

しかし、その質問に直ぐには答えず、目を泳がせ追求を避けようとする。

が、まだ、学校まで距離があるため、逃れられないと悟ったようだ。

そして、次に出てきた言葉は慧にとって予想外のものだった。

「これでも年頃の少女なのよ？一つ屋根の下に同年代の男がいれば、緊張しない訳無いじゃない！／／／／／」

そんなことを、頬を染めて言う美夜に慧はなんというて返せばいいか分からず・・・

「・・・そうか・・・スマン・・・／／／／／」

と、答えるしかなかった。

あれから、二日経ち、もう慣れたものだと思っていたのだが、実は結構繊細だったらしい。

「・・・・・・・・・・」

しばらく互いに黙り走っていると、登校する生徒達の最後尾が見えた。どうやら、遅刻は免れたようだ。

「もう、大丈夫なようね・・・」

互いに走るスピードを落とし、美夜と慧は今日の予定などについて話しながら、登校する生徒に混ざり、遅刻しない程度のスピードで歩くが・・・

「うつ・・・」

注がれる視線、視線、視線の嵐。まあ、それもそうだ。学校で知らぬ者はいないであろう少女と、更にその容姿も、黒く長い髪に深い蒼の瞳、百人中百人が綺麗と称するだろう造形の女性の横を、極普通の男子学生が親しそうに話ながら歩いているのだ。注目しない訳が無い。

（クッ・・・やはり、時間をずらすべきだったか。明日からはそうしよう！）

そう決意する慧であったが、その決意は無駄になる事を慧はまだ知らなかった。いや、この時の美夜の表情を良く見ていれば少しは予測できたかも知れないが、視線に晒され、俯いている慧には見る事は叶わなかった。

その、楽しそうな表情を・・・

そんなこんなで校門をくぐり、ここからは別行動になる。

慧は中等部、美夜は高等部のため、校舎が違うからだ。

「それじゃ、美夜、また放課後！」

「ええ、ちゃんと、待っていなさいよ？」

「はいはい、分かっていますよ。」

一緒に帰る約束を交わし二人は別れた。

そして、下駄箱の前、上靴を取るため、開けるとそこには一通の封筒が置いてあった。

念のため、カミソリが入っていないか確認し、中を開けると、そこには・・・

「今日の放課後・・・屋上ね・・・」

一見ラブレターに見えるだろうが、差出人が誰なのか検討がつく慧としては憂鬱以外のなにものでもなかった。

そして放課後、慧は屋上に向かっている。

「はぁ、今日はもう疲れたのに追い打ちだよなぁ・・・」

あれから、教室に入ると慧の予想に反し質問攻めにされた。それだけ衝撃の出来ごとだったらしい。男女関係なく押し寄せてきて、中には「私のお姉さまがー!」とか、「このリア充が!」などよく分からないことを言っていた奴らもいた。

それらの質問を何とか誤魔化し、やっとの事で放課後・・・

美夜には予め遅くなる事を告げ、屋上へ向かっていた。

「さて、俺の予想通りの相手なら・・・また、面倒なことになるよなぁ・・・」

憂鬱そうな表情をしながら、屋上の扉を開ける。すると、予想通りの人達がそこにいた。

「逃げずに来たようね?」

「同じ学校なんだ。逃げたら余計面倒な事になると思ったからな。」

花咲3姉妹がそこにいた。

「で、こんな所に呼び出してなんの用だ?告白・・・って雰囲気じゃあないよな?」

その質問に答えるのは代表して長女、葵。

「ふん！決まっているでしょ？あの後どうしたの？結局帰ってこなかったけど？」

「言わなかったか？もう帰らないと？それに、俺がどうしようと、もうお前らには関係ないはずだが？」

当たり前の事を聞いて来る葵に対し何を今さらと言った風に答える慧。

「・・・まああなたの事なんてどうでもいいけど、とにかく今日は家に帰ってきなさい。」

「なんで？俺が帰る理由はないぞ？」

葵の言葉に心底不思議そうに答える慧に葵と薫は苛立ってきたようだ。

「お母さんがあなたを心配しているからじゃない！」

「そうよ！それに、あの約束忘れたの？帰ってこないなら・・・」

「好きにすれば良い。」

「「なっ！」」

俺がどうでもいいように言う二人とも次の言葉が出なくなった。

「桔梗さんには悪いが、帰る気はない。帰る場所でもない。帰る場所是他に出来たからな。それと、写真をばら撒くのはいいが、ちゃ

んとデータ残っているのか？」

「え？」

「撮ったのは携帯電話だろ？ちゃんとロックかけていたか？」

次女、薫は驚きながら、携帯をいじりだし、写真を確認し始めた。まあ、もう後の祭りだけだな。

「・・・消えている。あんた！人の携帯を勝手に！」

「悪いとは思ったけどな。大丈夫。それ以外何もしていないし見ていないから。怨むなら自分の管理能力のずさんさを怨むんだな。」

慧はそう言うのと屋上を出て行こうとするが・・・

「待ちなさい！」

「なんだよ？もう話は終わりだろ？」

「ふざけないで帰ってきなさい！でないと痛い目見せるわよ？」

そういうと、長女は魔法を展開し始めた。

魔法を使うに当たり制限というものがあるが、日常生活を送る上では大して気にするものではない。魔法が生活の一部となっている今、この制限とは、日常生活に必要な魔法を基準としている。

そのため、どの学校でも日常生活に必要な魔法の知識や技術は教えており、普通の学校は公共の場と同じ制限である。しかし、これ

にはいくつか例外がある。

その一つが、ここ、天城ヶ丘学園だ。ここは魔法をより詳しく学ぶ場であるため、制限があると勉学に支障をきたす。よって、制限は緩くなっている。

こういう場所はここ以外もいくつかあるが、どこも六魔天の管理下にあるため、何か不足の事態が起こっても直ぐに対処できるからというのがその理由ある。

もちろん、魔法書も出回っているため独学でどうにかする事もできるし、天城ヶ丘学園のように魔法を教える場所もあるため、制限を無視する者達もいる。

そういったもの達に対応するのが、六魔天や警察、そして、依頼を受けたフリーの『魔法使い』となる。しかし、事前にそれを感知したりすることは未だ出来ていないため、対処は後手になっているのが現状である。

（おいおい、こんなところで、その魔法？頭に血が上って周り見えていないだろう？）

葵が展開している魔法は学園内ということもあり、咎められないのをいいことに上位の魔法を放とうとしている。

こういうことがあるのが、結構問題になっていたりするのだが・
・その対処は学校ごとに独自にっていたりする。

もちろんこの学園にもあるのだが・・期待はしない方が良さそうだ。目の前のお嬢様が何かしら手を事前に打っているだろう。

慧はどうするか考える。相手の言葉に頷くのは論外・・・魔法は、こいつらに見せたくない。と、なると当たる瞬間に闇で防御し、やられた不利をするのが妥当か・・・後は屋上から飛び降りて逃げれば・・・と、そんな事を考えながら周囲に気を張り巡らせていると、誰かが屋上に上がってくる気配を感じた。

「この魔力は・・・」

そこで、とうとう魔法が完成し、撃ち放たれた。

「『サラマンダー・エクスプロージョン』」

この魔法は、火を纏ったトカゲを複数召喚し、そのトカゲに触れると大爆発を起こすという、危険な魔法だ。しかも、爆発は連鎖する。

トカゲの数や大きさは術者の技術に比例し、今回は1m級が12体。大半は20?のトカゲを2匹〜4匹なので、大変優秀なことが分かる。

「まずい・・・」

何が不味いのか、それは、この魔法は触れると爆発する。つまり、触れる前から闇を展開しなければならず、使おうとすると見られてしまう。しかも、ここは屋上、逃げ場は・・・やっぱり飛び降りるしかない。

そう思い、先ほど感じた魔力のことは頭の隅に追いやり、屋上の柵へ向かおうとするが、周り込まれてしまった。

「やりなさい!」

葵のその言葉にトカゲは一斉に慧に飛びかかる。

慧は覚悟を決め、目を瞑り、齒を食い縛り、耐える事を選んだ。

が、何も起きなかった。何故なら・・・

「まったく、遅いと思ったら、こんなところで何をやっているのかしら？ 慧。」

「美夜！」

慧が感じた魔力の主、美夜がそこにいて、トカゲを無に還したからだ。

「あなたは、神風 美夜！ いったいなんのつもり！？」

「どういうつもりも何も、慧は私のものよ？ 自分のものに手を出されて黙っている訳がないでしょう？」

「あなたのもの？ 一体どういうこと！？ 説明しなさい！ 慧！」

「え？ そこで俺？」

何故か、説明を目の前の美夜ではなく後ろの慧に求める葵。その表情は普段は、美夜に劣らず綺麗な顔立ちなのだが、今は鬼の样だった。

「それは簡単よ。だって慧は今、私と暮らしているんですもの。」

また、その問いに答えたのは美夜だった。それが気に入らなかったのか、葵は、今度は美夜に食ってかかる。

「ちょっと、神風さん。ベタラメ言わないでくれないかしら？」

「あら、事実を述べたまでよ？花咲長女。」

「あなたは！私は花咲 葵！長女なんて名前じゃないわ！何度言ったらわかるの！」

「いや、この学園に花咲は3人いるじゃない。区別するためよ。」

二人は犬猿の仲のようで、言争いをはじめ、慧はそこから気付かれない様に距離をとった。

「あ……の……」

すると、珍しい事に三女の董がこっそりと慧に話かけてきた。

「何？」

慧は正直この子の扱いがわからない。長女や次女は嫌がらせをしてきており、明確に嫌われていると分かるので、対処の仕方も決まってくるが、この三女はどうにも解らない。怯えているのは確かかなようだが……

「えっと……神風先輩と一緒に暮らしているって……本当ですか？」

「ああ、本当だ。帰る場所も行くあてもなかったからな。」

「私達・・・の家・・・じゃ、駄目・・・ですか・・・？」

その言葉に若干驚き、何のつもりか分からないが、ただ事実を述べた。

「ああ、無理だ。正直、あの家じゃ気が休まらないし、何より、俺の親父がとはいえ銀を傷つけた。そして、誰も治療しようとしなかった。帰る理由もない。」

「そう・・・ですか・・・」

三女は沈んだ表情になった。そして疑問に思う。何故この子が今さらそんなことを・・・と。

「なあ、何でそんなことを聞くんだ？ 君は俺を怖がっていただろう？」

「それは・・・私は男の人が苦手だから・・・お義父さんも慣れるまで時間がかかった・・・」

「つまり、君は俺のことを嫌っていなかったと？」

「はい・・・」

三女のその言葉に少し嬉しく思うものの、それでも帰る気にはならなかった。

「悪いな。それでも帰らない。」

「そう・・・ですか・・・なら!なら・・・お兄ちゃんって呼ぶだけでも、駄目ですか?」

「・・・へ?」

三女の思わぬお願いに変な声を出してしまう慧。

「あ・・・の・・・姉妹だけでしたから、兄というものに憧れていて・・・その・・・」

赤くなりながらしどろもどろに話す三女、堇を見て、まあ、いいかと思う慧だった。

「ああ、好きに呼べ。」

「え? いいんですか?じゃ、じゃあ・・・慧お兄ちゃん?」

「あいよ。」

「ふふふ／＼／＼／＼／＼」

嬉しそうに笑う堇を見て、こんな表情もできるんだなと今さらながらに思う。

そんな間もまだ言い争いを続ける二人・・・いや、いつの間にか次女も含め三人になっている。

「なあ、堇。」

「え! 堇!?」

名前で呼ぶと驚かれた。

「ん？何か問題あったか？」

「い、いえ、問題ないです！堇でいいです！」

「そ、そうか、なら、堇、あいつら、なんであんなに仲悪いんだ？」

疑問を口にする。そう、いくらなんでも仲が悪すぎる・・・というか、花咲長女が一方的に敵視しているみたいだ。

「えっ・・・と、葵お姉ちゃんには好きな人がいるんです。でも、その人は神凧先輩の事が好きで、だけど、神凧先輩はその人のことが眼中になくて・・・」

「それで、その不満が美夜に爆発している・・・と、つまりは嫉妬か・・・」

「はい。お兄ちゃんが来た時、一緒に暮らしていることを知られないよう強要したのは、その人に家族とはいえ、血の繋がらない他の男の子と一緒に住んでいると知られるのが嫌だったからで・・・」

なるほど、そういうことか。

「で？次女は？」

「薫お姉ちゃんは葵お姉ちゃんをとても尊敬しているので、だからだ・・・」

理由を聞いて納得すると同時に、なんだかなあと複雑な気持ちになった。姉妹がしてきた事を許す気にはならないが、責める気も起さない。まあ、次女は別だが・・・

「・・・お兄ちゃん？」

押し黙る慧に、怒らせたのかと怯えながらも声を掛ける。

「ん？ああ、まあ、納得はした。それに益々帰らない方がいいことがわかった。」

「へう・・・」

その答えに落ち込む堇。

「そう落ち込むな。まあ、戸籍上とはいえ、俺が堇の兄であることには変わらないんだから。」

そう言いながら堇の頭をなでてやると、嬉しそうに目を細める。

「さて、そろそろ止めさせるか・・・」

撫でる手をとめ、言い争いをしている3人へ足を向ける。

「おい！美夜！そろそろ帰ろう！」

「ええ、そうしましょう。」

声を掛けるとすんなりとこちらへ振り返り、歩いてくる。

「待ちなさい！」

葵が制止するが

「それじゃあな、堇。またな。」

「はい。またです。お兄ちゃん。」

「あら、慧、何時の間に堇と仲良くなったの？それじゃあ私も、またね、堇。」

「は、はい。神風先輩！」

完全に無視し、二人は屋上から消えていった。

残った姉妹たちは・・・

「ね、姉さん？」

「お、お姉ちゃん、落ち着いて・・・」

怒る姉を宥めるのに苦労したという。

慧達は帰宅の途につき、今は夕食後のお茶を飲んでいる。

「ところで美夜？何で中等部の屋上なんかに来たんだ？」

ふと、疑問に思った事を口にしてみる。遅くなると連絡はしたが、

場所は伝えておらず、来るとは思っていなかった。

「ん？魔力の気配を探して、そしたら花咲姉妹と一緒にだったからね。悪いとは思ったけど、気になったからつい・・・」

各個人が持つ魔力の気配は違う。何故かは知られていないが、魔力は本来無色なのだが、人や意思を持つものを通すことによって色がつく・・・つまり個性が表れる。

その個性を覚えることで、人により範囲はことなるが、魔力で人を識別することができる。が、その差は人によるので、間違うこともあり、確実に出来る者はそれほど多くはない。

「まあ、良いけど・・・一つ聞いていいか？」

「何？」

慧はあの時、疑問に思ったことを口にする。

「うちの学園にも、魔法を取り締まる委員会か何かあるよな？でも、あの時、長女があれだけの魔法を使ったにも関わらず、何もなかったが、あれはなんでだ？」

そう、本来あれだけの魔法なら感知されてもおかしくはないはずだ。考えられる理由としては、長女が予め手を打っていたか、若しくは、この学園の全体的なレベルが思った程ではなかったか・・・

「ああ、だって、彼女がそれを取り締まる委員会、風紀委員の人間ですもの。」

「・・・は？それって、つまり、その委員会の人間なら、どんなに

魔法を使っても咎められないって事にならないか？」

つまり、長女が所属している風紀委員は、通常の風紀委員の仕事の他、学園での魔法の乱用などを防ぐのが仕事となる。

腕の立つ生徒や、『魔法使い』の資格を求める者、将来六魔天に所属したいと思っている生徒の大半はここに自ら志願し、入っている。

特権として、学園内でどんなに魔法を使っても咎められない。

予め手を打っていたかと思われたが、そうではなく委員会の人間だったから・・・しかし、なら余計不味いと慧は言う。

学園内での魔法の使用には本来、制限はあまりないが、取り締まりなどは学園の自治に任せている。なので、下手に大規模魔法を使用しようとする、この学園なら、風紀委員が飛んでくるが、風紀委員が同じような魔法を使おうとしても、止めるものはいないと言う事になる。

「ええ、困った事にね。でも、対策も一応あるのよ？」

それを防止するため、二つの勢力がある。一つはもちろん生徒会。そしてもう一つは『魔法部』という部活らしい。

本来なら、この三つが監視し合いそれぞれの勝手を防ぐ事になっているはずなのだが・・・

「困った事に、今って生徒会は私と副会長の二人だけで行っているのよね。」

聞いた話によると、今代の生徒会役員の大半は三年生で、もう辞

めてしまっており、今まで二人で運営してきたらしい。そのため、そちらには手が回せなかったらしい。

「はー、すごいな。でも、何で役員を募集しないんだ？選挙か何かあったんじゃないのか？」

当然の疑問を口にする慧。

「ええ、だけどそれは私が却下したわ。どうせなら優秀な人材が欲しいじゃない？」

「つまり、美夜のお眼鏡に適う人物が副会長しかいなかったと？」

「まあね。いたとしても、風紀委員に所属していたり、拒否されたりでね？」

「ふーん」

美夜なら強引に引っ張っていきそうなものなのにと思ったが、口にしない。

「因みに、慧は来年、生徒会への所属は確定ね。」

「ぶっ！」

思わず飲んでいたお茶を吹き出してしまった慧であった。

「汚いわね、もう。」

そう言いながら、布巾で、飛び散ったお茶をふき取る美夜。

「ゴホツゴホツ、すまない・・・じゃない！なんでそうなるんだよ！」

「あら、言ったでしょ？私が目指す組織を手伝ってくれるって？」

「おい、まさか・・・」

「ええ、そのまさかよ。」

美夜は、どうやら生徒会を完全に私物化しようとしているらしいかった。

「それは、いいのか？」

「問題ないわ。生徒会の仕事のことも考えた上でも都合がいいもの。」

自身満々にいう美夜に対し、呆れ顔の慧。

『ところで、美夜、その『魔法部』はどうなったのですか？』

今まで、力のコントロールの練習をしていた銀が^{イシ}気になったのか、それを中断し、美夜に聞く。

「そうだったわね。『魔法部』は魔法の研究のため作られた部活で、そのため、魔法を使用しても風紀委員に咎められない。代わりに、風紀委員や生徒会を監視する役目を負っているのだけど・・・困ったことに、魔法部は活動禁止なのよ。」

曰く、部活塔を魔法の実験に失敗して半壊させてしまったらしい。所属していた部員の数それほど多くなく、腕も経つので人がはいなかったらしいが・・・

「まあ、そういう訳で、今は風紀委員の独壇場というわけ。」

「ふうん。それはまた、面白くない話だな。特に、長女がそこに所属しているのは・・・」

向こうも表立って何かしてはこないだろうが、目の敵にされている以上は、慧の立場は悪くなる事だろう。

（ん？待てよ？）

「だから、生徒会・・・なのか？」

「ええ、生徒会に入れば、向こうも簡単に手出しは出来ないでしょうし、あなたも気にせず魔法が使えるからね。」

「といっても、俺の属性は『闇』だからな。あまり、人前で使いたくはないんだよ。」

属性にも様々あるが、『闇』の属性を持つものは極悪人が多い。そのため、『闇』の属性を持つだけで、忌み嫌われるものも多いる。

美夜の様に、簡単に受け入れる人物は珍しいのだ。

「それを知って良く、俺を誘ったな？」

「あら？あなたは極悪人なの？違うでしょ？」

美夜はさも当たり前前の様に言い放った。その様に言ってくれた人は少なく、嬉しかったのだろう。頬を少し紅くし、美夜から目線を逸らした。

「私としてはむしろ何故、正直に話したかが気になるわね。知られたくないのなら、私にも嘘をつけばよかったのに、そうしなかったのは何故？」

その問いに、慧は美夜を正面から見つめ答えた。

「俺の属性が『闇』であることに後ろめたさはないからだ。むしろ、誇りに思う。魔法を人前で使用しないのは、面倒事が嫌いだからだ。必要なら使うさ。」

「ふふ、そう・・・慧の魔法が見られるのを楽しみにしているわ。」

「いや、だから、お前が思う程凄くは無いからな？」

慧はそう訂正するが、美夜は受け付けなかった。慧の力を確信しているようなその振る舞いに困り果てる慧だった。

「ところで美夜、今日の生徒会の仕事は無かったのか？随分と早かったみたいだが？」

「まさか、もうすぐ卒業式なのよ？あるに決まっているじゃない。」

何を当たり前のことをと言った様に言う美夜。

「じゃあ、何で早かったんだ？仕事は？」

「・・・・・・・・」

目を逸らす美夜に、慧は確信した。

（副会長に全て押しつけたな？）

そのころ、学園の生徒会室では・・・

「美夜の馬鹿くっく！」

泣き叫ぶ副会長の声を聞いたものがいたとかいなかったとか・・・

第三話 慧、家族と訣別

三姉妹との屋上でのやり取りから数日が経った。

あれから、長女や次女が学校で絡んでくることもなく、慧の周り
は平穏そのものだ。

美夜曰く

「向こうも、流石に好き勝手は出来ないでしょ。一応、風紀委員なんだから、模範とまらないといけないしね。それに、まだ生徒会に入っていないけど、あなたが私と親しくしているのは登下校をほぼ一緒にしているのを見られているから、あなたに何かあったら私が動くと思っているみたいね。まあ、実際動くけど。」

とのことだ。

美夜と一緒に登下校し始めた頃は周りも騒がしかったが、今では慧に対し特に何も言っていない。むしろ、その話題は周りが避けようとしている気がするが、慧は気にしないことにした。今年度も残すところ後少し、4月になったらクラスも変わることもあるので大して気にしていない慧であった。

しかし、気にしないと云えないことが一つできた。それは・・・

「失礼します。黒澤先輩をお願いできますか？」

「あら、また来たの？ちょっと待っていてね？黒澤君！花咲さんが来ているわよ！」

「ああ、ありがとう。」

慧は、クラスメイトに返事を返し、お昼を持って堇の下へ向かって行った。

「悪い、待たせたな。さて、行きますか。」

「うん！」

それは、お昼を堇と一緒に取る様になったことだ。

最初に堇が教室に来た時はかなりの騒ぎになった。肩ぐらいまでの黒髪と少したれ気味の優しそうな瞳、綺麗と言うより可愛いと言った方がしっくりくる、少女で、この学園でも上位の人気を誇っている。

そんな少女がいきなり訪ねてきたのだ。しかも訪ね人が美夜と一緒に登校した事で話題になった人物であり、それがつい昨日の話なのだ。騒ぎにもなる。

クラスメイトには関係性を聞かれた慧だが、正直に言う訳もいかず、美夜関連ということで、はぐらかした。納得はしていないみたいだが、美夜の名前を出す皆、引き下がっていった。美夜の影響力というか、なんというか、始めて凄いと思った瞬間であった。

そんな中、教室で食べる訳にもいかず、屋上で食べる事にしたのであった。幸い堇は弁当で、慧も美夜と交互に弁当を作っている。今日は美夜の番だった。

ちなみに、人の目がある所では慧を『先輩』、人の目が無い所では『お兄ちゃん』と董は呼んでいる。

「ねえ、お兄ちゃん。今日のお弁当は美夜さんが作ったの？」

屋上で弁当を広げ、箸をつついていると董が聞いた。

「ああ、良くわかったな。」

「だって、お兄ちゃんが作ったお弁当と美夜さんが作ったお弁当は雰囲気が違うんだもん。」

「そういうものか？」

まあ、レパートリーが異なるからそうなるか、と結論づける慧。

「いいなあ二人とも、料理ができて・・・」

「やっていれば出来様になるさ。」

「・・・そうかなあ？」

そんな世間話を続けていると

「ところでお兄ちゃん。家に少しでいいから顔を出してよ。お母さん、心配しているよ？」

一緒にお昼を食べる様になり、何度も董が言っている言葉だ。慧自身、桔梗さんには少しとはいえ世話になったのでちゃんと挨拶位はしておきたいと思っているのだが・・・

「長女と次女、親父がいない時であれば構わないぞ？」

董は多分、桔梗だけでなく、他の奴らも含めて会って欲しいと思っているのだろう。しかし、慧は桔梗以外とは顔を合わせたいとすら思っていない。特に父親とは今、顔を合わせる訳にはいかない。思わず殺してしまいそうだからだ。

「もう、お兄ちゃん、そればかり・・・」

このやりとりは何度目か、少しむくれながら仕方が無いと溜息を尽く董。

しかし、今日はそれでは終わらなかった。

「そうね、いい機会だわ。次の休みにでも挨拶に行きましょう。」

「美夜？」 「美夜さん!？」

そう言って、いきなり現れたのは美夜と

「美夜、唐突に人の会話に入るのはどうかと思うわ。」

「いいのよ、夢^{ゆめ}。私と慧との仲なんだから。」

金髪の長い髪を腰のあたりで纏めており、碧い瞳が特徴的な女性、生徒会副会長の源藤^{げんとう} 夢^{ゆめ}だった。

「いや、どんな仲だよ!？」

「どんなって、一緒に暮らしている仲？」

「「え!？」」

その言葉に驚く夢と堇。

「いや、堇は知っていただろ？」

「ははは、ここは驚くところかなあと。」

「私は聞いていないですよ!美夜!どういふことですか!？」

「まあ、まあ、落ち着いて夢。その事も含めて話すから。後、二人は夢とは初対面よね?この子は源藤^{げんとう}夢^{ゆめ}、生徒会副会長よ。夢、こっちが、先日話した黒澤 慧、あと、この子は知っているでしょう?花咲 堇、花咲家の三女よ。」

美夜の紹介に続いて互いに自己紹介をする慧、堇、夢。

そして、慧が何故美夜と暮らす事になったのかを夢へと説明した。

「そう、そんなことが・・・」

なお、銀については使い魔となった事は伏せている。これは美夜の配慮だ。堇にも一命は取り留め無事であることしか伝えていない。

「で?美夜、何だ、挨拶って?」

「それは、あれよ。息子さんを私にくださいって・・・」

「なんだ、その結婚の許しを請うような台詞は！普通逆だし、そんな事実ないだろ！」

一緒に暮らしてはいるが、そんな仲になった覚えのない慧は必死に否定する。

「お兄ちゃん、もうそこまで行って・・・」

「黒澤君、式はいつ？」

「二人とも、分かって話に乗っているだろ？」

「「はははは」」

「はあ、で、何で挨拶に行くんだ？」

慧は呆れた様に溜息を尽くと再度、問いかけた。相手は一応、花咲家。本家ではないとはいえその敷地に入る事は、『世界樹の頂』の領域に侵入する様なものだ。神風家の人間が簡単に入っているのかと、言外に問いかけている。

「まあ、さっき言ったことはあながち間違っていないわよ？慧は私ものになったのだから。でもまあ、ちゃんと話すと、慧のお父様は花咲家に婿養子に入ったのよね？なら、慧も花咲は名乗っていないけれど『世界樹の頂』側の人間って捉えられていてもおかしくないでしょ？だから、こちら側になる以上、ちゃんと話しておかないといけないのよ。でないと面倒な事になるわ。因みに訪問する事は伝えているから、あなたが危惧することは大丈夫よ。」

同じ六魔天とはいえ、それぞれの組織は敵対関係とまではいかな

いまでも仲が良くない。

そもそも、思想の違いで分離したのだ。仲が良い訳が無い。今も、互いに保有している魔法の知識や道具を隙あらば盗もうとし、犯罪組織が独自の魔法理論を持っていたら抜け駆けしようとし、争ったりしているのだから。

「・・・事後承諾か・・・拒否権はないんだな。」

「どうしても嫌なら、私一人で行ってもいいけれど？」

「・・・わかったよ。堇や桔梗さんがいるから大丈夫とは思うが、一応敵陣に行く事になるのだから、美夜一人で行かせる訳にはいかんのだろ。」

「あら、心配してくれるの？」

一応女の子である美夜を一人で行かせるのは気が引けるうえに、自分のことでもあるため、結局折れたのは慧であった。

「むゝ・・・」

そんな慧に不満をあらわにする堇。自分がいくら言っても聞いてくれなかったうえに、自分の家を義理とはいえ慕っている兄に敵陣と言われたのだ。不満に思うのも無理はないだろう。

「どうした、堇？そんなに膨れて？」

「知りません！」

そんな義妹の気持ちを察せない義兄は戸惑うばかりだ。

「と、言う事だから、夢。生徒会の仕事、お願いね？」

「ちよと！美夜！またですか！？」

「後で埋め合わせはするから、お願い？」

頼みこむ美夜に溜息を尽きながらも了承の意を示す夢。どうやらいつもの事らしい。

「・・・大変ですね、夢さん。」

「はあ、何を他人事の様になっているのかしら？4月からあなたにも手伝ってもらいますからね？」

「・・・・・・・・」

慧は目を逸らした。

「ちよと！せっかく少しは楽になると期待していたのに！手伝ってくださいよ？ね？」

懇願する夢に居たたまれなくなった慧は渋々ながらも了承した。

「ちよと、夢。それじゃあ私が何もしていないみたいじゃない。」

夢の言葉に美夜は不満を表すが

「最近できた後輩にかまけて仕事をさぼっている人が・・・」

「わー！わー！わー！」

夢が何か言っているが、美夜が急に叫んだため慧と堇には聞こえなかった。

「はあはあ夢、私が悪かったわ。明日からはちゃんと仕事するから、許して。」

「わかればよいのです。とりあえず今日のことは了承しましたから、明日からはよろしくお願いしますね？」

「・・・はい。」

ここに力の関係が証明されたのだった。

「と、言う訳で、今日は放課後、堇の家に行くわよ？」

「はいはい。」

仕方がないと言った様に慧は了承した。

「あ、あの！私も一緒に帰っても良いですか？」

そこで、堇が話に入ってきた。どうやら自分も一緒に帰りたらしい。

「ええ、あなたが良いなら構わないは。それじゃ放課後に校門でね？」

その後は一緒にお昼を取りお開きとなった。その後、教室へ戻ると

「黒澤く！お前、源藤先輩とどういう関係だ！」

という男子生徒からの尋問に合うこととなった。

「慧、なんでそんなに疲れた顔をしているの？」

「大丈夫？お兄ちゃん？」

今は、放課後、花咲家へ向かっている途中だ。

「気にするな・・・なんでもない。」

思ったより、尋問が凄かったらしく、慧は既に疲れ果てていた。

「そう、それならいいのだけど・・・もう着くわよ？」

どうやら、慧が復活する前に花咲家に着いてしまったようだ。

「それじゃあ、準備は良い？」

「ああ・・・大丈夫だ。」

慧の返事を聞くと美夜はインターフォンを押した。すると、久しぶりに聞く女性の・・・桔梗さんの声が聞こえてきた。

「はい、どちら様でしょうか？」

「私、先日連絡させていただいた神風 美夜と申します。」

「あ、神風さんですね？少々お待ちください。」

その直ぐ後、ドアが開き、中から、桔梗さんが現れた。

「お待ちしておりました。神風さん。どうぞお入りください。それと、お帰り堇、慧君。」

慧が訪ねてきた時とは違ってとても丁寧な口調で美夜に接する桔梗。そして、一緒にいた堇と慧には普通に迎えた。

「ただいま。お母さん。」

「お邪魔します。桔梗さん。」

その桔梗の言葉に堇は「ただいま」とここが帰る場所だという言葉を発する。しかし、慧はあくまで自分も客だという言葉で返した。その言葉に桔梗は悲しげな表情を見せるが、客を待たせる訳にはいかないため、二人を居間へ通した。

堇は一旦部屋で着替えてくるらしく、二人と一緒に居間へは入らなかった。

「ようこそ、神風の御息女。どうぞお座りください。」

そこには、慧の父親、瀧と

「「……………」」

不満顔の葵と薫がいた。

「ほら、葵、薫。御挨拶なさい。」

瀧に言われ二人は渋々ながら挨拶をするが、この三人に共通することは、慧を見ていないことだ。

美夜は慧に目線で本当にあなたの父親？と、問いかけて来たが、それに肩をすくめて答えた慧であった。

二人がソファに座ると、桔梗が全員分のお茶を用意してくれた。

「ありがとうございます。それでは、早速ですが本題に入らせて頂きます。」

既に堇も私服に着替え降りてきており、花咲家全員集合状態だ。

「あなた方の息子である黒澤 慧さんをいただきたく思うのですが、いかがでしょうか？」

その問いに答えたのは瀧だった。

「いただくも何も、既にあなたと家の愚息は共に暮らしているのでしょう？それは事後承諾というのでは？」

嫌みを言う瀧に対し美夜は動じず答えた。

「そうですね。それはお詫びしなければなりません。彼と出会ったのは偶然でしたので、名字も黒澤と名乗っていたのでまさか、花咲

に縁あるものとは気付きませんでした。しかし、今まで遅れたのはお互いの所属する組織の問題もございましたのでそこは御理解いただけると思います。」

「そうですね。互いに所属する組織の問題上、仕方がなかったですね。事情を察して発言するべきでした。こちらこそすみません。ですが、それならばなおの事、家の愚息をそちらで預かっていただくわけにはまいりません。」

瀧は自分の発言を詫びると同時に美夜の言った言葉を逆手にとり、拒絶の意を表した。それは、慧を譲りたくないのか、それとも花咲家に迷惑をかけたくないからなのか……。

「そうでしょうか？彼は未だ、黒澤の姓を名乗っております。これはつまり花咲とは関係がないことを示しているのでは？」

「それは、そいつが勝手にそう名乗っているに過ぎません。戸籍上は……」

「魔法使いにとって、自分の名前は重要です。名は自分を示し、表すもの……ここに自らが存在していると主張するものです。戸籍は形式に過ぎません。慧が黒澤を名乗る以上、彼は黒澤 慧です。」

『魔法使い』にとって、『名』とは重要なものである。『名』は自分を示すものであり、魔法も使おうとする際、名前を言うのと言わないのでは威力が異なる。そのため、『魔法使い』にとって、名前は重要な要素といえる。まあ、今の時代は個人の名前はそこまで重要視されていない。しかし、相手は『魔法使い』を管理する六魔天の一つ『世界樹の頂』に所属している以上、否定できるものでもない。『世界樹の頂』は歴史を重んじる性質があるからだ。

「グ・・・それは・・・」

美夜の言葉に押し黙る瀧。そこに桔梗が後を引き継ぐ様に言葉を発した。

「確かに、神風さんの言う通りですね。」

「「お母さん（桔梗さん）！」」

その言葉に驚く瀧と3姉妹。葵と薫が驚いたのは不明だ。この二人は慧を歓迎していないはずである。心変わりしたわけでもあるまい。

「ですが、それを決めるのは慧君だと思いますが？」

「・・・ええ、あなたの言う通りですね。慧、どうかしら？」

そして、慧に話が振られた。皆の視線が集まる中、桔梗と堇に心の中で謝りつつ、慧はためらいなく告げた。

「俺は、美夜と共に行く。こいつと一緒にの方が、俺は良い。」

「「慧（お前）（慧君）（お兄ちゃん）！」」

その言葉にそれぞれ表情を変える。美夜は嬉しそうに、桔梗と堇は悲しそうに、葵と薫は忌々しげに、瀧はどこかホットした様に・

「この家での生活は苦痛しかない。そこの、長女と次女は俺を嫌っ

ている様だし、それに・・・親父、あんた俺が嫌いだろ？」

「な、何を言って・・・」

「良いよ、否定しなくて。あんたが俺を嫌っていること位、憎んでいること位、もの心ついた時から知っているよ。今だってそうだ。俺が美夜を選んでほっとしたろ？それに、俺が今日この家に足を踏み入れてから、俺の名前、呼んだか？愚息とかお前とかだろ？俺の名前を呼ぶ事さえ苦痛に感じるんだろ？」

慧は今まで思っていた事を吐露する。もう、会う機会もないと思うから・・・

「ち、ちが・・・」

「何も違わない。俺のせいで母さんが死んだ事であんたが俺を嫌っているのは知っているんだ。否定しなくていい。だからといって、銀を傷付けたことを許すつもりもない。」

そう言われ、凶星だったのか、銀を傷付けたことを悔やんでいるのか、おそらく前者だろう、俯いた。

「俺がこの家を出た方が互いのためだ。俺はもう、あんたとは関わらない。親とも思わない。今日、ここで、さよならだ。」

慧はそう言うのと立ちあがった。

「話はここまでだ。桔梗さん少しの間でしたけどありがとうございます。」「話はこちらまでだ。」「」

そして、桔梗にのみ向けてお辞儀をした。

「慧君・・・ううん、こちらこそ、息子ができて嬉しかったわ。元気でやるのよ？」

そして、話はこれで終わりといった様に、美夜も立ちあがった。

「それでは、花咲さん。慧はこちらに任せていただきます。ごきげんよう。」

「ええ、慧君をよろしくお願いしますね？」

「お兄ちゃん、あの、私は・・・」

慧は何か言おうとする葦の頭に手を載せ

「まあ、戸籍上は兄妹であることに変わりはないから、好きに呼べ。」

「うん！ありがとう！お兄ちゃん！」

嬉しそうに、返事をした葦であった。それを葵と薫は忌々しそうに見ていた。自分達が慧を嫌っている事を話されたことと、美夜の思い通りになった事が許せないのだろう。

それに気付いた慧は意地の悪い笑みを浮かべ長女の耳元で囁いた。

「これで気兼ねなく委員長にアタックできますね？」

「な!？」

何でそれを知っている？と、顔を赤くし、驚いた顔になった。

慧はそれを見て満足したのか、父親には目もくれず、美夜の下へと戻り

「それじゃ、帰りますか、美夜。」

「ええ、そうしましょう。慧。」

そして二人は帰っていった。

二人が帰った後の花咲家

葵と薫、そして瀧は正座をさせられていた。

「さて、私が何故怒っているのか、おわかりですか？」

桔梗が珍しく怒っている。その姿に怒られていない葦まで震えていた。

三人は分かっているが、言いたくないのか口を噤んでいた。

「「・・・・・・・・」」

「そうですか、わからないのですか？なら教えてあげます。何故そんなに慧君のことを嫌っていたのかしら？慧君があなた達にいったい何をしたというの？」

当然の疑問をぶつける桔梗。

「瀧さんの気持ちはわからなくてもないですが、それを慧君にぶつけるのは間違っているでしょう？そして、娘二人、あなた達、慧君を嫌っていたよね？何故嘘を吐いたの？そして、慧君に何をしてきたの？洗いざらい吐いてもらいましょうか？」

「「「ヒィ〜！！！」」」

花咲家に、大の男と少女二人の悲鳴が響いたのであった。

第四話 真の未来と美夜の叫び

あれから日は過ぎ、今はもう春休み。

美夜はあれから、多忙を極め、終了式が終わるまで帰りも遅くなっていた。

そして、慧はというと、家事全般を引き受け、専業主夫と化していた。それと同時に、銀に魔法を教えていたのだが、しばらくして問題がおきた。

「ん？・・・銀か？」

夜半過ぎ、布団の中になにかが潜り込んでくるのを感じたが、よく銀が潜りこんでくるため気にせず眠り続けた。この時ちゃんと確認していればまた違った結果となっただろう。

「慧、何時まで寝ているの？いい加減おきなさい！」

「ん・・・美夜か・・・もう少し寝させてくれ。」

春休みに入り、入学式の準備はあるが、今日は珍しく美夜も一日家にいるとのことなので家事を引き受けてくれた。慧はその言葉に甘え、今まで眠っていたのであった。

「駄目よ。夢や堇が来ているの。起きて挨拶なさい。」

「ん・・・分かったよ。ほら銀、お前も起きろ。」

そういつて、銀を起こそうと、布団をめくるとそこには

「…………え？」

全裸の少女がいた。銀髪の長い髪に綺麗な顔、幼さの中に妖艶な美しさが見える顔立ちだ。頭に犬耳、お尻にフサフサの尻尾がある。

そして、更に状況は悪化した。

「美夜、黒澤君は起きましたか？」

「美夜さん。お兄ちゃんは？」

そして、目撃する。全裸の少女と寝床を共にする慧の姿を……

「……………」

沈黙が支配する中、最初に動いたのは美夜だった。

「慧……何か言い残す事はある？」

いいながら、魔力を活性化させ、半透明の球体を創りだしている。

この球体に触れると触れた部分が無に帰る凶悪な魔法だ。

無属性魔法は、全てを無に還すことができる魔法だが、全て無に還すことしか出来ないともいえる。また、一度に消せる数に限りがある。なお、魔力そのものを消すことはできない。

「美夜さん。それじゃ駄目です。少し、苦しませてからじゃないと・・・」

そう言いながら、堇は水の球体を創りだした。どうやら堇の属性は水のようなのだ。

二人は平然と魔法を使っているが、どちらも『魔法使い』の資格をもっており合法的使用できる。まあ、家の中なのであまり関係はないが・・・

「美夜さん？ 堇さん？ なんですかそれは？ そんなの喰らったら私、ただでは済みませんよ？ 夢さん！？ そんな見ていないで助けてください！」

「ふふ、頑張ってください。黒澤君。」

その笑顔は黒かったと後に慧は語る。

「『その女は誰よ（ですか）！？』」

そして、魔法が放たれた・・・が、それは慧には届かなかった。その前に、氷にぶつかったからだ。

「ん・・・美夜、そして堇よ、主に何を・・・するのですか？」

いつの間にか銀髪の少女が起き上がり氷の魔法を展開していた。

「主、大丈夫ですか？」

そういって、慧に顔を近づける銀髪の少女。自分を主と呼ぶ少女、

そんな呼び方をするものに心当たりは一人？しか見当たらなかった。

「もしかして、銀・・・か？」

「はい。そうですが、何故疑問系なのですか？」

「いや、お前、何で人の姿をしているんだ？」

その言葉にきよとんとする銀。

「主が言ったのではないですか、人の姿になった私を見てみたいと。」

「は？いつだ？」

「それはですね・・・」

それはつい数日前のことだ。慧と銀はいつも通り、魔力のコントロールの訓練をしていた。必要最低限のレベルには直ぐに達したが、銀がもっと学びたいと言う事なので、コントロールだけではなく、慧の知る範囲で魔法関係について教えていた。

今回は動物と魔物の違いを教えていた訳だが・・・

「・・・それで、動物と魔物の違いは、簡単に言えば魔力の強さだ。属性が現れるほどの魔力を持った動物を魔物、それ以外を動物と呼んで区別している。銀も魔物に含まれているな。」

魔物の中には魔力により姿が変質したものがほとんどであり、むしろ、銀の様に変質せず姿を保っている魔物は珍しい。

『そうですね。私以外の魔物にはあまり会ったことはありませんが・
・・』

「まあ、それは仕方がないだろ。魔物は人に危害を加えるとされ駆除の対象になっているからな。今じゃ、山奥とか人がいない場所や魔力が濃い場所、後は秘鏡と呼ばれる場所位にしか生息はしていないだろう。」

魔物は動物と比べ、より凶暴になっている事が多く、人間も捕食の対象としている。そのため、六魔天が中心となり、人里に近づいた魔物は駆除している。これは『魔法使い』の仕事の一つだ。

『だから、私は襲われたのですね。そして、主達に拾われた・・・』

「まあ、お前に気付いたのはあいつだけだな。あの時は大変だった。いきなり、氷属性の魔法を撃って来たもん、な。しかも、なかなか懐かないし、噛みついてくるし・・・」

『あの時はすみませんでした。』

銀との出会いを思い出しながら懐かしそうに笑う慧に銀は申し訳なさそうに目を伏せる。

「ま、仕方ないさ。たくさんの人間に追いかけられたんだからな。人間不信にもなるさ、気にするな。」

慧は過ぎた事だと銀の頭を撫でてやる。

『ありがとうございます／＼／＼／＼．．．ところで、魔物はどうやって生まれてくるのでしょうか？元からいた訳ではないのですよね？私も元から魔物だった訳ではないですし．．．』

銀は頭を撫でられ嬉しそうにしながら、疑問に思った事を口にした。銀自身いつの間にか魔物のカテゴリに入っていたとのことだ。慧に教えられ初めて知ったとのことだ。

「それにはいくつか理由があるが、一番の理由は魔力を過剰に取り込み過ぎて変質してしまう事だろう。大概望まずに変質し、人間に見つかり駆除される。」

『魔力を．．．ですか？』

「ああ、何故そうなるかは未だ定かではない。ただ、どの魔物にも共通する点が一つあって、何故か、野生の動物は襲わない。大体同じ魔物同士でしか喰らい合わない。魔力の強弱で喰うかどうか判断しているみたいだと言う事しか分かっていない。」

『そうですね、確かに、動物はまずそうに感じてしまいます。代わりに、同じ魔物はおいしそうに感じますから、狩るならそちらを狩りますね。あと、人間も捕食の対象に入ります。私は食べた事はありませんが．．．でも何故かは自分でも良く分かりません。本能としか．．．』

そう言う銀はどこか不安そうに声を震わせた。

「大丈夫だよ。俺がいるんだ。お前が誰かを喰うようなことにはさせないし、お前に手出しはさせないよ．．．って、俺が言っても説

得力はないか。」

一度、銀を死なせかけてしまっている慧は自嘲ぎみにそう言う。

『そんなことはありません。ですが、これからは私も主を守るようになりたいです。せつかく使い魔になったのですから。』

「そうか、ありがたいな、銀」

そう言って、再び銀の頭を撫で始めた。銀は嬉しそうに尻尾を振っていた。

「さて、話の続きだが、魔物と動物の違いは分かったか？」

「はい。」

「んじゃ、次は魔物の種類についてだな。魔物といってもいろんな種類がある。大きく分けると、狼型、猫型、鳥型、猿型など、変質はするが、元が何の動物かわかるものはまとめて定型と呼ばれている。まあ、銀の様に同じ形を保っている魔物は珍しいけどな。次に、まったく異なる形となったものを異型と呼ばれている。スライムとかだな。そして最後に幻型と呼ばれるもの、これは、伝説上の動物、ペガサスやドラゴンなどの事をそう呼んでいる。」

大きく分けると、定型、異型、幻型と三つに分けられる。細かく分けると、定型の猫型、異型のスライム、幻型のドラゴンなどと区別される。

『ああ、では以前出会ったあれは、幻型の魔物に入るんですね。』

「まあ、幻型と呼ばれる奴らは自分を魔物と呼ばれるのを嫌っているがな。」

『そうなのですか？』

「ああ、奴らは魔物と違い、魔力を過剰に取り込んでしまったって訳ではなく、最初からみたいだからな。」

『え？それはいったい？』

「いや、俺も知らない。聞いたただけだからな。」

幻型と呼ばれるもの達は他の魔物とは違い最初からその姿をしている。何故かまでは慧にも分からない。

ちなみに、世間一般では、ここまでのことは分かっている。慧が知っているのは、以前、不幸にも出会ってしまった幻型に聞いたからだ。その時、銀も一緒だったが、途中で気絶してしまっていたので聞いていなかった。

「でだ、今言ったのが基本の分け方だが、さらにランクがある。それは魔力の量だけでなく知能や肉体の強靱さを総合して、どれだけ脅威となるかで決められる。そして、ランクが高い魔物は人の姿に変身することもできる。」

『へえ、私はどうなのでしょう？』

「そうだな・・・今の銀なら可能だと思うぞ？まあ、まだ魔力の制御の練習が必要だと思うが・・・」

『そうですか、主は私の人型を見たいと思いますか？』

「ん？ そうだな・・・銀ならきっと綺麗な女の子に変身するだろうから、見てみたいな。」

この時、言いながら頭を撫でる自分の主を見て、銀は決意した。
まずは人型への変り方から覚えようと・・・

「・・・ということがありまして・・・」

「そ、そういえばそうだったな。」

確かに見たいと思った慧だったが、だからと言ってこんな短期間で出来るとは、しかも布団の中にその姿で潜り込んでくるとは思わず、言葉がでない。

「そ、それでその・・・／／／／私の人型はどうですか？」

銀は恥ずかしそうに慧に聞く。慧は・・・

「あ、ああ・・・綺麗だと思う。／／／／」

尻尾を抱え、モジモジする銀を思わず抱きしめそうになるのを堪え、目線を外しながら答えるが、その先には・・・

「「「ジ〜〜」」」

わざわざ擬音を声に出して凝視する三人がいた。

「と、とりあえず、美夜！銀に服を着せてくれ！夢さんも董も一度出て行ってくれ。着替えるから！」

とりあえず、4人を追い出した慧は一人落ち着く事にした。

「それで、お兄ちゃん。この子、銀ちゃんって言っていたけど本当なの？」

第一声を発したのは董だった。あの後、着替えてからリビングに集合した。因みに、慧は、白いTシャツに黒の上着、黒いパンツ姿でラフな格好だ。一方、銀は白と黒のいわゆるゴスロリの服を着ている。美夜が何故そのような服を持っているか聞くと

「趣味よ、悪い？」

すごまれたので何も言えなかった慧であった。

「ああ、本当だぞ？銀、一度元の姿に戻ってくれ。」

「わかりました。」

直接見た方が早いだろうと思い、銀にお願いした。了承した銀は一度元の狼の姿に戻り、再度人型へと変えた。

「・・・本当だったんだ・・・でもなんで銀ちゃんにこんな力が？」

「そうですね。本来高位の魔物しか出来ないと思うのですが？」

その言葉に美夜と視線で会話し、この二人なら大丈夫だろうということで、これまでの事を話した。

「そう・・・そんな事が・・・」

「でも、お兄ちゃん。実は凄いの？」

「いやいや、美夜にも何度も言っているが大して凄くないから。」

菫の言葉を否定する慧だが、やはり使い魔を持つと言う事は『魔法使い』として優秀ということなので、そう思われるのは仕方が無い事なのである。

「・・・・・・・・」

慧が夢と菫の評価を否定している中、美夜は何かを考えている様子だ。

「美夜？どうかしたのですか？」

銀がそんな美夜の様子に気付き、訪ねた。

「うん。決めた！」

いきなり立ち上がり声を上げる美夜にこの場にいる全員の視線があつまる。

「何を決めたんだ？」

慧が代表して美夜に問いかけた。

「ふふ、決まっているじゃない。銀、あなたも学園に通いなさい！」

「「「え!?!」」」

皆、驚きの声を上げるが、銀は嬉しそうだった。

「学園に通えば主と一緒にいられますよね？」

「ええ、もちろん!」

どうやら、銀は慧と一緒にいられるのが嬉しいらしい。尻尾が凄い勢いで振られている。

「ちょっと待て! 美夜! それはいくらなんでも無茶じゃないのか?」

「そうですよ! 試験とかどうするんですか!?!」

「そうね、流石に無理があるんじゃないかしら?」

慧、堇、夢は否定するが

「大丈夫よ! わたしに任せなさい!」

美夜は自身満々に告げる。

「いや、しかし堇の言う通り編入試験をクリアするのに必要な学力を得るまでは時間がかかるだろ? それにいくら俺の使い魔だからって銀は魔物だぞ?」

「大丈夫よ。銀の魔力なら、特例として行けるわ。それに使い魔は主と共にあるものでしょ？ 後、例え魔物でも使い魔なら、正式に登録すれば駆除の対象からはずれるわ。慧が秘密にしたいなら、わたしの使い魔って事で登録するわよ。」

「む・・・いくら美夜でも銀はやらんぞ？」

そういうながら、銀を抱き寄せる慧と頬を赤らめて喜ぶ銀。

それを見てむくれる堇と微笑む夢。

「ふふ、分かっているわ。登録は慧がすれば良いわ。」

「だが、俺の場合勝手に契約したからな。不味いんだろ？」

「そうね・・・普通なら不味いけど・・・慧は『魔法使い』の資格は持っているのかしら？」

「まあ、一応。といっても、依頼を無視しまくっていたから最低ランクのFだけだな。」

堇と夢は驚くが、美夜は当然のように頷く。

『魔法使い』の資格は最低Dランクから始まり、基準より2ランク上の魔法が公に使えるようになる。この資格を取るためにはそのレベルの魔力と知識、技術が無ければ取る事ができないが、制限があるため、独学では難しい。普通は『魔法使い』に師事するか、天城ヶ丘学園の様な場所で学ぶことで、可能となる。

なお、ランクを上げたい場合は、依頼をこなしたり、昇格試験を

受けたりするが、慧の様に依頼を無視してランクを落とすことはまずない。資格を取るということは、公に使える魔法のランクを上げたいものや、六魔天に所属したいものがほとんどであるからだ。

しかし、慧はFである。このランクは資格を持ったものが罪を犯した時に与えられるGを除けば最低のランクとなる。つまり、それだけ依頼や試験を無視していた訳であり、何のために資格を取ったのか分からない。

その事に二人は驚いたのだった。が、美夜はむしろそう来なきやといった様だった。

余談だが、慧が資格を取ったのは、当時、自分の力を試すのに調度良かったという事と夜城や白河に進められたという事もある。

ちなみに、ランクはGを除けば、F→SSSの9段階。美夜はS、夢はA、堇はCランクだ。

割合としてはD→Cランクが最も多く、次のBランクからは段々数が少なくなっていく。代わりに許可が下りる魔法のランクも上がっていく。そして、EやFは、逆に一般の人より制限が大きくなっている。数は、SSS並に少ない。

ちなみに、『魔法使い』が制限を越えたかどうかは資格を取った時に渡されるカードに施された魔法により、六魔天に知らされる。自分のランクより上の魔法を使いたい時は、自分よりランクが上の者が一緒におり、許可を得るか、予め申請しておく必要があり、破った場合は罰則の対象となる。

慧は『魔法使い』を示すカードに細工をしており、許可以上の魔

法を使っても気付かれないようにしている。

「なら、大丈夫ね。内の学園の理事長に頼めばなんとかなるわ。」

『魔法使い』の資格を持つことが、『契約』を公式に認させるために必要な事の一つであるからだ。

「理事長？ そんな権力を持っているのか？」

理事長の話が出ると、夢と堇は納得した顔になった。

「ふふ、それは会ってからの楽しみね。」

そして、楽しそうに笑う美夜であった。

「って、お兄ちゃん！ 銀ちゃんを学園に通わせるのを認めてるよ！」

その言葉にはっ！ とする慧であったが・・・

「主、駄目ですか？」

銀に上目使いで見られ、あっさり陥落した。

「・・・勉強は俺が見てやる・・・」

小さいころから組織に所属していた慧は学校にあまり行っておらず、それを心配した夜城や白河が勉強を教えていたため、偏りはあるが、それなりに頭は良いのだった。特に魔法学に関しては抜けている。

「はい！よろしく願います！主！」

その言葉に銀はとても嬉しそうに答えた。

そんな二人を見る三人は

（（駄目だ、この男・・・））

そんなこんなで、慧と美夜、そして銀は学園の理事長室に来て
いる。

「で、うちの理事長って何者なんだ？」

「直ぐに分かるわ。」

そう言うと、理事長室の扉をノックした美夜は中からの返答を待
ち、中へ入っていった。

慧と銀もそれに続き中に入っていくと、そこにいたのは

「いらっしやい。美夜さん。それと、そちらが、黒澤さんと銀さん
ね。始めまして私がこの学園の理事長を務める外神^{とがみ}未来^{みらい}です。」

肩まで伸びた蒼い髪に同色の瞳、20代後半に見える綺麗な女性、
『七大法典』の一人『真^{まこと}の未来^{みらい}』がそこにいた。

慧は啞然とし、銀は直接の面識がないため、慧を不思議そうに見
ている。銀は慧の組織のことを知ってはいるが、仕事をしたことは
ない。以前、幻型と会ったのは、慧と旅行している時であり、実際

のところ、銀は裏方面の知識はあまりないのだ。

「それで、お話した件ですけど・・・」

「ええ、大丈夫です。それについてはこちらで済ませておきました。」

そう言って、理事長は何かをとりだした。

「まず、銀さん。あなたにはこれを・・・」

そう言って、黒地に銀の色をした雪の結晶を模したバッチを銀に渡した。

「これはあなたが使い魔である証です。意匠は私が決めさせてもらいました。無くさないようにしてください。」

「はい。ありがとうございます。」

銀は丁寧にお辞儀をしながらそれを受け取った。

「それと、黒澤さんにはこれを・・・」

慧にも銀と同じバッチを渡した。意匠は銀とは逆に銀地に黒い雪の結晶を模している。」

「はあ、ありがとうございます・・・」

それに対し、軽く会釈して答える慧。

「ちょっと、慧、失礼よ。」

慧の態度に注意を促す美夜だが

「いいですよ。美夜さん。」

理事長はやんわりとそれを制した。

「ちなみに銀さんは黒澤さんと同じクラスです。使い魔と主は共にいるものですからね。」

その言葉に喜ぶ銀と、再び目立つ事、『魔法使い』としての腕を勘違いされる事が嫌な慧は複雑そうな顔をし、美夜はそんな二人を見て笑いを堪えていた。

「ところで、美夜さん。それと銀さん。少し席をはずしていただいてよろしいですか？」

「え・・・何故でしょうか？」

「少し黒澤さんとお話したいのです。駄目でしょうか？」

その言葉に少し悩むが、無理を聞いてもらったこともあり、引き下がった。

「わかりました。それでは、外で待たせていただきます。行きましょう、銀。」

銀は不安そうに慧を見るが、慧は大丈夫と目で答え退室を促した。

二人が出て行き、中には慧と未来の二人きりとなった。

「まさか、あなたがこの学園に編入してくるとは・・・分かっていましたが、信じられない思いですよ、慧。」

「ああ、俺もあんたがここの理事長とは思わなかったよ、未来さん。」

二人は過去何度も会ったことがある。大概、『魔法協会』の邪魔を慧達の組織『断罪の牙』がしていた時にだが・・・

「夜城さん達は元気ですか？」

敵対関係にありながら、世間話をする二人。組織としては対立しているが、個人としてはそれほど嫌っていないようだ。まあ、他も一緒かと言えばそうはいかないが。

「ああ、相変わらずだと思うぞ？俺が抜けてからそんなに日は経っていないからな。」

意外な事にその言葉に未来は驚いて見せた。

「あなたが！？何故！？」

「いや、なんでそんなに驚くんだよ。未来視を使えるあんたなら、分かっていたことだろ？」

『七大法典』の一人『真の未来』が司る法典は真実、魔法は未来を視る事。『真実を見つめる者』とも呼ばれている。しかし、何でもかんでも視る事が出来る訳ではないのだが・・・

「私が視たのはあなたがこの学園に来ることだけでしたから。まさか、『断罪の牙』を辞めているとは思いませんでした。」

「まあ、色々あるんだよ。そっちこそ、魔力全然感じなかったから分からなかったよ。まさか、ここの理事長を『七大法典』の一人がやっているなんて、な。」

慧が言うのも無理はない。『七大法典』と言えば、『魔法協会』のトップ、それが、普段は一学園の理事長をしているなんて思わないだろう。

「あら、学園は人材の宝庫なのですよ？そこに目を付けるのは当たり前の事でしょう？それに、同じ様な事は他の六魔天でもやっているのですよ？」

その言葉に驚くと同時に納得する慧。大人より学生の方が『魔法使い』としての伸びがあり、また、まだ隠された力を持っているかもしれない原石の集まりといって良いからである。

「まあ、それはいいさ。しかし、良く俺の編入を許したな？銀の件も・・・」

「ふふ、簡単な話です。あなたがこの学園に入ること、良くも悪くも皆、刺激されると思いました。ですから、他の『七大法典』や大アルカナ達を抑えてまであなたの編入を許したのですよ？」

「いや、俺は好き好んで騒ぎを起こそうと思わないぞ？」

そんな面倒事はゴメンだという慧に対し、未来は告げる。その『

未来』を・・・

「あなたは、美夜さんと関わった。その時点で、未来は決まったようなものです。なにより、もうあなたは、美夜さんとの関わりを絶つという選択肢はないでしょう？」

「・・・やっぱり、あいつが元凶か・・・」

「ふふ、楽しみにしていますよ？ 慧。あなたと美夜さんが起こす騒動を・・・」

「はいはい。だけど、覚えとけよ。未だ来ていないから未来なんだ。どんな未来を視たか知らないが、俺にそれが当てはまると思うんだよ？」

そう言い放ち、慧は理事長室から出て行った。

その背中を見送りながら、未来は慧に聞こえないことを承知で言う。

「ええ、私もそれを望んでいます。美夜を任せましたよ、慧。」

一体、未来はどんな『未来』を視たというのか、それを知るのは未来以外、いないのであった。

「ねえ、慧、理事長と何を話していたの？」

話しを終え、三人で帰っているところだ。

「別に・・・ただ、美夜が騒動を起こすから頑張れと言われた。」

大分違うが、根本的な所は間違っていない。

「ああ・・・」

「ちょっと！何よ、それ！銀も、何を納得した様な顔をしているの！？」

「だって・・・」

「ですよね？」

視線で会話し、頷くふたり。そんな主従に美夜は

「そんな目で私を視るな～！」

少し涙目で叫んでいた。

第五話 入学式

今日は4月7日、入学式。

天城ヶ丘学園はエスカレーター式のため、中等部から高等部へ問題なく上がれる。が、それだと顔ぶれに新鮮味が足りない上に、刺激も少なくいため、『魔法使い』としての成長も滞る。魔法には新たな視点も必要だからだ。

そのため、この学園は高等部からさらに外部からの生徒を募集している。

だから、この再会は必然なのだろう・・・

「なあ、美夜、俺も一応新入生だぞ？何故、他の新入生の案内をしなけりゃならない。」

慧は今、生徒会の仕事の手伝いで新入生の案内をしている。本人も今日から高等部の一年、つまり新入生なのにもかかわらずだ。

「仕方ないでしょ？人手が足りないんだから。一応、風紀委員にも手伝って貰っているけど、彼等はあまり使えないのよ。私は生徒会長で、彼等は風紀委員だからね。命令系統が違うから。」

美夜が風紀委員長に頼み、人手を確保した訳だが、生徒会と風紀委員は仲があまり良くない。よって、必要最低限しか働いてくれないのだ。ここに風紀委員長か副委員長がいれば話は別らしいが、彼

等は彼等で別件があり、手が離せないためここにはいない。

「主、頑張らしましょう！」

慧を励ます銀。彼女も慧と同じはずだが、楽しそうだ。こういった事自体、新鮮なのだろう。尻尾を振り、耳をピコピコ動かしている。

そんな銀を見た周囲の反応は

「きゃ〜可愛い!!」

「犬耳に尻尾・・・だと!こんなことが・・・現実に!」

など、概ね好印象みたいだ。

「ほら!銀も頑張っているんだし、もう少しよ。入学式には間に合う様にしてあげるから。私も挨拶があるしね。」

銀や美夜に言われ、仕方が無いと一つ溜息を吐いたあと、再び案内を開始しようとしたところ声を掛けられた。

「すみませ〜ん。講堂にはどうやって行けばいいんですか?」

その声に「あれ?どこかで聞いたことがあるような?」と思いはしたが、頭の隅に追いやり

「はい、講堂にはこのまま、まっすぐ進んでいただくと、案内の矢印がごさいますので・・・」

慧は本日何度目になるか分からない台詞を言いながら、声の方へ振り返ると

「え・・・慧・・・？」

「・・・あれ？かんな緩奈じゃないか、なんだ、ここに進学したのか。」

平均より低い身長、桜色の髪をツインテールにしている、可愛いと十分に言える女の子、中学の頃のクラスメイトで数少ない友人の一人、せんかい仙海かんな緩奈であった。

「え、うん。そうだけど・・・」

緩奈は久しぶりに会う慧に戸惑った。いきなり転校し、連絡もつかず、この学園にいることしか分からなかった。元々この学園を受験することは決めていたため、慧がこの学園にいることを知った緩奈は更に勉強に時間を費やした。

そして、念願の合格を勝ち取り、慧に会ったなんて言うてやろうか考えていた訳だが、久々に会ったというのに、当の慧は普通に言葉を投げかけてくる。どう反応を返せばいいか分からなくなる緩奈だった。

「ん？どうした？緩奈。遅れるぞ？」

不思議そうに問う慧に、これまでの苦悩が何だったのか・・・落ち込むと同時にイライラが募って来た緩奈は爆発した。

「ふざけないでよ！いきなり転校したと思ったら、連絡着かないし！私がどれだけ心配したか・・・ヒック」

しまいには泣き出されてしまいい、慌てる慧。どうすればと、オロ
オロしていると再び、久々に聞く声が聞こえてきた。

「おやおや、早速女性を泣かせているのかい？慧。ククツ、相変わ
らずだな。」

そんな人聞きの悪いことを言いながら二人に近づいてくる一人の
男子生徒。少し長めの黒い髪、整った顔立ち、喋らなければもてる
であろうと周囲に評価される人物、葛城^{かつらぎ} 真樹^{まさき}がそこにいた。

「おい、真樹、人聞きの悪いことを言うな。それじゃ、俺がいつも
女を泣かせているみたいだろ？」

「おや？違ったかい？」

その言葉に不機嫌そうな顔をする慧。

「もてた事のない俺にその台詞・・・ケンカ売っているのか？」

「ククツ・・・すまん。すまん。久々に会ったものだからつい・・・
な。」

そう言って悪びれもせず誤る真樹にしょうがないといった風に溜
息を吐く。

「はあ、相変わらずだな。それと、ほら、いい加減泣きやめ、緩奈。
」

そう言いながら、緩奈の頭を優しく撫でる慧。

「グスッ・・・なんで連絡くれなかったのよ？」

涙目で問う緩奈に、慧は困った顔になった。

「そ、それは・・・」

「ふっ、大方、後で連絡すればいいだろうと思っている内に忘れたのだろう。まったく、友達がいない奴だ。」

言い淀む慧の代わりに、その心情を読んだ様に真樹が答えた。

「・・・本当なの？」

「い、いや・・・まあ、確かに真樹の言う通りなんだが・・・、本当にすまん。色々あって、すっかり連絡を入れるのを忘れていた。」

目が座り始めた緩奈に慌てて謝る慧。緩奈を本気で怒らせると大変な事は身をもって知っている慧は、なんとか宥めようと必死だ。

「・・・なら、今度、買い物付き合ってよ。もちろん慧のおごりで」

「う・・・わ、わかった。」

少し悩んだ慧だが、それ位で済むなら安いものと、了承することにした。

「へへへ、約束よ？」

「ああ、わかったよ。それより、そろそろ講堂に行ったらどうだ？入学式に間に合わないぞ？」

そろそろ、講堂に入っていないと落ち着く時間もないだろう。

「あ、そうだった！って、慧は？」

「ああ、俺一応、生徒会のメンバーにカウントされていてな、だからこうして案内しているんだ。もう少ししたら俺も行くよ。」

その言葉に、緩奈だけでなく、真樹も驚いた。

「え？慧が生徒会？はははっ！似合わない！」

「慧よ、お前、公僕になり下がったというのか！」

しかし、反応は違う。緩奈は笑い、真樹は憤った。中学の頃、よく学校をサボっており、たまに來たと思えば、真樹とバカやっていたため、この反応は仕方が無い。

「あーもう、細かい話は後でするから。それより、さっさと行け。」

面倒になった慧は話を打ち切る事にした。

「ははは・・・うん。分かった。でも、ちゃんと話を聞かせてよ？」

「うむ、何故お前が公僕の手先と化したのか俺も気になる。ここは引くが、話は聞かせろ。」

なんだかんだ言っていたが、二人とも慧の事を心配していたのだ

ろう。また、何の理由もなしに、連絡を入れなかった訳ではないことは二人とも理解している。かといって、それで納得できるかと言えそうはいかない。その結果が、緩奈の涙なのだろう。

「ああ、分かったよ。あ、それと、これからよろしくな。緩奈、真樹。」

その言葉に、一瞬「キョトン」とする二人だったが

「「ああ、よろしく。慧。」」

慧は久々に再会した友人と挨拶をすませ別れた。するとその様子を傍から見ていた美夜に声を掛けられた。

「あら、慧。今の、彼女？随分親しそだったわね？」

「ん？いや、前の学校の友人だよ。って・・・なんで少し不機嫌なんだ？」

少し機嫌が悪い美夜だが、その理由に思い当らない慧は聞いてみるが、返答は得られなかった。

「なら、今の男は慧の彼？随分と親しそだったけど？」

「俺は、ホモじゃない！」

そして、妙な事を口走り始めた。

美夜としては、自分の知らない人が自分の慧ものに近づくのが面白くない訳だが、それが女心かどうかは分からない。あくまで独占欲で

あり、男として慧を見ているかは別な話だ。もちろん、本当に慧がホモだとは思っていない。

慧は慧で、美夜が不機嫌なのは分かるし、自分が原因という事も分かるが、何が不機嫌にさせたのかまでは分からないのであった。

「主、緩奈や真樹も同じ学校なのですね？」

そんな二人の間に入り、慧に話かける銀。美夜とは対象的に久々に会う知り合いに喜んでいる。

「ああ、そうだな。また、一緒に遊べるな。」

とりあえず、美夜の事は置いておいて、銀を二人にどうやって説明しようか、悩む慧であった。

また、そんな風に喜ぶ銀を見て、美夜は緩奈と真樹への警戒を少し下げはしたが、慧が緩奈とデートの約束をしていたのは聞いていたので（慧はデートのつもりはない）、やはり少し不機嫌なままだった。

『続きまして、理事長からの挨拶です。』

あれから、新入生の案内を続けていたが、良い時間となったので、後を風紀委員の先輩方に任せ、慧と銀は入学式に参加している。美夜も先ほど挨拶を終え、先生方に混ざって待機している。側には夢の姿も見える。慧達が案内をしている際、講堂に着いた新入生を纏めるのが彼女の仕事だった。

『新入生の皆さん、入学おめでとうございます。私は当学園の理事長を務めさせていただいております外神^{とがみ みらい} 未来と言います。みなさんも知っての通り天城ヶ丘学園は・・・』

「おいおい、『七大法典』が普通に出てきて挨拶しているよ、いいのか？」

慧は思わずつぶやいていた。

慧が言うことはもつともで、『七大法典』と言えば、世界でもトップクラスの重要人物であり、命だって平気で狙われるような存在だ。間違っても、こんな堂々と、それも護衛もなしに全校生徒の前に出てくるようなことはない・・・と思っていたのだが違ったようだ。

夢や堇も理事長のことは知っていたことから察することは出来たはずだが、片や生徒会副会長、片や、花咲家の息女なため、知っていて当たり前と慧は思っていたが、そうではなく、全校生徒に周知の事実だったらしい。

「はあ、まあ、あの人らしいか・・・」

「主？どうしましたか？」

「いや、なに、未来さんらしいなあとね。」

「????」

銀はよく分かっていないようだが、この「外神 未来」という人

物を知っているものからすれば確かに「らしい」行動である。『真の未来』は基本隠れることをしない。曰く、

「私が隠れたせいで他の誰かが傷つくのは不本意ですから。それに、私の目をもってすれば、奇襲や暗殺など無意味ですから。」

とのことだ。ちなみに、他の『七大法典』で堂々と公共の場に立つものはいない。未来の様に『未来』を見通し、対策を立てるようなことが出来ないからだ。

『・・・それでは皆さんがこの学園で、良き思い出ができるよう祈っています。』

慧が考え事をしている内に未来の挨拶が終わったようだ。

それから、いくつかの工程を経て入学式は終わり、新入生は各々のクラスに行くことになる。

「ねえ、慧。慧はどこのクラス？」

教室の向かう中、緩奈が話かけてきた。側には真樹もいる。

「ん？俺はFクラスだ。銀もな。」

この学園では入学の際の成績でクラス訳される。A～Fの6クラスとSクラスの合計7クラスだ。

基準は魔力だけでなく、知識や技術等も合わせた総合的な力を持って決められる。よって、魔力だけ高くても、他が駄目ならFクラスとなることもある。なお、内部生は中等部最後のテストの成績で

分けられる。

また、Sクラスは特別なクラスで、特殊な属性を持つものや特別な血筋の生徒など学園でVIPと定めた生徒はそこに含まれる。なお、美夜や葵などは自ら辞退している。

「やった！同じクラスだね！」

「ふむ、俺も同じだな。よろしく頼む。」

「それは、よろこんで良いのでしょうか？」

銀の言う事も最もで、Fクラスはつまり、最低ランクのクラスということだからだ。

所で、何故この4人がFクラスなのか・・・まず、真樹。魔力、知識、技術、どれをとっても高い成績で、Aクラスで確定かと思われたが、面接の際に見られた、精神面が最低だった。しかし、これだけの力を持つものを逃すのは惜しいとして、最低のFランクとされた。

次に、緩奈。彼女は魔力がずば抜けて高く、属性も『植物』と『土』と『水』そして『光』の合成で、とても珍しいものだった。しかし、制御と知識が底辺だったため、Fクラスとなった。

最後に慧。彼は、面倒臭いと言う理由で、どの教科のテストも前半部分しか解けなかった。そして、魔力検査では業と低く見せた。理由は面倒臭いからだ。結果、Fクラス。慧の場合、自業自得だ。その事を美夜と夢に話した時、美夜は爆笑し、夢は生徒会のメンバーがこれでいいのかと頭を抱えた。

銀は慧と同じクラスにしてもらう様にしていたので、同じFクラスだ。

「ところで、慧。その子はだれ？」

「ん？この子か？この子は・・・って、緩奈さん？なにをそんなに怒っていらっしゃるのでしょうか？」

緩奈の質問に答えようと緩奈の方を向くと、目が据わっており、銀まで震えて、慧の後ろに隠れている。銀も元は動物なため、本能で恐怖を感じ取ったのだろう。慧も同じく震えている。

「お、お、落ち着いて話そう。この子は、お前らも知っている『銀』だよ？」

「銀ちゃん？銀ちゃんは狼よ？人じゃないわ。誤魔化そうとするなんて・・・なにかやましいことがあるのね？」

緩奈の魔力が上がり、植物達が反応し始めた。これは不味い・・・以前怒らせた時は、公園一つが植物でとんでもない事になったのである。具体的には変な花が咲き、気の幹ほどもある蔦があちこちに生え、樹は大木と化し、元に戻るまで魔法を使っても半年はかかったのであった。

「クククッ早速修羅場とは、流石、慧。期待を裏切らない男だな。」

「お前は何を期待していたんだ！」

真樹の言葉に思わず突っ込みを返す慧であったが

「へーそんな余裕があるのね？」

「ヒッ！」

緩奈の地獄の底から聞こえるような声を聞き、黙ってしまう。

慧はもう駄目かと思ったその時

「貴様達、何をやっている！」

そんな声と共に現れたのは風紀委員の制服に身を包んだ生徒達だった。どうやらその中心にいる男がさっきの言葉を発したらしい。その隣には、花咲 葵と、癖のある金髪に紅と蒼のオッドアイの少女が控えていた。

この学園の制服は、黒を基本としているが、生徒会や風紀委員、魔法部の生徒達はそれぞれ独自の制服を着ている。生徒会は黒を基調に赤い装飾が施された制服。風紀委員は白を基調に青い装飾が施されている。最後に、魔法部は、普通の制服に、魔法陣が描かれている。

「魔力の活性化が見られたと思って来てみれば痴話喧嘩か？・・・今回は見逃してやるからさっさと教室に行くがよい。」

そう言って、男が踵を返し、他の風紀委員を引き連れ何処かへ去っていった。葵は慧を一睨みし去っていき、オッドアイの少女は興味深気に慧達を見ていたが、中心にいた男に声を掛けられ、集団を追いかけに行った。

「・・・なんだったの、今の？」

その出来ごとで慧への怒りが夢散したのか、その集団の背を黙って見送っていた。

「ふむ、さっきの男・・・あいつは神藤しんどう 零風紀委員の委員長だ。かなり強いらしく、生徒会長の神風 美夜と互角の実力を持つ。

『魔法使い』のランクはS、六魔天に一目置かれており、危険度Sランクの依頼も数度こなした事があるらしい。」

「真樹、どこからそんな情報を仕入れてくるんだ？」

「企業秘密だが、俺の仕事を今後手伝うというなら教えてやらん事もない。」

「じゃあ、やめておく。」

「そうか、残念だ。」

この葛城 真樹という男は色々なバイトをしている。それもヤバ気なやつばかり。慧が真樹と知り合ったのもそれが関係しているが、今は置いておく。そのバイトのせいか、慧も驚く程の情報を持っている。

ちなみに属性は『風』だ。

「つて、それより慧！その子のことだけど・・・」

緩奈は思い出した様に慧に詰め寄るが、真樹に止められる。

「緩奈、急がないとHRが始まる。行きながら聞こうじゃないか。」

「うゝ・・・わかったわよ。慧、ちゃんと教えてよね？」

「ああ、わかっている。行きながら話すぞ。」

そして、教室に向かう途中、これまでであったことを簡単にだが説明した。銀のことも最初、半信半疑だったが、本当の姿を見て、納得した。なお、美夜と同居していることについては意図的に黙っていた。

銀を使い魔にした事を言った時の二人の反応は

「ククッ、流石慧。俺の見こんだ男だ。」

「ふゝん。まあ、慧なら、出来るでしょ。それより、あなたのお父さん。ボコッて良い？」

との事だ。慧はこの二人の前では何度か本気を見せた事があるため、特に疑問には思わなかったようだ。

そして、放課後、今日は入学式だけのため、教科書を渡され、今後の日程を伝えられ終えた。緩奈は親と食事の約束、真樹はバイトがあるとのことで、途中までは一緒だったが別れ、今は銀と帰宅している。

生徒会の仕事は今日は無だそうだ。美夜も先に帰っているのとのこと。

「主、これから楽しくなりそうですね。」

「そうだな。あいつらが一緒に良かったよ。人間関係を一から築くのは面倒だしな。だが、あいつらが面倒事を持ってくるからなく。」

「主なら、何があっても大丈夫ですよ。」

「はいはい。ありがとうございます、銀」

銀はこれからの事を楽しみに、慧は面倒事が減ったのか増えたのか複雑な表情で応えた。

そんなやりとりをしているともう、家の前だ。

「ただいま」 「ただいま帰りました。」

二人は、自分達の住まいの扉を開けた。すると

パン！パン！

「「「天城ヶ丘学園 高等部への進学 and 入学おめでとう！」」」

美夜と夢、そして堇が鳴らし終えたクラッカーを持って、祝いの言葉を投げかけてきた。

慧と銀は咄然としていたが

「「「ありがとうございます（ございます）！」」」

そして、入学パーティーが始まった。

余談ではあるが

「なあ、堇、確か薫も俺と同じで進学したよな？ パーティーとかあったんじゃないか？」

慧の父親の娘達への態度と桔梗さんの性格からやるだろうと推測したため問いかけた。

「いいんです。あんなお姉ちゃん・・・お姉ちゃんの事よりお兄ちゃんの事が重要です！」

と言われ、なんと返答していいか分からなかった。

どうやら、銀が薫に噛みついた時、薫が慧に何をしようとしたのか聞き、怒っているようだ。

慧としてはそれが嬉しいやら、家族の団欒を邪魔して悪いやらで、複雑な心境だった。

一方、花咲家

「あれ？ お母さん。堇は？」

自分の進学祝いに堇がない事を疑問に思い薫は桔梗に問う。

「堇なら、慧君の所にお祝いに行っているわよ？」

「何あの子、姉よりあんな奴の方が良いっていうの？」

怒る薫であつたが、それは失敗だつた。

「あんな奴？ ねえ、薫？ あんな奴って誰の事？」

「ヒィ！ ごめんなさい！ ごめんなさい！」

自分の祝い事だと言うのに、殺伐とした雰囲気のため全然嬉しくない薫であつた。

第六話 依頼

「はぁ、はぁ、はぁ……」

暗い路地を一人の少女が必死に走っている。その後ろを統一された制服を来た者達が追って来ている。その顔は確認できず、男か女かも不明だ。

「なんで……なんでわたしが……」

少女は思う。今日は、入学式も終わり友人とお祝いしようと、街中で遊んでいた。暗くなり、明日から授業という事もあり、早めに解散して各自帰宅する事となった。

学校に通い、友達とテレビの事や恋愛などの話で盛り上がり、退屈な授業を過ごし、部活動で汗をかき、帰ると母親が晩御飯を作って待っている。

そんな日常が続くと、それまでは思っていた。

（何故こんな事に、こんな事に会う様な生活はしていないし、そんなものを望んでなんかいない！助けて！助けて！戻して！戻して！日常に戻して！）

そんな少女の前に一人の男が現れた。スーツに身を包んだ金髪の長身の男だ。

「た、助けてください！」

少女は目の前の男に助けを求めた。もう、走る体力も残っていない

い。このままでは追いつかれてしまう。藁にもすがる思いで男に詰め寄るが・・・

「すまん。」

「・・・え？」

ドサツ・・・

少女が今日、最後に聞いた言葉は謝罪の言葉だった。

「さっさと連れて行け・・・」

「「は、ハイ！」」

男は少女を気絶させ、追いかけてきた制服達に少女を渡した。

「まったく・・・依頼とはいえ、こんな仕事をしなければならないとは、な。俺も落ちぶれたものだ。」

男はそう呟く。先ほどの制服達の態度から、かなりの実力者と窺えるが、制服達とは同じ組織ではないらしい。

「今の俺を見たら、貴様は笑うかな・・・晟・・・」

その呟きは闇へと吞まれ、消えて行った。

入学式の次の日、慧と美夜に銀が加わった三人は登校の最中だ。

「ふふ、慧も高等部か・・・楽しみね。」

何が嬉しいのか、楽しそうに笑う美夜。それを見た慧は

「別に校舎が同じだけだろ？学年は違うんだから、別にたいしたことは無いだろ？」

と、不思議そうに問う。

「あ、そっか・・・慧と銀は高等部のカリキュラムを知らないのね？ふふ、楽しみにしていなさい？」

「「?」?」」

不思議そうに首を傾げる主従二人に笑いながら直ぐに分かるわ、と、はぐらかす美夜。

「そんな事より、慧、銀。今日のお昼、何か用事ある？」

「いや、俺はないが・・・」

視線で銀はどうかと問う慧。

「主にないなら私にも無いですよ?」

いつも一緒だと言う銀。

困った顔をする慧を見て笑いながら美夜が続ける。

「なら、お昼は一緒に取りましょう？夢も誘うから。」

「わかった。用事はいれないようにしておく。」

「ええ、お願いね。」

そして、いつもは別れる校門までつくが、今日からは一緒の校舎のため、ここで別れる必要はない。代わりに、ここで会う者達がいる。

「黒澤先輩！おはようございます！」

すぐに別れるというのにわざわざ待っていた堇と

「慧！おはよう！」

後ろから合流してくる緩奈。

「ふむ、朝からハーレムか、流石慧だ。」

どこからともなく現れた真樹。

一段と賑やかになってしまった。そして、殺伐とした空気になる。

「黒澤先輩・・・この方は？」

と、緩奈を指差す堇。

「慧、この後輩は誰？それと、何で神風先輩と一緒に登校しているの？」

そして、慧に親しく声をかける堇と、美夜と暮らしていることを昨日話していなかったため（業と言わなかった。言ったらどうなっていたかわからないため）何故、一緒に登校してくるかについて不思議そうに聞いて来る緩奈。

理由を知っている美夜は笑いを堪え、どうやってかは知らないが真樹も事情やプロフィールは知っているようで、笑っている。銀は殺伐とした雰囲気からあたふたしている。

校門前で立ち止まる6人。登校してくる生徒達は視線を送ってくるが、その殺伐とした空気を感じ取り、無視して先を急いでいる。

「あなた達はそこで何をしているの？」

すると、風紀委員の制服に身を包んだ葵に声を掛けられた。その周囲には同じ制服に身を包んだ生徒達が10人程いる。違うところと言えば、葵の腕には副委員長の腕章がある事だ。傍らには薫もいる。

皆、どこかピリピリした雰囲気醸し出している。

「お、お姉ちゃん！こんな朝からどうしたの？」

いきなりの姉の出現に、慧と一緒にいる所を見られ、慌てる堇。慧が中等部の頃一緒にお昼を食べていた事や進学のお祝いをしたことなど、慧と親しくしている事を知られているのは分かっていたが、実際にその場を見られるのとは訳が違う。

「堇、いつまでもここにいたら遅刻するわよ？早くいきなさい。後、

あなた達も、いつまでもここでたむろされると登校してくる生徒の邪魔だわ。早く行きなさい。」

葵の意見はもつともで、特に反論する理由もないため、教室へ向かおうとする慧達であつたが美夜は違った。

「あら、長女、こんな朝から怒っていると直ぐに老けるわよ？」

「なっ！ふ、フン！怒らせるあなた達が悪いんじゃない。それと、生徒会長でありながら、こんな時間に登校して来るなんて、自覚が足りないんじゃない？」

「あら、違うわよ。内のメンバーは優秀なのばかりだから、わざわざ朝早くに来て処理する仕事がないだけよ？」

「何が優秀よ、源藤さんばかりに押し付けているだけじゃない！」

相変わらず仲が悪い二人は言い合いを始めた。風紀委員達も溜息をついて傍観に徹している。どうやらいつものことらしい。

葵は憎らしげにしているが、美夜は楽しんでる。どうやら、葵イジリは美夜の趣味と化しているらしい。趣味が悪いとしか言いようが無い。

そんな二人をこの際置いて行こうと考えていた慧だが、そこに一人の生徒が割ってはいってきた。

「まあまあ、葵ちゃん。落ち着いて。美夜ちゃんもあまり葵ちゃんをからかわないで上げてよ。葵ちゃんはなんだかんだ言っても素直な性格なんだから。」

その生徒は癖っ毛のある金髪、赤と青のオッドアイの生徒で、葵と同じく風紀委員の制服に身を包み、副委員長長の腕章を付けている。

「ちょっと、光^{ひかり}！何よ、素直な性格って！」

「えー！だって葵ちゃん、美夜ちゃんにからかわれているのに気がついてないじゃない。」

「からかわれて・・・って、神風さん！本当なの！？」

そう聞かれ笑いを応える美夜に、更に憤慨する葵。

それを傍から見ている慧達は、誰？という顔をしている。

「えっと、ですね。先輩。あの人は聖道^{せいどう} 光^{ひかり}さんと言って、風紀委員の副委員長で、高等部の2年生です。『光』属性ですが、魔力の高さと聖道家の人間という事もあって、クラスはSクラスです。」

その中で唯一、光と面識がある堇が説明してくれた。

「へー。聖道家ね・・・いいところのお嬢さんなんだ。彼女。」

聖道家とは『聖王騎士団』に所属する『魔法使い』の家系で、名家でもある。家系を遡ると、イギリス人の血も入っているようで、たまに、その血が濃く出るものが現れるという。その者の多くが『聖』の属性に目覚めていることから、先祖のイギリス人が『聖』の属性を備えていたのではないかという説もある。そして、彼女にもその可能性があるのだろう。

なお、聖道家は良くイギリス人の血を家系に入れているが、『聖』属性を持つものを産む可能性を増やすためと推測する。

ここで出てきた属性についてだが、まず『光』。これはその名の通り、光を生み出したり、放出したりする事が出来る魔法だ。『闇』とは対をなす属性であり、一般的に、『闇』の弱点は光と言われている。

次に『聖』属性だが、これは『光』の特殊なものだ。その効果は、『呪』や『腐食』などの属性を完全に払う事ができる。ちなみに通常の『光』では不可能である。

「え〜と・・・先輩？あの人は『彼女』じゃないですよ？」

「へ？どういう意味だ？」

「つまり、『彼女』ではなく『彼』が正解ということだ。」

慧の質問に答えたのは董ではなく真樹だった。

「「え・・・え〜！！」」

その言葉に驚く慧と緩奈。

それは無理のないことだ。身長は150？位、綺麗な顔立ち、そしてなにより女子の制服を着ている。どこからどう見ても女の子なのだ。

「え？あれで男なの！？」

「ははは、良く言われるよ。でも一応、男の子だよ?」

美夜と葵の争いの仲裁に入っていたはずだが、こちらの会話が耳に入ったのか、緩奈の言葉に返答してきた。緩奈は不味いこと言ってしまったかと気まずそうな顔をしているが、言われた本人は気にしていないようだ。

「なんでこんな格好しているのかって顔だね? ふふ、簡単だよ。好きだからしているんだ。」

「良いのか? 校則とかで駄目なんじゃないのか?」

「ん? 別にそんな事ないよ? 校則ちゃんと読んだ?」

光の返答に、慧は真樹に向かい本当かと問いかける。

「ふむ。本当だな。校則には、『天城ヶ丘学園の生徒はこの学園の敷地にいる際はこの学園の制服を身につける事』としか書いていない。よって、校則には抵触しない。」

「へー、君、良く校則を覚えているね。」

「ふっ、この程度当然だ。」

真樹が校則を覚えていた事が意外だったのか驚く光と当たり前だと胸を張る真樹。

「ところで、君が慧君だね?」

「ああ、そうだが?」

「ふうん。君が・・・」

そう言って慧の周りを回りながら、慧を観察する光。そして、一頻り観察を終えると

「うん。気に入ったよ。慧君。」

と言って、慧の頬にキスしてきた。

その行動に慧はおろか、言い争いをしていた美夜や葵、傍観していた緩奈や堇、薫、そしてあの真樹までもが、咄然として固まってしまった。

当の光はテヘッと舌を出し

「じゃあ、またね？慧君。それと、皆このままだと遅刻しちゃうよ？」

そう言って、去っていった。そしてその場にいたものは皆、予鈴が鳴るまでその場に固まったままだった。

ちなみに風紀委員はと言うと

「あの男・・・我らが光ちゃんに何とかうらやましいことを・・・」

「美夜様と同棲しているだけでなく・・・」

「許さん！黒澤 慧！」

一致団結していた。

「はー……これだから内の男どもは」

薫はそんな委員を見て呆れ、深い溜息を一つ。

昼休み、慧は精神的にズタボロ、銀はもみくちゃにされ疲れ果てていた。周囲からの視線と質問攻め、そして何より緩奈からの殺気。真樹は助け舟を出してくれず、銀は女子生徒にもみくちゃにされていた。

慧がこんなに質問攻めに会ったのは朝の事もあるが、銀が慧の使い魔と自己紹介した事と聖道 光が慧にキスした事が一番大きい。慧はなんとか、自分はいした事がない。魔具に頼った。光先輩とは何でもないなど、言い分けを並べていた。

銀は慧が疲れているのを心配そうに見つめたり、撫でられ喜んでいたりする姿が女子にグッと来たのか、もみくちゃにされた。男子生徒が触らなかつたのは不幸中の幸い。触っていたら、慧がボコルか、銀に氷漬けにされていただろう。

慧意外の男に触られるのを極端に嫌う銀であった。

例外は、夜城と白河、後は真樹位だろう。

「さあ、慧。色々吐いて貰いましょうか？」

「黒澤先輩。覚悟はいいですか？」

そして、追いつきかけないように、緩奈と堇に質問される。

堇は緩奈や真樹もいるためか慧を『先輩』と呼ぶ。

「つーか、なんでお前らここにいるんだ？」

そう、今は昼休み、場所は屋上。慧は美夜と銀、夢とお昼を食べるためやってきた訳だが、何故か先客として、この三人までいたのだ。

「真樹から聞いた。」

「葛城先輩に教えて貰いました。」

二人は言いながら真樹を指差す。そこには両腕を腰に当て、高笑いする真樹がいた。

「ハッハッハッ！」

「真樹・・・後で殺す！」

慧は真樹を睨むが、目の前にいる二人が逃がしてくれないため、どうにも出来ないのであった。

そこに、傍観していた美夜が仲裁に入ってきた。流石に見るに堪えたのだろう。

「はいはい、そこまで。とりあえずお昼を食べながら話しましょう。」

「そうですね。美夜の言う通りです。私も仙海さんと葛城さんの事は知らないので紹介してくれると嬉しいですよ？」

夢からのお願ひもあり、お昼を食べながら、共通の友人である慧が紹介する事になった。続けて、これまでであったことの詳細を話し、緩奈も慧が美夜と暮らしている事にとりあえず納得した。

董も緩奈が慧の中学のころからの友人として納得してくれた。

「さて、みんな納得してくれたところで、慧、銀。今日は放課後、生徒会室に集合ね？」

「ああ、わかった。」

どうやら今日は生徒会の仕事があるらしく放課後の予定が決まった。

「そっか、慧は生徒会に入ったのよね・・・ねえ、慧。今度の土曜日はあいているの？」

少し悩む素振りを見せ、ならばと、緩奈は慧に休みの予定を聞く。

「ん？土曜か？今の所は何もないがどうしたんだ？」

「忘れたの？買い物に付き合ってくれてるって言ったわよね？」

「ああ！そういえばそうだったな。わかった。空けておく。」

「うん！」

その会話を聞いていた女性陣と真樹は互いに頷き尾行を決意した。

「????」

なお、銀は良く分かっていなかった。

「さて、全員集まったわね？」

「といっても、4人だけだけどな。」

放課後、美夜と夢、慧と銀の4人は生徒会室へ集まっていた。

「で?何か急ぎの仕事があるのか?」

入学式も終わり、仕事は無い訳ではないが、緊急のものはない。
役職や分担は事前に決めてある。

会長…神風 美夜

副会長…源藤 夢

副会長…黒澤 慧

書記…黒澤 銀

会計…空席

庶務…空席

となっている。

「いいえ。理事長から話があったのよ。」

「理事長から？」

「ええ、最近『魔法使い』の資格を持った者や、その資質がある者が誘拐されている事件が発生しているの。知っている？」

「確かにニュースなどになってはいるが、今に始まった事ではないだろう？」

『魔法使い』やその資質のあるものが誘拐される事件はよくとは言わないが全くない訳ではない。研究材料や他国の戦力として誘拐され、売られる事がある。

「ええ、そうね。ただ、今回話題になっている誘拐事件はちよつと毛色が違うのよ。」

「どういふふうに違うのですか？」

銀の質問に美夜は続けて答える。

「今回狙われているのは、珍しい属性を持つものや名家の血統のものばかりなのよ。しかも、誘拐されたのに身代金も要求せず、かといって、どこかに売られる訳でもない。ただ衰弱した状態で発見されるのよ。」

普通、誘拐というリスクを負う以上何かしらの見返りを求めるはずである。身代金なり、身柄を裏の組織や他国に売って儲けたりなどだ。それが無いのはかなり不自然である。

「だから今朝、風紀委員達がピリピリして、予定にない身周りをしていたのか。」

風紀委員は定期的に校内を見回るが基本放課後で、朝方は身だしなみのチェック位でしか見回ったりしないのである。一応、生徒会ということで事前に予定は教えられている。まあ、その後の変更などは教えられないことが多いが・・・

「ええ、そういうこと。情報ではまだこの街ではない様だけど、つい昨日は隣町で起きたらしいわ。私達への依頼は他の学校も含めた学生達の保護と誘拐犯の捕縛よ。私達も放課後見回る事になるから。」

「その前に質問が二つ。一つ、どうやって犯人達は被害者の属性を見破ったんだ？個人の属性は厳重に管理されているはずだろ？」

個人が持つ属性は『闇』のような忌み嫌われるものから、『無』のような合成属性もあり、差別されたり狙われたりするため、六魔天と国で個人の属性情報は特に厳重に管理されているはずなのだ。

「それについては理事長でも調べている最中らしいわ。」

「そうか、じゃあもう一つ、これは『魔法使い』の仕事という事での、六魔天からの依頼か？それともこの学園の生徒会への依頼か？」

『魔法使い』の仕事については以前述べた通りだが、この天城ヶ丘学園は敷地内とはいえ、魔法の制限がほとんどない学園の一つだ。そういう学園には『魔法使い』の育成ということでこういった仕事も入ってくる。その仕事の中心となるのが、生徒会、風紀委員そして魔法部だ。

この三つの組織で対応、場合によっては一般の生徒にも協力をあおいで良い事になっている。

慧が言いたいのは『魔法使い』の仕事としての場合と学園への仕事の場合では危険度が違うため、その確認だ。

「この学園への依頼よ。一応、一般生徒への協力をあおげはするけど、今回は風紀委員の委員長と話合って、一般生徒への協力はなしよ。不安を煽るし、ちょっとした臭いのよね。後、魔法部は休部中にまたやらかして、休学中だから、充てにならないから。」

現在の魔法部部員はどうにも魔法に対し貪欲らしく、たびたび違法な魔法の実験や禁呪レベルの儀式を行っているらしく、学園でも手を焼いているらしい。しかし、面倒事は増やすが、それを不問にする位の成果は上げているらしい。

「わかった。組分けはどうする？美夜と夢さん。俺と銀が妥当だが、今回は珍しい属性や血筋で狙われているんだよね？」

慧は『闇』で、銀は普通にしていれば『氷』だけで特に狙われないが、美夜は『無』、夢は『幻』と珍しい属性なため狙われる心配がでてくる。

「そうね・・・私と銀、慧と夢といったところかしら？」

「「「わかった（わかりました）。」「」」

「こうして夢さんと話すのは初めてですよね？」

現在、慧と夢は街の中を二人で見回っている。

「ええ、そうですね。大体、美夜か銀さんがあなたの側にいますからね。」

いつも美夜か銀が必ず慧の側にいるため夢と二人きりで話すことはこれまで無かった。

「そんなにいますかね？」

夢の言葉に首を傾げる慧。それを見てクスクスと笑う夢。

「ええ、そうですよ。あなたを拾った次の日の美夜は・・・っと、これは秘密でした。」

「なんですかそれは、俺は捨て犬ですか？」

「あら、状況的には会っていると思いますよ？」

夢が言いたかった事はないが、慧としてはその捨て犬発言の方が重要だった。

そんな話をしながら、身周りを続けるが、特になにもない。ナンパやケンカもあったが、慧が瞬殺した。

「黒澤君、美夜が言った通り凄いですね。」

慧の力を見た夢はそんな感想を告げる。

「いや、これくらいは普通じゃないですか？」

慧はこれが普通と答えるが、実際は違う。夢の目から見てもその動きは清廉されていた。つまり、慧の普通の基準が違うのだ。

慧の周りで親しい同年代は敵方以外では真樹位だった。その結果、真樹の身体能力を基準に置いているため、ナンパやケンカを止めた時の動きを普通と捉えてしまっているのだ。

といっても、それは身体能力や格闘技の話であり、魔法については基準がどんなものか正確に把握している。

「そんなことはないと思いますけど・・・」

夢はこの慧と言う少年は何者なのか、考える。美夜のお気に入り、悪人ではないことは確かだ。だが、使い魔をもち、今見せた体術は間違いなく夢の周りの人間でもトップクラスだろう。それでありながら、『魔法使い』のランクはFで、本人も魔法はたいしたことはないと言う。

少なくとも、何かを隠している事は確かだ。信用は出来るが、信頼は出来ない。それが夢の慧に対する評価だ。

「・・・そろそろ、時間ですね。」

「え、ええ・・・そうですね。美夜達に連絡しましょうか。」

街を見回って大分経つが、何事もなく、事前に打ち合わせていた時間になった。

美夜と銀に連絡を取ると、あちらも異常はなかったとのことで、一度合流し解散することになった。

今日は何事も無く終了した。

第七話 気付かぬ内に進む事件

見周りを始め3日が経つが、これといって収穫は無かった。

誘拐事件もそれほど頻発に起きている訳ではないので学園側でもあまり大事にはしないようだ。生徒達は普通に学園生活を過ごしている。

しかし、風紀委員や生徒会の面々は警戒を緩めず放課後の見周りを続けている。それは一重に『七大法典』の言葉の重さ故だろう。これが誰とも知れない『魔法使い』であれば、そこまで警戒は抱かなかったのかもしれない。

「ねえ、慧。今日も生徒会の仕事なの？」

放課後、慧が帰り仕度をしていると緩奈に声を掛けられた。どうやら、3人・・・銀も含めて4人揃って遊べないのが不満らしい。

「悪いな、緩奈。ちょっと立混んでいて無理なんだ。」

「むゝ真樹も、バイトだって言って相手してくんないし・・・」

拗ねる緩奈。その表情は寂しそうである。

緩奈は社交的と思われがちだ。実際、入学して僅か4日で、クラスメイトと楽しそうに話している。逆に、慧は休み時間は昼寝をするか、銀や真樹、緩奈と話をする位だ。真樹は真樹で、いつの間にか何処かへ消え、気付いたら戻ってきているといった具合で、少な

くとも中等部からの付き合いである3人の中では一番社交的ではある。

反面、緩奈が本当に心を開いているのは慧と真樹、銀だけである。クラスメイトと友人の一線を確かに引いているのである。だからこそ、放課後、クラスメイトに誘われても遊ぶといったことはまずない。慧や真樹に用事がある時は素直に帰るのであった。

そんな緩奈の頭を撫でる慧。

「悪いな。でも明日は大丈夫だから。待ち合わせの時間は後でメールくれるか？」

「あ・・・う、うん！明日、ちゃんと遅れないできてよね！」

「ああ、分かっている。気を付けて帰れよ？」

「もう！子供じゃないんだから！じゃあね、慧！」

元気に手を振りながら帰っていく姿は本当に子供の様だよなと思わず思った慧であった。

「さて、銀。今日も見周り頑張りますか！」

「はい！」

珍しく気合いを入れて生徒会室へと向かって行く慧。

そんな主を銀は嬉しそうに見ているのであった。

「「ただいま・・・」」

疲れ切った声と共に慧、美夜、銀が帰宅する。

結局今日も何も無く終わった。事件が起こらない事は喜ばしいが、依頼の中に誘拐犯の捕縛が含まれているため、自分達、若しくは六魔天や警察、フリーの『魔法使い』が捕まえていない限り、続くのである。

事件の取っ掛かりもないため、精神的疲労がかさむのは仕方がないだろう。

慧に関して言えば、それよりも夢と放課後行動する事により学園内で二人は付き合っているのでは？という噂が広まり、周囲からの殺気などによる疲労がほとんどだが・・・

「とりあえず、私と銀はお風呂に入ってくるわ。」

「わかった。俺は夕御飯の準備をしておく。」

ここ三日の帰宅してからのパターンは美夜と銀が最初にお風呂、その間に慧が夕御飯の準備をし、美夜達が上がったら交替。そして就寝となる。

共同生活も早3ヶ月。互いに慣れたものだ。

そして食後、3人はお茶をすすっている。今日は日本茶だ。明日が休みと言う事もあり遅くまで遊び歩く生徒が今日は多かつ

たため、必然的に生徒会メンバーも遅くまで見回る事となった。

3人とも疲れてはいるが、食後のお茶は日課となっている。誰が言った訳でもないが、集まってお茶をすすっているものであった。

「それで、慧。明日の事なんだけど・・・見周りまでどうする？」

今回の依頼はあくまで学園への依頼であるため、休日の見周りに強制はない。が、慧達は休日も見周りをする事になっていた。

誘拐は人の目が少なくなる夕方から夜間に行われる事がほとんどなため、慧達の行動も夕方からになる。美夜は慧にそれまでの行動を確認するために話かけた。

「ああ、俺は緩奈と約束があるから、見周りまでは緩奈の買い物に付き合うよ。集合には遅れない様にするから。」

「そう・・・分かったわ。それと、分かっていると思うけど、気を付けなさいね？彼女も珍しい属性、『植物』の持ち主だからね？」

美夜は念のためと慧に釘を刺す。

「ああ、わかっている。ちゃんと送っていくから大丈夫だ。美夜も気を付けろよ？」

慧も心得ていると返す。また、美夜も『無』属性の持ち主のため、気を付けるよう促す。いくら、Sランクの『魔法使い』と言え、まだ学生的身。なにより女の子だ。心配するのは当たり前だ。

「ふふ、ありがとう。大丈夫よ。明日は銀と一日いるから。」

そう言って銀を抱きしめる美夜。

慧は視線でそうなのか？と銀に問う。

「はい！明日は美夜と一緒に主を尾フゴフゴ・・・」

余計な事を喋ろうとした銀の口を強引に塞ぐ美夜。

「ははは・・・、そろそろ寝るわ。銀、今日は私と寝るわよ？お休み、慧。」

「あ、ああ。お休み、美夜、銀。」

銀を抱えて部屋へ行く美夜を啞然と見送る慧であった。

そこは、どこかの実験室・・・

「ゴブ！ゴボツ！ゴボツ！」

緑色の液体の入った大人一人入る位の大きさの試験管の様な容器の中には少年が一人入っており、もがき苦しんでいる。

「クソ！こいつも駄目か・・・いつになったら、我らが神の依代は見つかるのか・・・」

白衣の男はそう言いながら、目の前の装置をいじる。すると、試験管の中にいた少年が吐き出され、地面でもがいている。

「さっさと連れて行け！後、次の被験者を連れてこい！」

「はっ！」

白衣の男は制服達にそう命ずると、疲れたのか、近くの椅子に座りぐったりとしている。

「今回もはずれか？博士。」

その男に声をかける金髪の男。博士と呼ばれた男は金髪の男を一瞥すると、疲れた声で返答する。

「ああ、フリードか・・・そうだよ。今回もはずれだ。魔力、血筋、属性、これまで様々な者を試し、ある程度の関係性は把握した。だが、未だ適合者は現れない。六魔天の縄張りにまで侵入するという危険を冒してまで続けているというのに、成果はゼロだ。」

「・・・・・・・・」

金髪の男・・・フリードは黙って博士の語りを聞く。

「だけど、諦めないよ。かつて『魔法使い』どもが否定した神こそが、人々に本当の祝福をもたらす神なのだ。我らの神が蘇れば、今の世界の不条理を覆すことができる！」

その言葉にフリードは口をはさむ。

「子供たちをこのような実験のため誘拐することは不条理じゃないのか？」

「黙れ！僕達の崇高な目的を果たすためには仕方のないことだよ・・・」

・そう、彼等は人柱なのだよ！何れ神が蘇れば英雄となれるんだ！彼等も幸福だろう？フヒヤヒヤヒヤ！」

フリードは博士に聞こえないようにポツリとつぶやく

「死んで英雄になることなんて、望んでいないと思うがな・・・」

これまでは死者は出ていなかったし、不適合だった者は見つかりやすい所に置いてきたりしてきた。また、この実験以外、非人道的倫理的な事もしていないことは確認している。でなければ、フリードが手を貸す事は無かっただろう。

だが、これからもそうとは限らない。

その言葉が聞こえた訳ではないだろうが、博士は高笑いを止め、フリードに言う。

「フリード、我らが神を蘇らせるため、連れて来てくれ。依代となるで、あろう人間を！」

「・・・わかった。だが、分かっているな？俺が貴様の依頼を達成した時の報酬を？」

「ああ、分かっているさ。大丈夫。我らの神が蘇れば、君の願いも叶うよ。」

その言葉を聞き、フリードは再び依頼を達成するため、街の中へと繰り出そうとする。すれ違いざまに、次の被験者が制服達に連れてこられていた。その子供はつい先日捕らえた少女であった。その目は怯えきっている

- ・ その少女を一瞥するだけで、そのまま振りかえりもせず歩きだした。被害者が増える前に、どうか依代が見つかる事を祈りながら・

第八話 デートと尾行

今日は休日、空は快晴、絶好の外出日和だ。人によっては一日中家で寝ていたくなるだろう。むろん、慧も普段なら後者の人間な訳だが、今日は緩奈と買い物物の約束があるため、珍しく早い時間に起きている。

「それじゃ、言ってくる。また夕方に、な。」

「ええ、楽しんで来なさい。」

「それでは主、また後で。」

慧は家を出て行き、残ったのは美夜と銀の二人となった。

「それで、美夜。この後どうするのですか？主がどこで緩奈と待ち合わせしているかなんてわかるのですか？」

「ふふ、大丈夫。手は打ってあるわ。私達はまず、夢と合流しましょう。」

二人は慧を尾行するための手順を確認しあっていた。

「うーん、慧はまだかなー・・・」

緩奈は一人、慧を待っていた。待ち合わせの場所は櫻木市の中心

街にある時計塔の下。この時計塔はこの街でも目立つため良く待ち合わせの目印として使われる。

休日と言う事もあり、周囲は友達と待ち合わせをしている者やカップルで溢れている。

「はあ、早く来すぎちゃったな。なにやっているんだろう・・・」

今日が楽しみだったため待ち切れず、緩奈は待ち合わせの時間より、1時間以上前から待っている。慧と出かけるのはこれが初めてという訳ではない。真樹と一緒にの時もあれば、二人だけの時もある。しかし、慧と最後に出かけたのは連絡が取れなくなる前、つまり3カ月前になる。また、美夜や堇、銀という美少女達も慧の周りに増え、内心の焦りもあり待ち切れなかったのだ。

「でも、考えてもみなかったなあ。慧の周りにあんなに綺麗な人や可愛い子が集まるなんて。中学の頃じゃ考えられなかったのに・・・。容姿だって、まあ、私は格好良いと思うけど・・・周りは普通って言っていたから安心していたのに・・・」

ちなみに中学の頃の慧は雰囲気が大人数に大人びていた事とたまに子供のような馬鹿をやっていた事、その二つのギャップから女生徒に実はモテていた。しかし、学校を無断で休むことが多く、忌避されていたため、緩奈は他の女生徒に警戒していなかった。

なお、慧の容姿は黒髪で黒い瞳、少しつり気味の目で顔は整っているが、目立つ訳ではない。まあ、ランクをつければ中の上程度だろう。

周囲の評価は、普通。でも真面目な顔をすれば格好良いのに、とのことだ。

こうして待つこと数十分、そろそろ待ち合わせの時間だ。緩奈は慧を探すようにキョロキョロと周囲を見るが、緩奈の身長は平均より低めなため、また、人の流れも多く、見つけることが中々できない。

そんな時だ。

「よ！緩奈。今日は早いな。いつもならもう少し遅めじゃないか？」

唐突に緩奈の肩を叩きながら慧が話かけてきた。

「もう！遅いよ、慧。待ちくたびれる所だったじゃない！」

現在の時刻は9時50分。待ち合わせの十分前に来たので遅刻ではないが、緩奈は内心の焦りからついそんな事を口走ってしまっていた。

慧としては緩奈が1時間も前から待っているとは思わず、また、自分も遅刻ではないため、いつも通りに挨拶をしたら怒られた。よってこう問い返すのは普通だろう。

「緩奈、一体何時から待っていたんだ？」

慧としては当然の質問をした訳であり、何も悪気はなかったのだが、一時間も前から待っていたなど、楽しみにしていたのがバレバレなため、言える訳もなく、（慧の鈍さなら気付かないかもしれないが、この時の緩奈はそこまで考えが及ばなかった、）よって、強引に誤魔化すことにした。

「そ、そんな事より！早く行きましょう。慧は夕方から用事があるんでしょう？もったいないよ。」

そう言って、慧の手を掴み、引っ張っていく緩奈。

「ちょ、ちょっと待って！一人で歩けるから！」

引っ張られ、つんのめりながらも、緩奈の手を振り払おうとはせず、そのまま隣に並び、歩く慧であった。

一方その頃

「お、手を繋いで歩き始めたわよ？」

物陰から二人を見守る影が4人。

「え？どこですか？美夜さん？」

「ヴァイオレット、ここではナイトと呼びなさい。」

「はい。ナイトさん。で、お兄ちゃん・・・ターゲットKは？」

見るからに怪しい4人組みが慧と緩奈を尾行している。帽子に、春先だというのに全身を覆うコート、そしてサングラス。警察に通報されていてもおかしくないだろう。

「あの、わざわざ、こーどねーむ？で呼び合う必要はあるのでしょうか？」

「甘いわよ。シルバー、どこで誰が聞いているか分からないじゃない。」

「ふふ、シルバー、諦めなさい。こうなったナイトは止められないわ。」

「夢・・・じゃなかった。ドリーム・・・」

しかし、誰も見向きもしない。これはドリームの魔法の応用だ。『幻』で4人の姿を阻害しているのだ。そして、ナイトの『無』で『幻』による魔法の残示を消しているので気付かれないということだ。

ナイトと呼ばれる少女は目に当てていた双眼鏡をヴァイオレットに渡すと、通信機を取りだし、誰かと連絡を取る。

「こちらナイト、そちらからの報告を頼む。」

一泊置いた後、通信機から返答があった。

『ククッ、こちら、ウッド。どうやらターゲットはまず服を買いに向かうようだ。今いる通りをそのまま少し行った所にある洋服店だ。店の名前は・・・』

ナイトは店の名前を聞き、どこにあるか、把握してから通信を切った。

「了解した。引き続き監視を頼む。」

「ラジャー」

通信機をしまうと他の3人に目配せし、尾行を継続した。

「ん？」

慧は何かを感じ取り振り返る。

「気のせいかな？」

「慧、どうしたの？」

急に立ち止まり背後を気にする慧に緩奈は問いかけた。

「いや、誰かに見られている気がしてな・・・悪い、気のせいみたいだ。さ、次はどこに行く？」

視線を感じた慧であったが、今はもう感じないため、緩奈に氣を取られた男が不躰な視線を寄こしたものと判断した。感じはそうだったものとは違う気がするが、気にしないことにし、次はどこに行くか、促した。

「そう？ならいいけど・・・なら、氣を取り直して、次は・・・」

あれから、服や靴などを見て周り、緩奈が氣に入った物をいくつか買った。もちろん慧のおごりで。一通り服や靴などは見て回ったため、次はどうするのか、緩奈に問いかける。が、不意にお腹の音が聞こえてきた。

慧が視線を音源へ向けると、顔を赤くした緩奈がいた。

「・・・そろそろお昼みたいだし、御飯食べにいくか？」

「……………うん。」

緩奈は顔を赤くし、慧の言葉に頷いた。

「店はどこにする？」

「慧に任せる……………」

恥ずかしかったのだろう。さっきまでの勢いは也を潜め、大人しくなってしまった。

その姿に、苦笑を一つすると、慧は緩奈の手を引っ張り近くのファーストフード店、マッドナイトへと足を向けるのであった。

マッドナイト……………不吉な名前だが、その奇抜さがうけて人気のチェーン店だ。

「こちらウッド、ターゲットは近くのマッドへ入る様だ。」

「了解したわ。こちらも向かう。」

相変わらず5人は定期的に連絡を取り合い、尾行を続けていた。

「む……………お兄……………ターゲットK、相変わらず仙海先輩と手を繋いでいます。」

ヴァイオレットはむくれている。ヴァイオレットはKと一緒に帰

ることはほとんどなく、二人きりで出かけた事もない。手を繋ぐ機会もまったくないため、焼きもちを焼いているのだ。

「K、楽しそうですね・・・」

シルバーは楽しそうなKを見て、嬉しそうな顔をしてはいるが、声は萎んでいる。その場に自分がいない事が寂しいのだろう。

「あらあら、Kはモテモテですね。」

ドリームはそんな二人を見て、微笑む。この二人がKに向ける好意は、今は家族に向けるものと同じだろう。だが、これからどうなるのか・・・その事を想像しながら姉の様に微笑むドリームであった。

「慧、私という時より楽しそうじゃない。」

訂正、ドリームが微笑む相手がここにもう一人。ナイトが慧に向ける気持ちは多分、独占欲。しかし、そこに好意は確かにある。それは前者二人と少し違う。家族へ向ける好意ではない。ならば、なんなのか・・・

ナイト自身もその気持ちが不明なためか、気付いていないのか、とにかく不快な事は確かなので、慧を睨むのであった。

そして、もう一人の尾行者は・・・

「ククッ、これは面白くなってきた。俺としては、付き合いの長い緩奈を選んで欲しいところだが、これは奴が決める事だからな。さて、楽しみが増えてきた。」

親友の周りで起こる騒動を楽しんでいたのであった。

そんな事に気付かない二人はお昼を食べ、相変わらず手を繋いだまま街中を歩いている。

しかし時折

「……ん？」

立ち止まり、周囲を見渡す慧。

「どうしたの？ さっきから……何か気になる事でもあるの？」

緩奈はそんな慧を不思議そうに見る。マッドを出てからずっとこの調子なのだ。

「……いや、なんというか……さっきから見られている気がするんだよ。途中で途切れたりするし、視線の主が変わったり、増えたり減ったりしているんだが……時々殺気が含まれるんだよ。」

始めは緩奈に向いていると思ったが、どちらかというと慧に視線が向けられている事が多い。自分が見られている事から、何か厄介事かと思ひ緩奈を巻き込まない様に業と隙を作ったりして様子を見ていたが、一向に襲ってこないため、そっち方面でもないようだ。

「気のせいじゃないの？」

「うーん、気のせいじゃないとは思うんだが・・・ま、いいか。気にしても仕方がない。」

時々含まれる殺気は気になるが、特に何かしてくる様子もない上に、殺気は主に慧に向けられるため、無視する事にした。

慧は口では気にしないとってはいるが、一応警戒を解く気はない。が、かと言って、緩奈に気を使わせるような事はしない事にしたのだった。

「そっか、まあ、慧がいれば大丈夫だね？」

「いや、俺弱いから。どうか、守ってください。」

緩奈は慧がいれば何があっても大丈夫と信頼しているが、肝心の慧はむしろ守ってくださいと緩奈に頼むのであった。

「クスクス、わかったよ。何かあったら守ってあげるよ。」

そんな慧に呆れながら了承する緩奈であったが、本当に何かあったら慧が助けてくれる事はわかってしているため、その表情は楽しそうだ。

「ああ、よろしく頼むよ。で、次はどこ行く？一通り買い物は終わった見たいだが・・・」

お昼を食べた後、二人は色々な店を見て回ったが、緩奈は何かを買おうとはしなかった。慧の懐に気を使った・・・訳ではなく、欲しいものはあらかた午前中に買い終わったのであった。

「うん。特に買う物はないよ。でもまだ、時間はあるよね？じゃあ次は・・・あ！ゲームセンターに行きたいんだけど、良い？」

「珍しいな。緩奈がゲーセンに行きたいなんて。」

緩奈はゲームセンターの騒々しさが苦手と言う事で行きたがらない。しかし、今日は自分から行きたいと言ってきたため、少し驚く慧であった。

「うん。クラスメイトがね、最近ゲームセンターに良く当たる占いの機械が出たって言っていたのよ。だから試してみたくて・・・」

「へーそんなに当たるのか。じゃあ、行ってみますか。」

「うん！」

二人はそのままゲームセンターへと足を延ばす事にした。今の場所からそれほど離れてはおらず、目立つ場所にあるため、すんなりと見つかった。

「おお！結構並んでいるな。しかも、カップルが多い。」

噂の占い機の前には20人近い行列が並んでおり、女性同士の者もいるが、カップルの割合が上だろう。

「こりゃ、並ぶと時間的にここで最後だな・・・どうする？並ぶか？」

今日の見周りの集合時間から見てもここで並ぶと他にはいけないだろう。

「うーん・・・よし！並ぼうよ！」

緩奈は少し悩むが、どうしても占いをしたいため、並ぶことを選んだ。

「わかった。しかし、本当に多いな。特にカップルが。」

「まあね。この占いは特に恋愛の占いが的中する確率が高い見たいのよ。だから、カップルが多いのね。後、多分だけど女の子同士で来ているのは、気になる男性のプロフィールを調べて来ているんでしょうね。」

「ふーん。でもまあ、占いは所詮占いだからな。当たるも八卦当たらぬも八卦だろうに。」

慧は達観したように言う。慧としては、的中率がほぼ100%の未来視の『魔法使い』を知っているので、こういう、機械やテレビの占いにはたいして興味がない。

「もう、占いを甘くみちゃだめだよ？統計学などからより正確になってきているんだから。」

占いとは、様々な情報から、過去こういう血液型のものはこうだった。星座のものはこうだったなど、過去に起こった結果を似通ったプロフィールや考えの者に当てはめているのである。よって、完璧に当たると言う事はないが、よほどベタラメな占でない限り、全く当たらないということもまた無いのだ。

また、魔法が世界に広まってから、更に占いの精度は増した。これは、魔力は世界と密接に関わりがあり、これも重用な要因である

からだ。

なお、精度が増ただけであり、的中率は未だ60%位だ。占いとは人の運命を見ることと同義である。よって、そこの占い師や、統計学の占いは結局その程度である。

しかし、例外はある。一つは未来視、もう一つは古くからの占星術の家系のものだ。この者達が視るものは「過去の結果」ではなく幾つも分岐された「未来の結果」だからだ。

二人は占いについて語っていると、やっと自分達の番に回って来た。緩奈は我先にと除き防止の布をくぐり中に入っていた。慧も後続く。

「わー！何から占おうかな？」

緩奈は楽しそうに何を占うか悩んでいる。

「よし！じゃあ、恋愛運からにしよう。慧も一緒にやろう？」

てっきり付き添いと思っていた慧は緩奈の誘いに戸惑う。別に信じてもないものをやりたくはないのであった。

「いや、俺は・・・」

「いいから、いいから。ほら、ここに、自分の名前、生年月日、好きなもの、属性を入れるんだって。後、いくつかの質問もあるみたいだよ？」

拒否する慧を無理矢理引っ張り、緩奈は自分の隣に立たせ、入力するように促す。緩奈は既に入力を終えていた。

「はあ、わかったよ。えーと、黒澤 慧っと、生年月日は・・・」

慧は自分のプロフィールを入力し、いくつかの質問に答え、決定ボタンを押した。

すると、流れてきたのはベートーヴェンの「運命」。

「なんだこの選曲は！」

思わず突っ込んでしまった慧であった。

そして数秒後、結果が出てきた。そこには・・・

「・・・・・・・・」

「慧、落ち込まないでよ、もう。占いなんて信じないんじゃないの？」

慧はかなり落ち込んでいる。その理由は

「もう、そんなにショックなの？ 『あなたは、度々騒動に巻き込まれるでしょう。平穏な日常は少ないため、大切にされた方が良いです。』って書かかれていたのが。」

そう、慧の占いの結果は散々だったからだ。

恋愛運も含め、様々な占いを試したが、その結果は惨敗。基本的

な事は以下の通りである。

金運…お金は入るが、直ぐに出て行くため貯まらない。

健康運…直ぐに怪我をし、直ったと思ったら、また怪我をする。
の繰り返し。

恋愛運…ガンバ！

仕事運…仕事は多く大変です。健康に気をつけましょう。

総合評価…『あなたは、度々騒動に巻き込まれるでしょう。平穏な日常は少ないため、大切にされた方が良いです。』

であったのだ。落ち込むのも無理ないだろう。

ちなみに、相性占いもあり、慧と緩奈の相性は『互いの本当を知っても変わらず支え合うことの出来る間柄です。しかし、友達から抜け出すには苦労するでしょう。』ということが書いてあった。

それを見た緩奈は本当に微妙な顔をしていた。

慧が落ち込んでいると、もう緩奈の家に着くところであった。

「慧、今日はありがとうね。久々に遊べて楽しかったよ。」

「ああ、俺も楽しかったよ。・・・財布は寒くなったけどな。」

緩奈は楽しそうに笑い、慧は苦笑いで返す。

「んじゃ、俺は生徒会の仕事があるから、行くよ。」

「うん。わかった。それじゃあ、またね。」

「ああ、また、学校で。」

こうして二人は別れた。

慧は緩奈の家から十分離れた後、先ほどの占いの結果がプリントされている紙を改めて取り出し、読み返す。

そこには、緩奈に見せた時、業と隠していた部分があった。機械のディスプレイにも表示されていなかった文だ。

書かれている内容は……

『近い内、あなたは大切なものを失う事になるでしょう』

慧はその紙を握り潰し、ポケットに突っ込んだ。

「ふざけるなよ。そんなことさせてたまるか。」

慧は一人つぶやくと生徒会のメンバーが待つ場所へと向かった。

そしてその頃の生徒会メンバーは

「さて、君達。どこの学校の生徒だい？」

「くっ……まさかこんな事になるとはね……」

警察に職務質問を受けていた。

慧達にばれないように魔法を使っていた夢と美夜であったが、慧の気配察知が鋭いため、密度と範囲を上げていた。その結果、お店の警報に引っかかってしまい、今に至る。

「恥ずかしいよ」

「大丈夫ですよ。堇。みんな一緒です。」

「はー、失敗しました。まさかこんな事になるなんて・・・」

『生徒会のメンバーは集合時間に間に合うのか！次回を待て！』

「ウッド、一人だけ逃げられると思わないことね。」

第九話 魔法学とペア

今は深夜、獣や一部の人間以外は誰しもが寝静まった時間。もちろん、二人の男女がいるこのホテルも例外ではない。が、二人にとっては今が本番だろう。そのつもりで年齢を偽りここに来たのだ。

だが、今はもうそんな気持ちは吹き飛んでいる。何故なら・・・

「今時の若者は進んでいるな。もうこんな所でことに及ぶのか。」

金髪の男、フリードと制服達がいきなり部屋に入ってきたからだ。

「何なんなのよ！あんたら！私達になんの用なのよ！」

「ひい！助けて！」

制服達に取り押さえられているが、少女は気丈にフリード達を睨み返す。一方、少年は怯え、暴れる様子はない。

「そうだな・・・何の用かと答えれば、俺達の実験を少々手伝ってもらいたくてな。なに、お嬢さん。君に来てさえもらえれば俺達としては問題ない。大人しく着いて来てくれるか？」

フリードは少女の方にしか用は無い。少女さえ来てくれれば、少年には手を出さないと言っている。その言葉を聞き、少年は少女へ何かを懇願する様な視線を向ける。その視線を向けられた少女はシヨックを受けた様な顔になり、暴れるのを止め俯いてしまった。

「良い子だ。一応、実験以外の身の安全は保障しよう。さあ、行こうか。」

フリードは制服達に連れて行くよう指示を出し、少女は制服達に引き連れられ出て行った。

部屋に残ったのは少年とフリードだけとなった。

「少年、情けないな。なにもせず少女を諦めるどころか、少女を犠牲にするとは。こんなところに入る勇氣はあっても、少女を守る勇氣はなかったようだな。」

「俺みたいな一般人がお前らみたいなのになう訳ないだろ。」

悔しさより、助かったという安堵が強い、そんな声だ。

「ま、それもそうか・・・俺はもう行こう。喜べ少年。彼女のおかげで君は日常へ帰ることができるのだから。」

そう言い残しフリードは立ち去っていった。そこに残されたのは一人の少年だけであった。あれだけの騒ぎがあったにも関わらず、辺りは静まりかえっていた。

休日明けの月曜日。誰しも学校に行くのが面倒な曜日だ。少なくとも慧はそう思っている。

「面倒臭い、眠い、寝る。」

「来てそうそう寝るな！」

緩奈は席に着いた途端眠ろうとする慧の頭を何処からか取りだしたハリセンで一閃。スパン！という気持ちのいい音と共に慧の頭に炸裂した。

銀は相変わらずクラスメイトの女子達にモテモテだ。逃げ出した様だが、本気で暴れる訳にも行かず、困っている。

「痛いな、緩奈。いきなり叩くことないだろう。と、いうかどこから取りだした？そのハリセン。」

慧は文句を言いながら緩奈の方を向く。

「来てそうそう挨拶もなしに寝るからでしょ。まったく、変わらないんだから。」

変らないわね。と苦笑しながら、叩かれた場所を撫でる慧を見る緩奈。ハリセンについては触れなかった。

「それは悪かったな。・・・ところで真樹は？今の時間に来ていないのは珍しくないか？」

そろそろ始業のベルが鳴るところだが、真樹の顔が見当たらないため、見渡す慧。

「そうね。でも、まあ、たまにあるわよ？慧は良くサボっていたから知らなかったのかも知れないけどね。それをいうなら、慧が真面目に学校に来ていることの方が不思議なんだけど？」

緩奈の言う通り、真樹が学校を遅刻したりサボる事もあることはあった。慧はそれに輪をかけてサボっていたため知らないのだった。

また、慧がサボっていないのは『断罪の牙』を辞めた事もあるが、美夜と銀がサボるのを許してくれないためでもある。

そんな会話をしていると、とうとう始業のベルが鳴ってしまった。

「遅刻確定ね。」

「いや・・・ギリギリだな。」

「え？」

そう言うや、慧は立ち上がり、窓を開けた。すると

「はぁ、助かったぞ。慧。」

「ったく、どこから入ってくるんだよ。」

窓から教室に入ってくる真樹であった。

その様子を見ていたクラスメイトの気持ちは一つ

（（（ここ、3階だよな？）））

その後、HRを終え一時間目の授業との間の小休止の時間。

「慧、少し良いか？」

「ん？別に良いが・・・なんだ？」

HRが終わると真樹が慧に話かけてきた。その表情は珍しく真剣だ。

「ここじゃなんだ・・・場所を移そう。」

「ああ、踊り場でいいか？」

今の時間なら踊り場は生徒はまずいないだろうと言う事で二人は場所を移すことにした。

「で？話はなんだ？バイトは出来んぞ？生徒会の仕事で忙しいからな。」

慧は真樹の話がバイトの件だと思い先に断りを入れた。以前も同じ様な事があり、了承した結果、カタギじゃない抗争に巻き込まれた事がある。

「いや、今回は違うが、お前達がしている仕事に関係することだ。」

「・・・よく知っているな。」

慧は諦めたように溜息を吐いた。この男に事件絡みの秘密は無理なようだ。

「で？誘拐事件に関してなんだというんだ？」

「ああ、昨夜、とうとうこの街でも事件が起こったらしい。別の学校の者だな。」

その言葉に驚く慧。昨日も見周りは継続して行っていたからだ。

「時間は深夜だ。お前達は身周りを終えた時間なのだから仕方が無い。」

慧が自分を責めないよう気を使い、仕方が無いという真樹。それを察してか思いつめない様に努める慧。視線で続きを促す。

「場所はビジネスホテルだ。俺達と同年代の男女のカップルで、昨夜事に及ぼうとしたのだろう。そこを襲われた様だ。」

「二人とも誘拐されたのか？」

「いや、女だけで、残された男が警察に通報しこの事が発覚した。」

「目撃者は？」

「不思議な事に通報した男以外ゼロだ。ホテルの従業員も気付かなかったらしい。」

「そうか・・・しかし、変だな・・・」

慧は考える。同年代の男女が借りられるビジネスホテルなど防音措置もたかが知れている。そんな所で騒ぎになれば目撃者は増えるはずだ。なのに、目撃者は当時者である男性のみ。

「方法はいくらでもあるな。変身魔法、催眠魔法etcだが、それらを使えるほどの『魔法使い』はそういない。」

真樹も方法を考えるが、自ら否定する。変身魔法や催眠魔法は公には禁止されているうえ、『魔法使い』の資格を持つものも許可なく使用できない。また、そもそも魔法としてのレベルも高レベルなのだ。

「ああ、それに違法な魔法を感知する装置もあるはずだからな。しかし、どうやったのか、魔法を使えば侵入や防音はどうにでもなるが、防犯装置がある以上は無理な話だ。」

先入観に囚われるのは不味いがな、と慧は付け加えるが、不思議な話だ。犯人はどうやって侵入し、少女を連れ去ったのか・・・

「ところで、真樹。その少女の名前と属性は？」

「ふむ、少し待て。」

真樹は懷から手帳を取り出し確認する。

「名前は、言葉環。ことばのたまご属性は『音』だ。」

「『音』の属性か。そう珍しいものでもないな。しかし、『言葉』、か・・・」

『音』の属性は音により、精神に喜怒哀楽の感情を誘導する魔法だ。音には元々精神に干渉する力があるが、それを魔法により強化することができる。主にカウンセリングなどで重宝される。しかし、この属性自体は基本属性ではないものの珍しい属性ではない。

「なあ、この『言葉』って、あの『言葉』か？」

「ああ、慧の思っている通りの『言葉』だ。といっても分家筋で、『言霊』を使える訳ではないがな。」

『言葉』の家は花咲家と同じく『世界樹の頂』に所属する家の者で、宗家は『言霊』と言う魔法が使えることで有名だ。

「つまり、『言葉』の血筋だから狙われたわけだな。」

「そう捕らえて良いだろう。どうやって知ったかはわからんがな。」

そして、二人は黙り込むが、検討が着かない。そこに第三者の声が入って来た。

「慧！真樹！そろそろ授業が始まるわよ！」

階段の上から現れたのは緩奈だった。どうやら二人を探しに来たようだ。

そんな緩奈を見て、慧と真樹は視線で緩奈に誘拐事件の事を伝えるか話し合う。

結論は

「なんの話をしていたの？」

「いや、真樹がまた妙なバイトの話を持ってきてな、断っていたところだ。」

秘密にすることにした。何れ分かることだろうが、その時には全て解決している事を願って・・・

「駄目だよ、真樹。慧に変なバイトさせちゃ。」

緩奈は以前、誘拐された事があり、それがトラウマになっている。それ以降、近くで事件があると、家に引き籠ったり、新しく、親しい友人を作ることを拒んだりしている。

「ふむ。善処しよう。」

二人は緩奈をそういった事に巻き込まない様にしているのであった。それが、かつて、慧と真樹がした約束でもあるからだ。

場所は講堂。現在ここには、高等部の1年生と2年生が集まっている。

「さて、それじゃあ、魔法について教えるわよ？」

そう言って、少女は講義を始めようとする。

「よし、ちょっと待て。」

それを慧は止める。何故、今、この時にこの少女がいるのか理解が追いつかない慧は改め問う。

「何で、ここにいるんだ？美夜？」

「何故って、魔法学の授業だからよ？」

この学園の魔法学の授業は、1年生と2年生が合同で行う。ここで特殊なのは、1年生一人に2年生一人がついて、マンツーマンで教える事だ。もちろん講義は全体で行うが、その時も補佐するため、ペアを組んだ2年生と隣同士となる。

これは、教師一人では魔法のトラブルに対応出来ないためでもある。講義ならまだしも実技になると、素人が多い1年生は様々な問題を起こすからである。

なお、中等部でも同様の事は行っていたのだが、慧が編入したのが3年だったため、こういった授業は無かったのだ。

「で、俺のペアは・・・」

「そ、私。良かったわね。私は当たりよ？」

このペアは一年間続く。そのため、当たり外れが存在する。

なお、午後の授業は全て魔法学である。授業は一年のクラス分けで行われる。これまでは、新学期初めということで、魔法学は休みだったのだ。

「因みに、慧は特例で銀と二人で一人とカウントされるわ。使い魔と主はペアで数えられるからね。」

「はい！よろしくお願いします。美夜。」

銀は嬉しそうに尻尾を振っている。

なお、緩奈は夢と、真樹は知らない男子生徒と、だ。他の生徒も同性同士でペアを組んでいる。

因みにクラスは関係ない。現にAクラスの夢とFクラスの緩奈が組んでいるのがいい証拠だ。

「なあ、何で俺は美夜なんだ？他の奴らは同性なのに。」

「ああ、簡単よ。私がそうするようにお願いしたの。人数の問題や、慧が使い魔とペアって事もあるけどね。」

確かに、人数的に、2年生の方が、1年生より女子生徒が一人多い。また、1年生は2年生より一人人数が多い（銀がいるため）。そのため、女子と男子で組むペアが必ず一つ出してしまう。その事も考慮してだろう。

同性同士で組むようにしているのは過去異性同士で組んで色々問題が起こった経緯もある。慧は銀とペアなため、問題ないと判断したのだろう。

因みに、3年生はペアはまず組まない。それぞれ受験や『魔法使い』の資格の勉強のため、忙しいからである。中には在学中に資格を取って依頼に取り組むものもある。

「と、言う訳で、始めましょうか？」

こうして、美夜による魔法の講義が始まるかに見えたが

「ふざけるな！」

一人の男子生徒が声を荒げた。そちらを向くと、1年生が、2年生に不満をぶつけているようだ。2年生の男子生徒は、やれやれという風に首を振っている。

「今年もやっぱり起こっちゃったか。」

「まあ、これは、不満を出す奴もいるよな。どうやって決めているんだ？」

どういう形で決めているか知らないが、下級生には選ぶ権利はないため、不満を持つものもあるだろう。

それは上級生にも言えることだと思うが・・・

「一応、入学の際の成績で決めているみたいよ。葛城君が良い例ね。彼の相手は雷堂らいどう 和希かずきといって、『雷』の属性で、2年でもトップクラスの實力よ。まあ、私は別だけどね。夢と緩奈のペアも互いに珍しい属性という理由で組んでいるわ。」

つまり、真樹はAクラスでもトップクラスの人間と同じ位の力と認識されており、緩奈は夢と同じく珍しい属性と言う事で組んだ訳だ。しかし、慧は・・・暴動が起きるんじゃない？と思う慧であった。

「では、あの呆れている人は？」

銀は、今騒いでいる生徒のペアとなっている上級生がどれくらいの實力を持っているのか気になる様だ。

「ああ。あれはSクラスの生徒ね。名前は・・・忘れたわ。」

生徒会長にあるまじき発言に、慧は呆れる。

制服やジャージにクラスを示す記号が書いてあるため、クラスは分かるが、名前までは分からないようだ。

「仕方ないでしょ。人数が多くて一々覚えていられないわよ。」

「そうですか、ではあの騒いでいる人もSクラスなんですね。」

「そうだな。同じSクラスで組まされたみたいだな。あの上級生、美夜が覚えていないって事は、たいした事は無いようだな。」

つまり、そのペアの相手も同様ということだ。

「まあ、Sクラスは属性の希少さや血筋で決められる事がほとんどだからね。一応言っておくけど、皆が皆、弱い訳ではないわよ？まあ、私達には関係ないわ。さ、始めましょう。」

美夜が仕切り直し、改めて講義を始めようとしたが

「俺に相応しいのは神風 美夜だ。貴様ではない！」

「・・・だつてさ。」

「はあ・・・」

そんな声が聞こえてきた。それを聞き、慧は苦笑しながら美夜を見る。美夜は溜息をついて、ちよつと待っていてと言い、騒ぎの方へ歩いていった。

結構お怒りだ。

「主、大丈夫でしょうか？」

銀はそんな美夜を心配そうに視ている。

「美夜なら大丈夫だろう。ランクSは伊達じゃないって。」

慧は何も心配していない様に言うが、銀の心配していることはそこでは無かったようだ。

「いえ、そうではなく、主が巻き込まれないかと・・・」

銀が最後まで言う前に

「慧！ちょっと来なさい！」

大声で呼ばれた。慧と銀は顔を見合わせると、慧は一つ溜息を吐いて、銀は苦笑を返して美夜のところへ向かって行った。

「ということで慧。こいつと戦いなさい。」

行くと、かなり御立腹な様子の美夜。どうしたのか、不思議に思っていると夢が耳打ちして来た。

「あの子、黒澤君の事を大分悪く言っていたのですよ。美夜は自分のお気に入りか、貶されたのが許せないのね。」

因みに、それは緩奈と真樹も同様で、緩奈は目に見えて怒り、真樹は見た目は変らないが、かなり怒っているみたいだ。現に、周囲の生徒の何人かが倒れている。

「貴様が、美夜さんのペアの相手か・・・Fクラスの癖に美夜さんに教える請うなど百年早い！」

「ちょっと、気安く名前を呼ばないでくれる？」

「美夜さん。あなたはこと男に騙されているのです。私がこの者を倒し、目を覚まさせてあげます。」

全く話を聞いていないうえに、良く分からないことをのたまう男子生徒。

「さあ、勝負だ。貴様の様な雑魚、俺様が相手をする必要はないのだが、特別に相手をしてやる。」

その言葉に銀が文句を言う。

「すみません。私の主を悪く言わないで貰えますか？」

だが、男子生徒は銀を一瞥すると一笑する。

「ふん。そいつの使い魔か。みたところ元は犬の様だな。つまり駄犬という訳か。主が主なら、飼い犬も飼い犬だな。二人揃って、馬鹿面を下げて、恥ずかしくないのか？」

その言葉に飛びかかろうとする銀だったが、慧が止めた。

「面倒事は嫌なんだがな。俺の銀を馬鹿にするのはいただけない。その勝負受けてやるよ。」

珍しい事にやる気を見せる慧。

「よし。勝った方が、美夜さんの教えを受けられるという事でいいな。」

「ああ、だが、負けたら、銀に謝れよ。」

「いいだろう。俺が負けるはずないからな。」

二人は講堂の中心へと移動する。その間、生徒達は巻き込まれない様に2階の観戦席へ移動している。

「さあ、それでは始めようか。」

「その前に、お前、名前は？」

直ぐにでも始めようとする男子生徒に慧は待ったをかける。

「俺の名前を知らない？ふん。いいだろう。聞いて驚け！俺はあの『聖王騎士団』十三騎士の一人、『虚無の騎士』サイファー・クロイスの息子、カインド・クロイスだ！」

『虚無の騎士』サイファー・クロイスは美夜と同じ『無』属性の持ち主だ。どうやら、このカインドという少年も『無』属性の持ち主なのだろう。だから、美夜にこだわるのかと納得のいく慧だが、納得いかないこともある。

それは、サイファーは誇りを重んじてはいるが、けして相手を馬鹿にするような男ではなかったからだ。

（まあ、親がそうだからといって息子もそうだとは限らないか。そもそも、この学園自体おかしいしな。）

「あっそ。んじゃ、さっさと始めようか。」

「フン！父様の名前を聞いても何の反応も示さないとは・・・無知

にも程があるな。まあ、良い。このコインが地に着いたら開始だ。」

カインドはコインをはじいた。

そして、キインという音と共にコインが地に着いたと同時にケインが動いた。

「行くぞ！『無』よ、小さき弾となり彼の者を滅せよ……『無の弾丸』！」

『無の弾丸』は『無』属性の弾を複数作りだし放つ魔法だ。その大きさは小さいが数が多く、避け難い魔法だ。

カインドが放った『無の弾丸』の数は十五発。

慧はその弾を軽く避けた。

「なっ……ふふ、やるじゃないか。だが、次はどうかな？『無』よ蛇となりて、彼の者を呑み込め……『無蛇』」

『無蛇』は蛇の形をした『無の弾丸』だ。違いは追尾するか否かだが、追尾の特性を付けるのは難しく、難易度はかなりあがる。そのため、数も少なくなり、今回は二匹だけだ。だが、避けても追いかけて来るため、面倒な魔法ではある。

「ははは、この魔法はしつこいぞ！」

この魔法は蛇の名が付いているだけあって、しつこいのであった。慧が避けても、避けても追いかけてくる。

「面倒だな・・・だが・・・」

慧は何を思ったのか、カインドの方へ向かって走り出す。

「何をする気だ！」

カインドは魔法を使わず、動きもせず、その場で構えたただけだ。いや、魔法は使いたいが使えない上に、その場を動きたいのに動けないのであった。同時に二つの以上の魔法を使うのは高レベルの芸当のため、今のカインドでは使えない。そして、戦闘経験が少ないため、次にどう動けば良いのか判断がつかず、動けないのであった。

「よっと！」

慧はカインドの眼の前までくると急に、姿勢を低くし、カインドの後ろに回った。カインドからは消えた様に写っただろう。そして、目前には『無蛇』

「うあ！き、消えろ！」

いきなり目の前に現れた『無蛇』思わず消してしまった。もし、あのままであれば、『無蛇』の直撃を喰らっていたのはカインドであっただろう。『無』属性を持つものは『無』属性に耐性があるとはいえ、軽傷ではすまなかったはずだ。

慧はその間に、再びカインドから離れている。

「はあ、これで終わりか？なら、今度はこっちから行くぞ？」

そう言い、一歩カインドへ踏み出した。

「く、来るな！来るな、来るな、来るな！」

そう言いながら、狙いも定めずに『無の弾丸』を作り、放とうとした。

「馬鹿が！」

一瞬で、それこそ、この場にいる者のほとんどが視認できない速度で近づき、一撃で気絶させた。

カインドが放とうとした魔法は使用者が気絶したため、無散した。

「お疲れ様・・・って言うほど疲れて無いわね。まあ、ありがとうね。スッキリしたわ。」

「主、やっぱり主は強いですね。自慢の主です。」

カインドとの試合が終わり、皆が、下へ降りてきて、授業が再開となった。カインドと慧の試合は五分も掛からず、あっけなく終了したため、時間は十分にある。

美夜は降りてきたと同時に、労いの言葉をかけ、銀は抱きついて来た。

「あれくらい、たいしたことないだろうに。」

慧は否定するが

「いえ、普通は『無』を前にすると臆するものです。それをあんな、
いとも簡単に避け、一撃で決めるなんて、十分凄いですよ？」

夢まで褒めるので、少し後悔する慧。最後の一撃、身体能力だけでは、間に合いそうに無かったので、闇を右足に纏い、脚力を上げたのだが、失敗だったようだ。もう少し、緩めても良かったと後悔する。

「ふふん。慧はこんなものじゃないイタッ！」

自慢する様にする緩奈を小突いて、余計な事を言わせない様にする。

「ふむ。しかし、この学園は不思議だな。『魔法協会』に『世界樹の頂』、『聖王騎士団』、六魔天の関係者がこんなにいるのは不思議だ。ここの理事長は『七大法典』だ。普通、『世界樹の頂』や『聖王騎士団』は入ってこないのではないか？」

真樹の言う通りだ。六魔天は互いに仲が悪い。自分の組織の未来を担うものを敵方に預けるようなものだ。

「それは・・・ここだけの話だけど、この学園にいる他の組織の間は性格に難があるものだったり、分家筋だったり、色々な事情で問題がある子ばかりよ。それを理事長が引き取っているのよ。まあ、全員がそういう訳ではないわ。花咲姉妹みたいにね。」

「そんな生徒が固まっているのがSクラスといった訳か・・・」

「ええ、そういう事よ。まあ、Sクラスの人間が皆そうという訳で

はないけどね。」

そう言って、この話は終わ리と言う風に、手をふった。

それから、解散し、授業を各自再会した。最初はペアの相手に慣れるという事で、マンツーマンで教わるわけだが

「ねえ、慧。」

「ん？」

「私があなたに教える事、無い気がするんだけど？」

慧の知識はこと、魔法に関して言えば美夜より上だったりするため、実技の訓練しか教えることは無い訳だが、今回はそういった授業はしない事になっているため、時間が空いてしまったのであった。

「・・・銀がいるだろう。」

「はい！私は美夜にも教えて欲しいですよ？」

なので、慧と美夜、二人掛かりで銀に教える事になったのであった。

第十話 おもわぬ発見

「さて、皆に集まって貰ったのは他でもない。とうとうこの街でも誘拐事件が起こった。誘拐されたのは、言葉環。（このはたまき）年齢は16歳。秋鹿学園の生徒で属性は『音』。属性自体は珍しいものではないが、言葉の血族には『言霊』を持つものもいる。そのため、狙われたのだろう。」

秋鹿学園、天城ヶ丘学園とは違い一般校だ。その生徒が昨夜襲われた。と風紀委員長（しんどうれい）の神藤零は言う。

放課後、生徒会室に慧達が行くと、美夜と葵が珍しく言い争いもせずに待っていた。今朝方、慧が真樹に聞いた事件について風紀委員と生徒会にも情報が入ったらしい。

そこで、一度情報を集め、整理するため、生徒会と風紀委員で集まって話し合いを行う事になった。

「以上が、昨夜起こった事件について現状で分かっていることだ。何か質問のある者はいるか？」

その問いに手を挙げたのは夢だった。

「目撃者はその少年だけなのですか？」

「ああ、どうやったかは知らないが、ホテルの従業員も他の客もまったく気付かなかったそうだ。」

慧と真樹も今朝疑問に思ったことだ。

「また、そのホテルにあった魔法感知の装置も動作しなかったそうだ。」

この魔法感知の装置とは、どの店でも大概付けているもので、魔法による犯罪行為を防ぐためのものだ。事件のあったホテルにも当然付いているものだ。

それが動作しなかったという事は魔法が使用されなかったと言っても良い。

「そうですか、わかりました。」

夢は知りたい事を聞けたため、下がった。

「他に質問のあるものはいるか？」

皆、隣近所の者とヒソヒソと話をするが、質問をしようとする者はいない。なら、一度解散しようと、零は腰を上げるが、待ったをかける者がいた。

「悪い、俺からも一つ良いか？」

「む、黒澤 慧か。何だ？言ってみろ。」

上げかけた腰を再び降ろし、零は慧に話すよう促す。

「そのホテルはどこだ？」

「それを聞いてどうする？」

「行つて見るに決まっているだろ？何か、身落としていることがあるかもしれないだろ。」

周囲は慧の言葉使いにざわめきを見せる。年上のもの相手に、その言葉使いはなんだ、とても言いたいのだろう。しかし、そのような言葉で話しかけられた零は気にせず、慧の質問に答える。

「櫻木駅近くのビジネスホテルだ。名前は『ビジネスホテル ビー ツ』だ。住所は・・・」

慧は、零の情報をメモに取り、ポケットに入れた。

「有難うな。それじゃ、行こうか。銀。」

「はい。主。」

そして、銀と共に会議室から出て行った。その後ろ姿に風紀委員はなんだあいつはとののしるが

「うちの慧をあまり悪く言わないでくれないかしら？」

と、美夜が言うと、直ぐに静まり返った。

それを機と取ったのか、葵が場を締めた。

「さあ、ぼおつとしていないで、巡回に移りなさい。まだ、日は高いとはいえ、路地裏など、誘拐が起こりうる場所はあるのだから。」

「」「はい！」「」

葵の号令で、風紀委員達は一斉に行動に移りだした。その迅速さは流石だろう。

「美夜、うちのが悪かったな。」

「まあ、いいわよ。慧は気にしなさそうだしね。」

残ったのは零と光、葵。そして、美夜と夢だ。

「そうか。黒澤を追わなくて良いのか？」

「ええ、大丈夫よ。銀もいるしね。場所は分かっているんだから急ぐ必要はないわ。」

「ふっ、信頼しているのだな。」

「まあね。一緒に暮らしてるんだから当たり前でしょ？」

信頼も出来ない相手と一緒に生活する事を許すような性格ではない美夜だ。それが、今も続いている以上、それだけ、慧と銀に信頼を置いているのだろう。

そんな美夜が珍しく、零は内心動揺しているが、表にはださない。風紀委員の長である自分が動揺する事は、他の委員へも影響を与えることを知っているためだ。

「それも、そうだな。では、俺達は先に行く。他の者ばかり働かせ、俺達が動かないのはみつともないからな。」

そう言い、零は葵と光を引き連れ、会議室を出て行く。葵は零の後ろを歩きながら、去り際、美夜を一睨みし、出て行った。

「なに、あの子？」

美夜は葵の行動に首を傾げる。何故、睨まれたか分からないからだ。

「はあ、大変ですね。神藤さんも花咲さんも・・・」

慧と銀は昨夜事件のあったホテルへ来ていた。道は特に入り組んでなく、直ぐに発見できた。慧と銀は中へ入りフロントで『魔法使い』の証明書を見せ、昨夜事件があった部屋の鍵を受け取り、向かう。が、意外な人物も一緒だった。

「それで、何を調べるつもり？既に警察に調べられた後なのよ？」

花咲 薫がどういう風の吹きまわしか、ついて来たのだ。そのためか銀は不機嫌である。

「主には主の考えがあるんです。勝手について来ておいて、五月蠅いですよ。少し黙ったらどうですか？」

銀は相変わらず、この次女が嫌いらしい。普段はしない冷たい態度をとっている。

「ぐっ・・・」

薫は薫で、珍しく銀に冷たく言い放たれ、落ち込んでしまった。慧としてはいてもいなくても問題ないので放っておく事にした。そ

もそも何故、嫌っているはずの自分について来たか分からないのだ。こちらから話かけて怪我するのは面倒だということで気にしない事にした慧だが、しかし、銀は気になったように聞く。

「それで、何故あなたがついて来たのですか？」

薫はその質問に気を取り直し、慧を睨み、胸を張っている。

「あんたの監視よ。あの生徒会長のお気に入りのあんたなら何かに気付くかも知れないって、神藤委員長のお命令よ。」

慧は、まあ、そうでなきゃ俺について来ることはないかと納得し、薫へ意識を向けるのは止め、何か痕跡はないかと見渡すが、見たところでは特に何の変哲もない。

「ざっと見たところでは変わった所は特にないな・・・銀。ちょっと隣の部屋に行ってくれるか？3分経ったらこっちへ戻ってきてくれ。」

「分かりました。3分ですね？」

慧は、一緒に借りていた隣の部屋の鍵を銀に渡した。

銀は部屋を出て行き、残ったのは薫と慧の二人となった。慧は気にしていないが、薫にとっては気まずい沈黙だ訪れる。

そわそわし始める、薫をしり目に、「慧はそろそろ、か」と呟くと、いきなり大声で、銀に呼び掛ける。そして、壁を叩いたりもした。

「ちょっと！いきなりなに！？気でも狂ったの？」

いきなりの行動に驚く薫。そう思うのも無理はない訳だが、気にせず続ける。

3分程経過し銀が戻って来ると、今度は逆隣の部屋、次は下の部屋と最後に上の部屋と、銀に行ってもらい、同じ様に、大声で銀に呼び掛け、銀が行った側の壁や床、天井を叩いた。

そして、銀が上階の部屋から戻って来ると、ありがとうと銀に声をかけ、頭を撫で始める。

「・・・で、一体あんたは何がしたかったの？」

無視され続けいい加減頭に來たのか、低い声で聞いて来る。

慧は無視し続けた方が面倒かと思い、質問に答える事にした。

「いや、犯行時、誰もこの部屋でそんな事が起こっている事に気付かなかったらしいからな。この部屋の防音を確かめていたんだよ。それで、銀。俺の声や、壁や床、天井を叩く音は聞こえたか？」

慧はこの部屋の防音を確認していたのだった。

「いえ、全く聞こえませんでした。」

そのことに、驚く薫と予想通りという顔をする慧。

「銀の耳にさえ聞こえない程の防音と俺が、少し本気で叩いても傷つくどころか、振動さえ漏らさない壁と床・・・この部屋普通じゃ

ないな。」

銀は元々狼だ。その耳は人より遙かによい。そして、慧の拳は魔法で身体能力を上げていなくとも、少し本気を出せば、簡単なヒビ位は入る。なのに、何も影響がない。

「それが本当なら、この部屋で何かあっても気付かないわね。他の部屋も同じなのかしら？」

「・・・調べてみようか。」

こうして、他の部屋も同じなのか、少し離れたいくつかの部屋で試したが、声や音は響いて来た。意外な事に薫も協力してくれた。

「つまり、この部屋だけ特別な構造になっているって訳ね。」

薫の言う通りなのだろう。一応、従業員に確認を取るが、こんな部屋有るはずがないといていた。これだけの構造にするのはかなりの費用がかかる。このホテルを運営している企業ではまず作らないモノだ。

「この部屋をこの状態にしたのは犯人達と言う事か・・・」

慧は考える。ここ最近修理したと言う事もないらしく、魔法以外ではありえない。なら、どんな魔法なら、こんな事が可能か・・・慧が思いつくのは一つの属性。しかし、その属性を持つ者がこんな事をするはずがない。と否定する。その者は不条理を嫌い、今のままでは変えられないと『断罪の牙』を抜けたのだ。

そんな男が、誘拐などという、不条理に手を染めるはずがない。

「主、例え魔法でこの状態にしたといっても、どうやって魔法を使用したのでしょうか？」

確かに、その問題もある。こういうホテルは各部屋にも防犯措置として、装置を取り付ける事を義務付けられているはずだ。魔法を使えば、従業員が気付かない訳が無い。

「本当、不思議よね。ここの装置、壊れているのかしら？これじゃ、見かけだけじゃない。」

「見かけだけ？・・・そうか！銀、この部屋をあの装置以外、凍らせろ！」

「ちょ、ちょっと！何を言って・・・」

慧は何かを思いついたのか、銀に魔法を使うように言う。薫はその事に驚き、止めようとするが、その前に銀は魔法を使った。

銀は銀で良く分かっていないが、慧の言う事なので、なにかしら意味があると思い、『凍結の世界』という、周囲を凍らせる魔法を使用した。慧に言われた通り、防犯装置は避けて。

「何やっているのよ！こんな事をしたら防犯装置が動作するじゃない！」

薫は寒いため、足踏みしながら慌てて言う。だが、部屋からは出ようとしなない。付き合いが良いんだか悪いんだか・・・

「そうだな。あれが本物なら装置は動作するはずだ。」

しかし、30分ほど経過したが、従業員も警備員もやってこない。街中なのだ、ここまで時間がかかるのはおかしい。

「・・・ねえ、いくらなんでも誰も来ないっておかしいわよね？」

「ああ、そうだな。いくら警察を待っていたとしてもこれは遅すぎる。」

慧は防犯装置に見えるものを取り外した。すると

「これって・・・」

「そ、お前の言った通り、見せかけだよ。」

それは、防犯装置でもなんでもない。中身が空のハリボテだった。

「はは、これじゃあ、魔法が使われていても分からない訳だ。」

従業員を問い詰めると、本物は入り口にあるものだけで、各部屋にあるものは見た目だけのハリボテらしい。わざと見える所に設置することで、実際はただのハリボテなのに本物と認識させる、昔からある方法だ。

経費削減のため、仕方なくとのことだ。警察は動作までは確かめて行かなかったので、慧達が来ても同じだろうと嵩をくくっていたそうだ。

「これで、このホテルで起こった事はだいたいの予想がつくわね。本物が入口だけなら他のどこからでも魔法を使って侵入できるからね。」

言うと、薫はお茶を一口含む。

「でも、わからない事が二つあります。誘拐犯はどうやって、被害者がこのホテルを使うことを知ったのでしょうか？それと、あの部屋を変えた魔法は一体・・・」

銀はケーキを頬張る。

3人は駅前の喫茶店で休憩している。調べた内様を整理するためだ。

「前者は、ただタイミングが悪かったただけだろう。多分、元々言葉さんを誘拐する気だった。そして、都合よくあのホテルに入ったため、実行に移った。それだけだと思う。」

この街で誘拐を犯そうとする以上、周囲の下調べはしていただろうからな。と付け加える。

「そして、後者は・・・分からないな。」

心当たりはあるが、慧の中でそれは無いと否定を繰り返しているため、そう答えるしかない。

同じ属性とも考えられるが、あの属性は本当に希少なうえ、扱いが難しい。あの人以上使える者はいないと慧は確信している。

「主？」

銀は黙りこむ慧を心配そうに見つめるが、なんでもないと首を振る。

「まあ、ここまでわかれば今日の所はよしとしますか。さ、俺達は一度、美夜と夢さんと合流しよう。」

「私も行くわ。風紀委員の仕事があるし、この事をお姉ちゃんと委員長に伝えなきゃ。」

元々、慧達の監視に来た薰だ。むしろ、嫌っている慧と一緒に喫茶店にいる事自体不思議だが、どうやら、今回の事で少しは慧の事を認めたらしい。態度が少しだが軟化した。

3人は席を立ち、喫茶店を出て行くのであった。

ところ变って、場所は櫻木市の中心街の路地裏。

そこで今、まさに誘拐が行われていようとしていた。

「は、離して！」

「騒ぐな！おとなしくしろ！」

抵抗する少女を無理矢理連れて行こうとする男達。

少女は、買い物に来ていたのだが、近道しようと裏道へ入っていた。すると、男達が自分と違う制服を着た少女を無理矢理何処かへ連れて行こうとしていた。いきなりのことに固まってしまった少女は見つかり、今に至る。

「だ、誰か！助けて！」

少女は必死に助けを呼ぶが誰もこない。ここは普段人通りの少ない道で、今日は更に輪を掛けて少ない。男達が人払いをしているのだろう。来るはずがないのだ。

「無駄だ。諦めろ。」

少女は必死に抵抗するが、大人の男数人に抑えられているのだ。どうすることもできない。

「さあ、行くぞ！」

少女達は男達に何処かへと連れられて行こうとしていたが・・・

「まあ、そう慌てるな。」

そこに、いきなりここにいる誰の者でもない声が聞こえてきた。

「誰だ！」

男達は警戒する様、周囲を見渡そうとするがドサツ！という音が聞こえてきた。

そちらを見ると、少女を抱えていた仲間の一人が倒れており、抱えられていた少女は何が起ったのか分からず、キョロキョロと辺りを見渡していた。

その間に、また一人、少女を抱えた男が倒れた。

そこで、男達はやっと「それ」をした人物の姿を捉えた。この辺りの学園の制服に身を包んだ見た目、普通の少年だった。

「何者だ！お前は！何が目的だ！」

「ふむ、変な事を聞くな。誘拐現場を目撃したんだ。どうにかしようとするのが人間だろう？まあ、お前達のような誘拐犯を捕らえるのが今のバイトでもあるがな。」

少年、葛城 真樹は飄々と答える。その言葉に、男は笑い真樹に取引を持ちかけた。

「要は金と言うことか？なら、話は早い。協力しろ。そうすれば、お前が受け取るだろうバイト代より遥かな大金が手に入るぞ？」

「おお！それは良いな！」

真樹はその話を聞き、顔を輝かせた様にする。男達は再び笑う。この場を凌いだら、囲んでボコボコして、こいつも売り捌こうと考えているのだ。

「だが・・・」

しかし、そうはいかなかった。

「悪いな。お前らの様な存在を俺も、そしてあいつも・・・見逃す気も許す気もないのだよ。」

その言葉を最後に、真樹は『風』を足に纏い、瞬時に男の懐に入ると、一撃で気絶させた。その動きに男達は着いて行けず直ぐに、

皆、意識を失った。

男達が動かなくなった事を確認すると、一人ずつ縛り、最後に少女達の無事を確認してから、依頼主に電話した。

「・・・葛城だ。誘拐犯を確保した。人を寄こしてくれ。」

『わかりました。風紀委員をやりますので、あなたは彼女達を人目のある場所まで送ってあげてください。』

少し待つと、若い女性の声が聞こえてきた。今回の依頼主はどうやら女性らしい。少女達をどうするか聞くと、送る様言われたので、了承した。

「心得た。後、多分だが、この男達は依頼のあった者達とは違うと思うぞ。」

『それは何故ですか？』

依頼主の女性は聞く。しかし、その問いは知らない事に対する問ではなく、生徒に問題の答えを聞く先生のような問いだった。

「フッ、わかっているくせに聞くのだな。まあ、いい。この男達は俺に大金が手に入ると金をちらつかせた。つまり、この少女達を何処かに売ろうとしたのだろう。だが、依頼のあった誘拐犯達は誘拐した者達を必ず返してくる。つまり、すくなくともこの男達はあなたが御所望の誘拐犯ではなかったということだ。」

まあ、こいつらが売ろうとした先がその依頼の誘拐犯達という可能性はあるがな。」

「はい、その通りです。あなたが今回捕まえた誘拐犯は違いました。後、あなたが言った最後の可能性も『視てみました』が違ったようです。そちらはどこそこの国の方々見たいでした。こちらの人間を動かしませんでしたので大丈夫です。」

真樹の答えに満足ですと言った声で答え合わせをする女性は、真樹の言った可能性についても答えを出した。

「流石だな。『真の未来』殿。では俺はこの少女達を送っていく。」

『ええ。よろしくお願いします。葛城 真樹さん。』

真樹は電話を切ると少女達へ声をかけ送っていった。

その場には気絶した男達が残された。

真樹達が立ち去った後、そこに現れたフリード

「ふっ、良い腕の魔法使いだ。将来が楽しみだな。」

そう言いながら、周囲に他に人がいない事を確認すると、フリードは気絶している男達に近づいて行く。その体からは殺気が放たれている。

そして・・・

その日の夕方、ニュースが流れた。それは誘拐犯を捕まえたというものではなく

『今日未明、櫻木街、中心街の路地裏で複数の遺体が発見されました。発見したのは天城ヶ丘学園の生徒で、風紀委員のため見周りをしている中発見したそうです。』

殺人事件のニュースだった。何故、殺人としたかそれは

『どの遺体も、首を鋭い刃物で切られ亡くなっていた様です。』

その事件は、『七大法典』がいるため、基本的に平和な櫻木街に、一夜にして広がった。

「面倒なことをしてくれたね。フリード。」

博士と呼ばれる男はフリードを責める。

「あんな事をしては、今後被験者を確保しづらくなるだろう。」

男達を殺してしまったため、警察も当分、巡視を強化するだろう。また、学校もそれなりの対応を取ることで、誘拐がしづらくなる。

「すまなかったな。俺達の行動に便乗し私腹を肥やそうとするゴミどもがどうしても許せなくてな。殺ってしまった。」

フリードは全く悪びれずに言う。

「だが、どうせ、もう依り代の目ぼしは付いているのだろう？」

最近の博士の機嫌が良い事、誘拐の依頼が減った事からフリードは問う。

「ああ、そうだった・・・そうだったよ。その通りだよ!」

フリードの言葉に不機嫌そうな顔から一転して嬉しそうになる博士。

「そう、彼女さえ手に入れば、僕達の神は蘇る。フリード、多少時間がかかっても良い!彼女を連れて来てくれ!」

そう、言いながら、博士は一枚の写真をフリードに手渡した。

その写真を受け取ったフリードは動揺する。その写真に写っていたのは天城ヶ丘学園の制服に身を包んだ少女だ。

「ん?どうしたんだ?その少女がどうかしたか?」

「・・・いや、なんでもない。」

フリードが動揺したのは、博士が指摘した少女ではない。その横にいる、面倒臭そうな顔をした、だが、楽しそうにしている男。最後に見たのは5年前、当時はまだ12歳だった少年だ。

しかし、その顔を見間違う事はない。自分と晟、白河がそれぞれの知識と技術を教え込んだ、唯一弟子と呼べるような存在。それは・

「まさか、こんな形でまた会う事になるとはな・・・慧・・・」

近い未来、必ず会う事になるだろうと予想し、
呟くフリードであ
った。

第十一話 見えなかった未来その結果

「そうか、そちらは成果があったか。こっちは・・・」

朝、階段の踊り場、慧と真樹は昨日起こった事を話している。

「・・・と、いうことがあってな。すまない。俺が、風紀委員に引き渡すまで残っていれば・・・」

「いや、真樹のせいじゃないし、謝るものでもないだろ。」

「だが、緩奈が・・・」

「それは、仕方がないさ。当分落ち着くまでは緩奈を一人で帰さない方が良いな。」

緩奈は誘拐された事があり、それ以降、こういった事件があると、情緒が不安定になる。以前は引き籠るなど大分酷かったが今では改善されている。しかし、それでも体調を崩すなど、影響はあるのだ。

「そうだな・・・慧はやはり生徒会か？」

「まあな。今回の事で、学園の依頼から『魔法使い』への依頼に変わるだろうからな。人手は足りなくなるだろう。」

今までは『学園』への依頼だったが、今回の事件で『魔法使い』への依頼となるだろう。そうになると、一般の生徒への協力は不可能になる。これは風紀委員にも言えることで、風紀委員で『魔法使い』の資格を持つものしか動かせなくなる。つまり、人手がいきなり減

るということだ。

なお、依頼が取り下げられるという事はないだろう。それだけの力がある者がいないなら話は別だが、この学園にはいる。一人は神風 美夜、もう一人は神藤 零、そして最後にまだ見ぬ、魔法部部长だ。

「わかった。朝は無理だが、帰りは俺が送る事にしよう。」

「ああ、朝に事件が起こる事はまず無いだろう。人の目がありすぎる。緩奈のこと頼むな。」

二人がそう打ち合わせていると、件の人物が来たようだった。

「二人とも！何をやっているの？もうすぐ授業よ？」

緩奈は少し顔色が悪く声が震えていた。

「ああ、悪い。直ぐ行く。」

慧と真樹は緩奈の方へ歩いて行く。緩奈は二人が近づくと二人の腕に抱きついて来た。

どうやら、慧と真樹が近くにいなかった事が不安だったようだ。少し震えている。

慧はそんな緩奈の頭を、振るえが止まるまで撫で続けた。真樹に視線で改めて緩奈の事を頼みながら。

「皆さん。わざわざ集まって頂、有難うございます。皆さんに集まっていたいたのは、解っていると思いますが、誘拐事件に関する事です。」

未来はそう言うてから話し始めた。今、この場所・・・理事長室に居るのは、風紀委員の委員長、二人の副委員長、生徒会の会長、二人の副会長、そして銀だ。

「これまでは『学園』に対する依頼でしたが、『魔法使い』に対する依頼となりました。原因は昨日の殺人事件です。被害者は昨日、少女二人を誘拐しようとした犯人達でした。

少女二人は、私個人が今回の誘拐事件の調査を依頼していた『魔法使い』が犯人を捕らえた事で無事でした。まあ、この誘拐犯達は依頼内容の誘拐犯とは別の犯人でしたが。

その後、その『魔法使い』から連絡があり、風紀委員を向かわせるので少女達を送ってくれる様に頼んだのですが、その間に犯行は行われたようです。」

昨日の事件の全容を話し、一息つく未来。そこに質問が投げかけられた。

「質問が三つあります。一つ、その殺された誘拐犯達が、私達が追っていた誘拐犯ではないという根拠は？二つ、どこの誰に、そして何故、誘拐犯は殺されたのか。三つ、理事長が個人的に依頼した『魔法使い』とは誰ですか？」

美夜が矢継ぎ早に質問する。

「そうですね、まず一つ目の質問から、彼等を捕まえた『魔法使い』

が言うにはお金目当ての犯人達だったそうです。私達が追っているのは、少なくとも身柄を必ず返す犯人なので、お金目当てではない。よって違うと判断しました。二つ目についてですが、これは私も解りません。三つ目はすみませんが答えることはできません。」

その言葉に慧と銀を除いて、不審をあらわにするが、未来は気にせず続けた。

「今回の依頼は相当厄介なものです。手に余るようなら、拒否していただいて構いません。私からの話は以上です。」

未来がもう話は終わりですと言うと、退室を促すように扉が開き、全員退室し始めた。その表情は皆、絶対犯人を見つけ出すと物語っている。しかし、二人、動こうとしない者達がいた。

「慧？銀？どうしたの？」

美夜は不思議そうに問う。他の皆も立ち止まり振り返る。

「すまん。俺はまだこの人に用事がある。」

「私は、主と一緒にいます。」

その言葉を聞き、不審な目を向ける。美夜以外は・・・

「わかったわ。生徒会室にいるから、終わったら来なさい。人手が足りないんだから。」

「ああ、わかった。ありがとう。」

美夜と慧のやりとりに一部を除き、驚くが、当人達は気にしない。美夜は歩みを再会した。美夜の行動につられるように他の皆も退室を再会した。

全員が退室すると、慧は話し始めた。

「聞きたい。あんたの力でも、あの未来は見えなかったのか？」

慧が指しているのは殺人事件の事だというのは明白だろう。未来の力をもつてしてなら、見えていても不思議ではない。しかし

「すみません。私の力でも、この未来を見る事は出来ませんでした。」

その言葉に驚く慧。未来の力が及ばないことがあるとは思ひもしなかったからだ。

「私の力は数ある未来の可能性、運命から近いものを見るものですから、こういうこともあります。それが、とてつもない力を持つ者が相手ならなおさらです。」

つまり、対象の力、魔力や意思等の力が強ければ強い程、曖昧になる。といっても、未来も視るべき未来を絞ればそれにも対応可能らしいが、今回は他にも視ていたので、この未来を視ることは出来なかったのだ。

「なら、今回の相手は・・・」

「ええ、正直、美夜さんや零さんでは手に余るでしょう。」

その言葉を聞き、考え込む慧。昨日調べた結果、起こった事件。そして、未来の話、それを統合すると、絶対とはいえないが、益々ある可能性が頭から離れない。

「・・・どうしましたか？慧？」

「なあ、未来さん。これは俺の予想なんだが・・・」

そして、慧は自分の頭から離れない人物の名前を口に出す。もしかしたらその者が関わっているかもしれないと。

「・・・確かに、彼なら、私の未来視を妨害出来るでしょう。ですが・・・」

未来もその人物なら可能だと納得するが、しかし、誘拐事件の犯人とするには、やはり無理があるため、言いよどむ。その人物はこのような事を一番嫌っていたはずだからだ。

「・・・正直、私も彼だとは思いますが、注意は喚起します。もし、彼だとして彼とまともにやり合うのは正直私でも無理です。もし、本当に彼が関わっていた場合、最悪、他の『七大法典』に協力を仰ぐ必要があります。」

「依頼は取り消さないのか？」

慧は依頼を取り消すように促すが、未来は首を振る。

今、未来が言った通り、まだ決まっていらないが、もし、あの男だったら、学生レベルでは例え美夜や零でも相手は不可能だ。依頼を取り消すのが妥当のはずだが未来はそれをしない。

「まだ、決まった訳ではないと言う事もありますが、一番の理由は、彼等がそれで引き下がるか、ということです。」

退室する姿を思い浮かべ、首を振る慧。あれは何を言っても止めない。そう思う。

「なら、知らないところで動かれるより、動向を把握出来ていた方がいいでしょう。」

「そうだな。わかった。ありがとう。話を聞いてくれて。」

慧は未来に頭を下げる。自分の中にあつた疑問を吐きだせたのが良かったのだろう。少しスッキリした顔になった。

「いえ、私も貴重な情報をいただきました。でも気をつけてください。いくらあなたでも、彼の相手は・・・」

「わかっている。もし、戦うことになっても逃げる事を優先させるさ。」

そうして、慧も退室しようとするが、今まで黙っていた銀が疑問の声を上げた。

「あの、主や未来がいう『あの男』とか『彼』って誰の事ですか？」

その言葉に、そう言えば、銀を組織に連れて行ったのは『あの男』が出て行ってからだった事に思い至り、話す事にした。

「『あの男』ってのは、な。危険度ランクSSS。『鋼王』^{こうおう}と呼ば

れる魔法使い・・・フリード・ディゼンダー』。俺に魔法と戦い方を教えてくれた、師匠呼べる人達の一人だよ。」

ひとしきりフリードについて銀に話した後、慧は理事長室を出て、生徒会室へと向かった。少し遅くなったので早足だ。

その間、廊下の窓から校庭を見るが、まだ、放課後も半ばだというのに一人もいない。

殺人事件が起こったこともあり、一時的に放課後の部活動を禁止したためだ。そんな寂しい校庭を眺めながら、緩奈と堇は無事に帰ったのか気にする慧。

緩奈は真樹が送っていったし、堇も一緒に帰ると言っていたので大丈夫と思うが、友人として義兄として心配する慧だった。

「大丈夫ですよ。真樹は強いんですから。主程ではないにしても。」

そんな慧に気を使ってか、励ましの言葉をかける銀。最後に慧を押す所がまた銀だ。

そんな銀に何時も支えられているなど改めて思う慧であった。

生徒会室に入ると、美夜と夢が待っていた。

「お帰りなさい。話は終わったの？」

「ああ・・・」

「そう、じゃあ、行くわよ。」

美夜は慧と銀が戻ると早速巡回に行こうとする。

「ちょっと待ってください。美夜、黒澤さんに何も聞かなくて良いのですか？」

夢はその行動を止める。当り前だろう。理事長と密談と言う程ではないにしろ、隠し事をしているのは確かなのだから。しかし、美夜は何も聞いてこない。それは慧も不思議に思うところであった。

「そうね。確かに聞きたい事は色々あるけど、でも今は、この事件を解決するのが先決でしょ？それに、いつかちゃんと話してくれるでしょ？ねえ、慧。」

出会って間もないのにここまで信頼してくれる美夜に驚くと共に、この信頼は裏切れないと、慧は思い一つ、話す事にした。

「美夜・・・ありがとう。でも夢さんの疑問も最もだ。だから、一つ話しておかなければならない事がある。それはこの事件にも関わることだ。」

「・・・そう、わかったわ。それで、話って？」

美夜と夢が話を聞く姿勢になるのを待ち、話始める。

「俺が残ったのは、理事長に確認したい事があったからだ。理事長の力でこの未来が見えていたかどうかをだ。だが結果は見えていなかったそうだ。」

その言葉に、驚く美夜と夢。未来の力が及ばない事もだが、その

事を『七大法典』確認する慧にもだ。

「理事長が言うには、相当の力の持ち主が相手でないと、こんな事にはならないそうだ。つまり、誘拐犯を殺した犯人は、少なくとも『真の未来』と同等かそれ以上ということになる。」

さらに驚く二人。この事件がそこまでのものとは思っていなかったからだ。

「どうする？ 相手は、少なく見積もってもランクSSクラスだろう。理事長が言ったように拒否しても良いんだぞ？」

SSSを想定しているが、それを言うのは慧としても、フリードの関与を認めるものだったため、避けた。

「・・・ふふ、まさか。例え相手は格上だとしてもだから何だっていうの？ 私達の目的は、誘拐の防止と犯人の捕縛。確かに私達だけでは無理かもしれないけど、風紀委員も一緒だし、理事長も手は打っているんでしょう？ なら、途中で降りる理由はないわ。」

美夜は言う。他の人達の協力があれば可能だと。確かに相手がフリードであっても協力すればなんとかなるかも知れないが・・・だが、美夜や夢、零では荷が重いだろう。慧としては、ここで降りてくれた方が良いのだが、言っても言う事は聞かない事は明白だ。

「そうか・・・わかった。なら、行こう。夢さんも良いですか？」

「・・・ええ、わかりました。それと、すみませんでした。変に疑ってしまっ・・・」

「いえ、いいですよ。それに、夢さんが疑ったのは美夜のためでもあるのでしょうか？ 気にしていませんよ。」

夢は顔を赤くして、そんな事とは俯く。美夜は、夢の背に手を当て、ありがとうねと囁いていた。

第十二話 『鋼王』

あの殺人事件から何も起こらず、数日が過ぎ去った。警察や『魔法使い』が見周りをしていたが、何も成果は得られず、また、誘拐事件もパタリと止んだ。その事もあってか、警察は表立った巡回は止め、また、学園の部活動も再会する事となった。

「事件、パタリと止んだな。不気味でしょうがない。」

「ああ、だが、緩奈の様子が正常に戻ったのは喜ばしい事だ。」

慧と真樹は最近恒例の踊り場での話合いをしている。

生徒会や風紀委員はまだ見周りを継続し、真樹もまた誘拐事件を継続して追っている。

「しかし、未だに解らないな。血筋についてはまだ解るが、属性はどうやって知ったのか・・・」

事件が始まって、もうすぐ一カ月が過ぎようと言うのに未だ、どの様にして属性を知っていたのかが解らない。外で魔法を使うなら未だしも、制限がある以上、公には使わないうえに、『魔法使い』だって、無闇に使って、目を付けられるといった事はしないだろう。

「その事なんだが、慧・・・一つ気になる事がある。」

「なんだ？」

「それが、誘拐された被害者なんだが、女性が多い事と、男性だが、皆、彼女持ちらしい。さらに、カップルで攫われた者達も中にはいる。妙だとは思わないか？」

「リア充どもめ・・・ざまあ見ろ。・・・ん、うゝん・・・」

慧は、彼女持ちの者達をののしるが、真樹に冷たい目で見られたため、咳払いをし、誤魔化した。

「確かに、何故わざわざカップルを狙うのか・・・カップルでなければいけない理由でもあるのか？」

「もしくは、カップルからしか、情報を手に入れられないか・・・」

その言葉を聞き、一つ慧の中で閃くものがあつた。それは数日前、緩奈と買い物をした時の事だ。

「真樹、一つ調べて貰えないか？思い付いた事がある。」

「・・・いいだろう。どういった事だ？」

「それは・・・」

「占い？」

今は魔法学の授業中、美夜と慧は簡単な手合わせを終え、休憩しており、銀は魔法学の教科書を読んでいる。

「ああ、前に緩奈と行ったゲームセンターに良く当たって評判の占いの機械があつてな。その時、名前や生年月日、属性も入力したんだ。その機械に何らかの細工をしておけば属性を調べられるんじゃないかと思つてな。」

今朝、真樹に話した事を再度、美夜にも話す。占いについては女性の方が詳しいだろうからだ。

「・・・そうね。確かにその可能性はあるわ。でも、そういった機械は結構あるわよ？調べるのはかなり大変だわ。」

占いの機械はゲームセンターなら必ず一台は置いてあったりする。そして、ゲームセンター自体、数がおおく、全て調べるのにはかなりの労力が必要となる。

「だよな・・・でも、何もしないよりは良いだろう？」

「ええ、そうね。早速、近場当たりから探ってみましょう。念のため、メーカーにも話しておくわ。」

「ああ、よろしく頼む。」

流石は神風家の息女。普通、一学生がそれを言ったところでメーカーは、動きはしないだろう。例え動いたとしても時間はかかる。しかし、神風家の言う事なら話は別なのだろう。まったく、よくできた世の中だと溜息を一つ吐く慧。

そこに、今まで教科書を見ていた銀が話かけてきた。

「あの、主、美夜。聞きたい事があるんですけど・・・」

「ん？何をだ？」

慧と美夜は銀の方へ体の向きを変え、聞く姿勢をとる。

「はい。属性の事なんですけど、基本属性とその組み合わせによる合成属性で決まることは主から教えていただいていたのですが、美夜の『無』や零の『創造』はどういった組み合わせなのかと思いついて。」

確かに、『氷』や『炎』、『雷』と違い、『無』や『創造』他にもあるが、こういった組み合わせでそうなるのか解らないものが多い。

「そうだな・・・まず美夜の『無』だが、これは全属性の合成と言われている。そして、神藤先輩の『創造』も同じく全属性の合成と言われているな。」

「どちらも同じ合成なのに違うのですか？」

「ええ、合成と言っても、その属性のバランスは異なるのよ。私の場合『無』だから『闇』の属性が強みたい。零の『創造』は逆に『光』が強いようね。」

同じ属性の組み合わせでも、属性の適正や強さのバランスで変わるものが合成属性であり、だからこそ、合成属性の持ち主はその属性以外の魔法を使えない。そのバランスを崩すということはこれまで使用していた魔力の運用を変えなければならないということだ。

例えるなら、交流で動く機械に直流を流すものだ。動く訳が無い。

「では、『音』や『呪』といった属性は？」

「いいところに気がついたな。『音』や『呪』はこれまでの合成とは少し異なる。これらの属性は『亜種』と言われる属性だ。例えば、銀が今言った『音』は『風』の『呪』は『闇』の亜種と呼ばれている。だが、最近はどういった属性は、属性外魔法との合成ではないかと言われている。」

属性外魔法とは、『念話』や『身体強化』など、属性に囚われず使える魔法の事だ。しかし、属性に囚われない半面、技術的にも相当難しい。慧も使えないわけではないが、『身体強化』を使うより、『闇』で身体能力を上げた方が効率がいいので滅多には使わない。

「そう言う事。『音』だったら、『風』と『念話』系、『呪』だったら『闇』と『念話』系かしら。後は、『風』と『遠視』で『千里眼』とかね。まあ、色々あるわ。ただ、こういった属性は珍しさでいえば、『無』や『創造』に劣るけど、難しさで言えば、それ以上ね。」

属性という概念がないため、どうしても魔法に大切なイメージがしづらい。そのため、扱いが難しく、使いこなせるものは少ないのだ。

「まあ、そういつて事も、応用で似たような事は出来たりするんだけどな。銀、そういった応用が一番効く属性は何かわかるか？」

「そうですね。『風』じゃないでしょうか？『風』が基本属性の中で一番合成の中に組み込まれていますし、何より、一言で『風』といっても様々なものがありますから。」

『風』は、『炎』と比べれば威力は低く、『水』と比べれば操作の柔軟性に欠ける。『土』と比べれば防御は低い。『光』と『闇』に比べ、総合力に欠ける。しかし、ずば抜けて高いのはその応用力だ。『風』を極めれば、様々な事ができる。そして、他の属性では出来ない事、空を飛ぶ事も出来る。

だからこそ、『風』を本当の意味で扱えるものは数が少ない。

「うん。正解だ。」

銀の回答に満足がいった慧は銀の頭を撫でる。いつもの2割増しだ。

「~~~~~／／／／／」

銀の尻尾も2割増しで左右に振られている。

「ふふ、さて、それじゃあ再会しましょうか。」

「ああ、わかった。」

慧が銀の頭を一頻り撫でるのを見計らい、慧に続きを促す。

それに答え、慧は再び美夜の正面に立ち、構えを取る。今回は属性魔法を使わず、身体強化だけで手合わせしている。これは、慧が身体強化の魔法が苦手だからだ。

因みに何故、苦手かというと、『闇』に頼り過ぎていたせいだ。周囲も慧を実戦向きに鍛えたため、身体強化の技術は二の次にしたのだった。

「慧はまた、生徒会かゝ、つまらないな」

「そう言うな。あいつにも色々事情があるのだから。」

「そうですよ。緩奈さん。それに緩奈さんはまだ良いですよ。私なんか、朝の校門とお昼でしかお兄ちゃんと会えないんですから。」

放課後、緩奈と真樹、堇は3人で帰っている。これは、殺人事件が起こってから続く光景で、緩奈と堇の安全を気遣い、慧が真樹に頼んだためである。

真樹は慧にもう一つ頼まれていたことはこの後調べる予定だ。いつもなら、授業を後回しにするが、緩奈の事を考えてのことだ。生徒会でも近場から調査することは聞いていたので、真樹は街の一番外側から行う予定でいた。

「そっか、そうだよな。ごめんね堇ちゃん。」

「い、いえ、大丈夫ですよ。そんな、謝らないでください。」

なんだかんだで、この二人、結構はやく打ちとけた。真樹は緩奈が自分たち以外を受け入れようとしている事に嬉しく思う。声にも表情にも出しはしないが・・・

「ふむ。所で、堇嬢。君の姉上達だが、その後どうなんだ？」

真樹は気を使い、話を逸らした。また、葵と薫の事が気になるからでもある。二人が慧に嫌がらせをしていた話は聞いていたが、慧

が出て行っただけの話はあまり聞いていなかった。で、気がなつていた真樹は、丁度良いと聞く事にした。

薫も質問の意図をくみ取り、少し悩んだ後話始めた。

「そうですね・・・相変わらずといえは相変わらずですね。やっぱり二人ともお兄ちゃんを嫌っているというか・・・葵お姉ちゃんはお兄ちゃんが、美夜さんが側に着いた事が気に入らないみたいで、薫お姉ちゃんはお兄ちゃんが出て行く時、お母さんにこれまでした事をばらされて、お母さんに怒られた事を根に持っている感じです。でも、以前みたいな、陰湿な感じはなくなりました。それと、薫お姉ちゃんですけど、お兄ちゃんと事件のあったホテルに調査に行つて以降、あまりお兄ちゃんを悪く言わなくなりました。」

薫は慧の事を認め始めた様で、悪くは言わなくなった様だ。

「ふーん。そうなんだ。所で、事件と言えば、あれから全然聞かなくなっただけもう解決したの？」

緩奈は真樹に問いかける。この友人が一番事情に精通していると知っているからだ。

「いや、まだ解決していない。このところ、急に犯行は止んだが、その理由は解っていない。考えられるのは、警察の巡回が止むのを待っているのか、犯人の目的が達成されたか・・・」

「残念惜しいな。」

そんな声が急に聞こえてきた。

「正解は、ターゲットの目ぼしが付いたから、警察の巡回が止むのを待って犯行に移ろうとしていた・・・だ。」

そこに現れたのは金髪の男・・・フリードと、制服達だ。

場所は緩奈家近くの公園。周囲に人影は無く、既に人払いを終えた後だった。

真樹は内心舌打ちをした。気が弛んでいたのだろう。考え事に気を取られて接近を許してしまった。

「あ、あなたは誰ですか？」

緩奈は震えながらも、相手に問う。

「そうだな。今、話題の誘拐犯で、殺人犯とも言え解ってもらえるかな？」

フリードはそう言いながら緩奈の方へ近づいて行くが、その間に真樹が入り込んだ。

「堇嬢、緩奈と一緒に逃げろ。時間は俺が稼ぐ。」

真樹は堇に緩奈を託す。緩奈は、顔が青くなり、足も震え、真樹の声は聞こえないだろうと判断したからだ。

「で、でも・・・」

「いいから、早く！慧を読んで来てくれ！」

真樹の尋常じゃない叫びに、やっと冷静に考えられる様になった
堇は緩奈を連れ、逃げようとするが・・・

「すまないな、お嬢さん。その少女、仙海 緩奈は置いて行ってく
れ。」

フリードは真樹が反応するより早く二人の前に移動し、堇が魔法
を使う前に、堇と緩奈を気絶させ、緩奈を制服達へ渡した。

「っち！」

真樹はそうはさせるかと、制服達へ風の刃を放つが、『黒い何か』
が間に入り、風の刃を防いだ。

その隙に、制服達は逃げ出し、それを追いかけようとする真樹は、
フリードに立ちふさがれ、追う事が出来なかった。

「・・・何故、緩奈を攫う・・・」

「ふむ。少年は俺達の事を探っていただろ？そこまでは調べていな
かったのか？」

その言葉に、何時の間にかと思うが、先ほど言っていた言葉に、答
えはあった。

「・・・そうか、あの時、俺が誘拐犯を捕らえた時、見ていたのか・
・・・」

「ご名答。いや、少年の腕は凄いと思う。少ししか見ていないが、
かなりの力を持っている事はわかった。ランクAは固い。流石、慧

の友人だ。」

そこに、親友の名が出てきた事に動揺する真樹。一体この男は何者なのか……

「何者だ、貴様……何故ここで慧の名が出てくる……」

フリードは莖を公園の隅へ移動させながら答える。

「ふふ、何故……か。それは、俺が慧の知り合いと言う事だ。もし、生き残ることが出来たなら、慧に聞いてみるがいい。俺の名は『フリード・ディゼンダー』。『鋼王』と呼ばれる魔法使いだ。」

そして、戦闘が始まった。

真樹は体に『風』を纏い、高速で移動しながら風の刃を放つが、全て避けられるか、先ほど動揺『黒い何か』に防がれる。それは黒く、まるで金属の様な光沢を放っている。

「それは、『鉄』か！」

「ほう、観察眼も優れているな。そう、これは『鉄』だ。」

それは、公園にある砂鉄を使い、作りだした鉄の壁だった。風の刃では切れない程の厚さを誇る……

「ならば！」

真樹は気合いと共に、突風を放つが、全て鉄の壁に防がれる。

「ふっ、その程度で吹き飛ばされるような強度ではないぞ。」

が、そこでフリードは真樹の姿を見失ってしまった。莖がまだいる以上、逃げたとは考え辛い。魔力を感じようとするが、風により、そこら中に魔力を感じるため、察知できない。

「やるな。一体どこから来る……」

「……風よ、極限の渦とかせ……『サイクロン！リミット・ブレイク！』」

「ぬ！」

上空から、落ちながら真樹は『風』属性の最上級の魔法の一つを放つ。フリードはたまらず、重心を落とし、砂鉄で更に分厚い壁を作り防御の姿勢を取る。

全てを削り取る風の渦がフリードに直撃するのを確認すると、真樹は莖を担ぎ、その場を離れようとした。

自分とフリードの格が違いすぎるのだ。勝てないと判断した真樹の判断は正しかった。

しかし、意識を一時とはいえ、フリードから外したのは間違いだった。

「グフッ！」

鉄の槍が、真樹の腹を貫いた。莖に当らなかったのは幸運だろう。

「……何が……」

真樹は振り向く。すると、そこには

「その年でこれだけの魔法。凄いな。訂正しよう。クラスSは固いな。」

そこには銀色の鎧を纏ったフリードがいた。

「・・・なんだ、ゴホ！・・・それは・・・」

「これか？これは、ミスリル銀の鎧だ。いくら風の最上級魔法でもこれに傷を付けることは不可能だ。」

「ミスリル銀の鎧？ゴホッ！ゴホッ！・・・それは架空のものではないのか？」

ミスリル銀とは架空に存在する金属だ。それが実在する訳がない。

「フム・・・まあ、教えても良いだろう。『鋼』それが俺の属性だ。金属を操り、生成するのがこの属性の力だ。そして、金属を別の金属に変える事ができる。」

つまり、砂鉄（鉱物ではあるが、『鋼』の属性は『鉄』だけを取り出すことが可能。）をミスリル銀へと変えたのだ。金属として全く違う訳だが、それを可能にするのが『鋼』であり魔法なのだろう。なお、このように違う金属に変化させる場合、質量として、1対1の割合にはならない。より優れた金属に変化させる場合は、1にたいし、10も20も使う必要があり、魔力の消費量も大きくなる。

「ゴホッ！そんな属性があるとは・・・世界は、はぁ・・・広いな。」

」

真樹は自分の知らない属性に、世界の広さに驚嘆した。しかし、その事に好奇心を働かせる余裕はない。

「さて、終わりにしようか・・・残念ながら、慧には伝えられなかったようだな。」

鉄が刃の形となって振り降ろされようとした。が・・・

「えい！」

水の弾丸が放たれたため、刀を振り下ろす事は出来なかった。

「ぬう！？」

圧縮された水は鉄さえ貫く。数は少ないが、一発一発が丁寧に圧縮されていたため、フリードも無視する事はできなかった。

「風よ！荒れろ！」

その隙に、真樹は風をベタラメに吹かせ、目くらましをし、堇を抱え、その場を離脱した。

「・・・助かった。堇嬢。」

「いえ、それより早く手当てをしないと！」

今もなお真樹の腹からは血が溢れて続けている。真樹に抱えられながら、堇は傷を抑えるが、溢れ続けている。

「そんなものは、ゴフツ！・・・はあ、後でいい。それより、慧の所へ・・・」

真樹は全力で慧の所へ向かう。緩奈の事を伝えるために・・・

「ふう、逃がしたか。くくっ、慧の周りには良い逸材が集まっているようだな。」

フリードは先ほどまで戦っていた場を見る。用具は拉げ、樹々を倒れ、地面には幾つもの斬撃の痕と穴があいている。この光景を作ったのは先ほどの二人、特に真樹の方だ。

「さて、一度戻り休むか・・・慧・・・来るなら来い！」

そして、フリードが立ち去ると、荒れ果てた公園だけが残ったのだった。

第十三話 戦いの始まり

「真樹！」

慧は学園の医務室のドアを明け、親友の名を呼ぶ。

慧はゲームセンターに占い機の調査に出ていた所で、堇からいきなり電話がかかって来たのだ。堇は慌てており、声も涙声だったため、詳しい内容は解らなかったが、真樹が大けがを負った事だけはわかったため、美夜達に断りを入れ、急いで来たのだ。

「お兄ちゃん！葛城先輩が！」

堇は慧が中に入ると同時に慧に抱きつき、泣く。

「堇、落ち着け。真樹はどうだ？」

慧は堇を落ち着かせながら真樹の容体を聞くが、堇は中々泣きやんでくれず、若干苛立つが、落ち着こうと努める。堇に当たっても仕方が無い。そこに

「落ち着きなさい。堇さん。それと、あなたが慧君ね？私はミレア・センチス保険医です。それと、葛城君ならそのベッドで眠っています。」

赤毛の長い髪に碧い瞳の白衣の女性、が話かけてきた。

その言葉を聞き、堇をミレア校医にお願いすると、真樹が眠って

いるベッドへ向かう。

「・・・慧・・・か？」

真樹は慧を探そうとしたが、何処にいるか解らないため、ひとまず学園へ向かった。しかし、そこで力尽きたのだ。

「ああ、俺だ。いったいどうした？」

真樹は辛そうにしながらもあつた事を話す。

「緩奈が例の誘拐犯達に連れて行かれた。最近おとなしかったのは、緩奈に狙いを定めていたから、らしい。」

そこまで一息で言うと、一度、呼吸を整えるために、深呼吸をした。

「そうか、しかし、お前がここまでやられるなんて、一体誰が相手だった？」

「・・・『鋼王』フリード・ディゼンダー、奴はそう名乗っていた。慧、お前を知っていたようだ。奴はいったい何者だ？」

真樹の言葉に息を飲む慧。まさかとは思っていたが、その言葉を聞きショックが大きかった。思わず震えてしまう。

「お兄ちゃん？」

その尋常ではない様子に葦とミレアは身守るだけだ。

慧は真樹にだけ聞こえるようにつぶやく。

「危険度ランクSSS、『鋼王』フリード・ディゼンダー。俺の師匠の一人だ。」

その言葉を聞いた真樹も、息を飲む。慧が裏に関わる人間だと言う事は直接聞いた訳ではないが何となく解っていた。しかし、ランクSSSと関わる程の深い場所にいるとは思わなかった。しかし、納得することでもある。本気の慧は格が違ったのだから・・・

「戦えるのか？」

だが、今聞かなければいけない事は慧がどこまで深い所にいたかではない。今、聞くべき事は一つ。かつての知り合いを倒して、緩奈を助ける事ができるかと言う事だ。

「出来ない訳がないだろう？」

「ふっ、頼む。」

言う事は全部言いきったからか、真樹は意識を手放した。

「お兄ちゃん？葛城先輩は？」

「大丈夫。眠っただけだ。」

心配する堇を安心させるように、頭を撫でる。そして、美夜に電話をかける。美夜達は調査を継続しているからだ。

「美夜、どうだ？」

『慧？葛城君と董の様子はどうか？』

「董は大丈夫だ。真樹も怪我をしているが命に別状はない。それより、調査の結果は？」

『そう、それはよかった。後、調査の結果だけど、以外と早く見つかったわ。あなたと緩奈が占ったと言う機械よ。不正アクセスの形跡が見つかったわ。場所はちよつと言葉じゃ説明し辛いから。今、銀があなたの所に知らせに行っているわ。』

調度その時、狼の姿の銀が校庭を駆ける所を発見した。

「ああ、今着いたみたいだ。ありがとう。それじゃ。」

慧は電話を切ろうとするが、美夜は待ったをかける。

『待ちなさい！慧、あなた、一人で乗り込む気じゃないでしょうね？』

慧は、美夜の問いに正直に答えるか迷うが・・・

「ああ、行ってくる。大丈夫。緩奈を取り戻したら直ぐに逃げるから、美夜は理事長に連絡して、指示を仰いでくれ。」

『ちょ！慧！』

そこまで言うと言電話を切り、待機していた銀から地図を受け取ると、銀と共に向かう。

「ちょっと！慧！慧ってば！」

慧に電話を切られた美夜は溜息を一つ吐くと、これからの事を考える。

「美夜？黒澤君は？」

「慧は、誘拐犯の所に向かったわ。何かあったんでしょう。私たちは理事長に連絡して指示を仰ぐわよ。」

美夜は夢に答えると、理事長の番号にかけようとする。

「美夜、良いのですか？私達も直ぐに向かったほうが、黒澤君一人じゃ、危険ですよ。」

「駄目よ。理事長の未来視が効かない相手に私達だけじゃ、行ってもどうにもならないわ。」

「でも・・・っつ！」

なお、食い下がろうとする夢であったが、唇を噛み、血を流しながら我慢している美夜を見て息を飲む。

多分、美夜は夢以上に慧の事を心配している。だが、理事長に指示を仰ぐことしかできない自分に腹を立てているのだ。

「もしもし、理事長ですか・・・」

そこは、櫻木街の港にある倉庫街。似た様な倉庫と通路が幾つもあり、地図でもないで迷うだろう。その内の倉庫の一つから、光が洩れてきている。他の倉庫には光がともっておらず、異様に目立つ光景だ。

そこから、聞こえるのは男の笑い声、何が楽しいのか、倉庫街に響く程の声だ。

「フヒヤヒヤヒヤ！良いぞ！この反応！これを待っていた！」

白衣を纏う、博士と呼ばれる男。やせ細り、生気をあまり感じないが、メガネの奥の瞳は異様な光を放っている。

「これで、依頼は達成だな。」

フリードはその光景を見ながら、タバコを一本吸う。

そこには、緑色の液体の中で、不思議な光を放つ少女・・・緩奈が眠っている。

そして、それを見て、博士は狂った様に笑っている。いや、実際、もう狂っているのだろう。過去の神を蘇らせるため、しかも成功するかも定かではない事を、こんな少女を実験台にして、行おうとしているのだから。

そして、それは自分も同じかと苦笑する。

フリードは、かつては夜城や白河、慧と共に世界に対し敵対した。家族を、友を奪った世界に・・・そして、そんな不条理に満ちた世

界を変えたいと思ったからだ。しかし、あのままでは、何も変らない。変えられないと思い、『断罪の牙』を抜けた。

そして、世界を巡り、不条理をただすため、戦った。幾つもの罪を背負い、いつの間にか、危険度ランクSSS、『鋼王』と呼ばれる様になった。

しかし、何も変わらない。世界は不条理に満ちている。そんな時、この博士と博士が率いる組織、『否定神の探求』に出会った。

この者達がかつて否定された神の逸話の研究していた。そして、逸話を研究する中、過去に実在した神がいる事を知った。その神は不条理を無くし、平等な世界を作る事ができる力を秘めていたが、その力を恐れた魔法使いに否定され滅ぼされたとのことだ。

博士達はその神が完全に滅んでいない事を調べ上げ、その遺物を探し当てる事に成功した。フリードが博士と出会ったのは、適合者を探していた時だった。

フリードはその話を聞き、その神なら自分の望む世界に出来ると思い、協力する事にした。そして今、やっとその願いが叶おうとしている。だが・・・

「そう簡単には行かないか・・・」

倉庫の扉が、いきなり蹴破られた。そこに立っていたのは、久々に会う少年と、初めて見る、綺麗な銀色の毛並をした狼だった。

「なっ！貴様はいったい何者だ！」

博士は、いきなりの来訪者に驚き、制服達に殺すように命令するが・

・

「・・・え？」

一瞬の内に、皆、氷漬けにされた。

「『凍結の世界』しかも対象を絞る技術とこの規模・・・凄いな。そこの狼の仕業か？ 慧。」

「ああ、そうだ。しばらく見ない間に変わったな。こんな事に手を染めるとは・・・何故だ！ フリード！」

慧は聞く。何故この様な事をするのかと・・・

「世界から不条理を無くすためだ！ これは、そのために必要な犠牲だ！」

「ふざけるな！ どうやってそれをしようとしているのかは知らない。だが、不条理をただすために不条理を働くのか！」

不条理を無くすと言いながら、誘拐という不条理を働く、その事に慧は怒る。なにより、その事に、そんな事に、緩奈を巻き込んだ事に。

「仕方がなからう！ これまで、戦い続けた。不条理を無くすために、お前達と別の道を歩んでからも、ずっと・・・だが！ 結局何も変わらなかった。だが、この実験が成功すれば、それも叶う。」

その言葉に、慧は眉をひそめる。緩奈をあのようなものに入れてどうやって、不条理を無くすというのか・・・

「慧よ、貴様はこの世界にかつて神が実在したことを知っているか？」

「神が実在した？・・・ああ、聞いた事がある。実在する神もいたということとは、昔会った幻型に聞いた。それがなんだ？」

慧はかつて幻型と出会い死にかけたが、どういう訳か、その幻型は留めを刺さず、むしろ傷をいやしながら、そんな話を聞かせてきたのだ。

「ほう、幻型にであっておきながら、無事で済むか・・・流石だな。なら話は早い。その神を蘇らせることが出来たらどうする？」

何を言っていると益々眉を潜める慧に苦笑し、続けるフリード。

「まあ、そう変な顔をするな。貴様も言った通り、語り継がれる、おとぎ話や神話の中には、かつて本当に存在した神もいた。そして、その力が宿ったものを聖遺物と呼ぶが、その力を使えるものは少ない。」

「・・・つまり、緩奈はその聖遺物に適正があったと・・・そういうことか・・・」

「そうだ。そして、あの聖遺物には神の魂の欠片が宿っている。」

言いながら、一つの樹で出来た杖を指差す。その杖にはあちこちに妙な機械が繋がれており、管で緩奈が入った容器と繋がっている。その杖は慧が視ても不思議な力が見てとれる。

「そして、あの装置は、聖遺物に宿った魂をその人間の器へと移すためのものだ。」

「なに？なら、緩奈はどうなる！？」

その慧の叫びに、フリードは俯くと、一言

「死ぬ」

そのフリードの態度に我慢が効かなくなった慧は、闇を纏い、殴りかかった。しかし、フリードに止められる。その腕には、ミスリル銀で出来た籠手がはめられている。

「ふざけるな！そんな事、俺がさせない！」

「なら、俺は立ちふさがろう！俺も、もう止まらないのだ！」

そして、二人の魔法使いはぶつかり合う。一人は自分の願いを叶えるため、もう一人は友を、大切な人を守るために。

「銀！緩奈の事、頼む！」

「はい！」

慧は銀に緩奈の事を頼むが、そこに立ちふさがるのは、白衣の男。

「すまないねえ、僕もこの実験には命をかけているのだよ。邪魔はさせない！」

博士は懐から注射器を取りだすと、首筋に当て、何かを自らの中

に入れた。すると、博士の体が、変形していく。

元の肉体より、二周りも大きく、そして、肌から毛が生え、その姿はゴリラそのものだ。

「主、これは!？」

「銀! 気をつけろ! そいつ、魔力増強剤を使用制限の倍以上使って、自分を魔物に変えやがった!」

そう、魔力の過剰摂取で異形化するのは何も動物だけではない。いや、人間も動物のカテゴリに入る以上、必然なのだ。

「良いのか? 慧、他に気を取られていて!」

慧が銀に気を取られた隙を狙い、鉄の刃を振るうが、闇の刃で切り捨てられる。

「気なんか取られちゃいないさ。あんた相手にそんな余裕はないからな!」

今、戦いの火ぶたが切って落とされた。

第十四話 『氷』の狼と『土』の大猿

『ヴォオオオオ！』

白衣を着たゴリラが狼姿の銀に向かい拳を振り降ろすが、銀のスビードの方が上のため、捉える事ができない。

『つつ！凄い威力ですね！』

しかし、銀もまた攻めあぐねていた。ゴリラの一撃の威力は高く、コンクリートの塊をたやすく粉碎する。そして・・・

『アイス・クロー氷の爪！』

銀は、大ぶりで出来た隙を狙い、氷の爪で切り裂こうとするが、

『クッ！』

ガラスが碎けるような音とともに氷の爪が碎かれた。

『全く、随分と固いですね。』

ゴリラの体は厚い土の塊・・・いや、もうあれは岩だろう。それに包まれ、固く、銀の氷の爪を通さない。

博士の属性は『土』だった様だ。魔法はそれを行う術式と制御技術でより複雑で高威力の魔法を扱うことができる。しかし、魔物化したこの男にそれを出来る理性が残っている訳は無い。なら、何故このような事ができるのか・・・それは、増強された魔力にある。

増強された魔力が、失った理性を補って余りある結果を残している。その腕力と増強された魔力で強引に操っている『土』がより厄介な相手としている。

救いは、元々戦闘のセンスは無かったためか、それとも理性をほとんど失っているためかは不明だが、その動きは単純で動きが読みやすいことだ。いくら威力が高くても、当たらなければ意味はない。

『ウホッ！』

『当たりません！』

土を岩の塊へ変え、投げつけてくるが、銀はそれら全てを避ける。

『氷りなさい！』

銀は『凍結の世界』ゲリドゥス・ムンドゥスで動きを止めようとするが、ゴリラに届く前に土の壁に防がれ、ゴリラが凍るのを防ぐ。

銀は確かに魔物だ。しかし、使い魔になるまではまともに魔法を使った事はない。大概、その魔力と『氷』でなんとかしてきたからだ。

銀が使える魔法は3つ。一つは『凍結の世界』ゲリドゥス・ムンドゥス、二つは『氷の爪』アイス・クロウ三つ目は『氷の残像』グラス・ミラーだ。その持ち札でどうやって打ち破るかが問題だ。

銀は、床を、壁を、天井を駆け回り、拳を避け、隙を突き『氷の爪』で攻撃するが、岩の鎧に防がれ、通らない。そこに、ゴリラの腕が振り抜かれるが、ゴリラの体を足場にし、その攻撃を避ける。着地した所に、ゴリラが飛びあがり踏みつけようとしてくるが、

ギリギリで避け、すれ違いざまに一閃。しかし、『氷の爪』の方が、碎かれる。

しかし、銀は不思議に思う。『土』の属性は土を操る魔法だが、何もない所から土を生み出す事は出来ないはず。それはどんなに魔力が高くても一緒だ。この、コンクリートと、鉄屑、ドラム缶しかないこの場所のいったいどこから土を持ってきたのか・・・

『ウホホホホホ！』

ゴリラはいきなりドラミングを始めた。

『益々ゴリラですね。いったい・・・つつ！』

銀はその姿を見て驚く。ゴリラの周りに更に大量の土が集まると、岩へと変り、その全身を包んで行く。そして、出来上がったのは、岩でできた更に一回り大きなゴリラだ。

そして、銀はそこで気付く。どこから土を持ってきたのかを・
・

『つく！『凍結の世界』！』

銀はその元を全て凍らせた。

『まさか、ドラム缶の中身が土とは・・・』

どうやら、ゴリラ、いや、まだ博士として理性が残っていた時、予め用意していたものようだ。銀はそのドラム缶を全て凍らせ、これ以上、土を操る事は防いだ。しかし・・・

『随分とまあ、大きくなりましたね。』

既に十分な量の土は供給され、それは岩へと変り分厚い鎧と化していた。

『ヴォオオオ！』

拳が振りあげられ、再び振り下ろされようとした。銀はまた、ギリギリまで引き付け避けようとしたが・・・

『しまっ・・・』

拳のスピードが先ほどまでより早くなっていた事、その大きさが一回り以上大きくなっていた事から目測を見誤り、直撃ではないものの、初めて攻撃を喰らってしまった。

『きやう！』

銀はドラム缶や鉄屑の山に吹き飛ばされ、埋もれてしまった。

「銀！」

「よそ見をしていられるのか！？」

「くっ・・・」

慧は銀を助けに行きたいが、フリードを振り切る事が出来ず、助ける事ができない。

『グオオオオ!』

ゴリラは銀が埋まっている場所に飛びかかり、踏みつけ、叩きつける。何度も何度も・・・

「銀! くそっ!」

「だから、余所見をしている暇があるのかと言っている!」

「ゴフツ!」

慧は、フリードの蹴りを喰らい、吹き飛ばされるが、体を捻り体制を整える。その際、外まで飛ばされたため、銀の様子を知る事が出来ない。

「使い魔が心配なのは解るが、俺を目の前にして気をそらせる事は自殺行為だぞ?」

フリードと慧、実力で勝るのはフリードだ。少しでも隙を見せる事は慧に取って死以外の何ものでもない。

『ゴホッ!ゴホッ!主、私は大丈夫です。』

そんな声が慧へと届く。

「銀! 大丈夫なのか!?」

慧からは見えないが、銀はボロボロの状態ではある。しかし、まだ戦えるようだ。『氷の残像』で直撃は避け続けていたのだろう。四肢で大地をしっかりと踏みしめている。しかし・・・

「ほう、あの状態でまだ立っていられるのか・・・だが、あれでは時機に終わるだろう。」

フリードの位置からは銀が見えるようだ。まだ戦えるとはいえ、これまで通りの動きが出来るとは思えない。

『主、私は大丈夫です。私はあなたの使い魔なのですよ？この程度、倒せないようではあなたの使い魔は名乗れません！』

「銀・・・わかった・・・必ず倒せ！だが、死ぬ事は許さない。良いな？」

『はい！』

そして、慧は再度、フリードとの戦いに集中する事にした。

銀は慧が自分の戦いに集中していると、ゴリラを見上げる。

『さて、主からの命令は絶対ですので、あなたを倒させていただきます！』

銀は『凍結の世界』を続けざまに放つ。土を外部から供給する事はもう出来ないため、鎧を凍らせる事はできる。しかし

『ウホ！』

凍った部分だけが剥がれ落ち内部までは凍らせる事が出来ないでいる。しかし・・・

『なら、全部剥ぎ落とすまでです!』

そこから、『氷の残像』^{アイス・ミラー}を駆使し、攻撃を避け、『凍結の世界』^{アイス・プレス}と、魔法ではないが、氷の魔力を放つ『氷の息』で鎧を剥がしていく。

『ウホ!?』

ゴリラは薄くなつていく鎧を見て動揺し始める。土を集めようとしているようだが、土が入っているドラム缶は銀に全て凍らされ、先ほど壊れたドラム缶からは土が出ているが、その土も凍っており、ゴリラの魔法は届かない。

そのため、集まらないのだが、ゴリラには理解できないのだろう。その場で暴れ続けている。

『はあ、はあ、はあ・・・後、少し・・・』

銀は魔力を集中し、『氷の息』を放つ。ゴリラは身をかめ、防ごうとする。その隙について、突進する。これが最後と言わんばかりの全力の突進だ。しかし・・・

『ウホ!』

ゴリラは突如横へと転がり、銀の突進を避ける。わざと身をかめ隙を作ったのだろう。その顔にはいやらしい笑みを浮かべている。そして、ゴリラの拳が突進する銀のへと振り下ろされた。

『ウホホー!』

ゴリラは銀を潰した事を確信し喜び、飛び上がり、その胸を

氷の槍が貫いた。

『油断大敵ですよ?』

それは、氷で自分自身を槍と化した銀だった。ゴリラが潰したのは『氷の残像』だったのだ。銀はそれを囫に、頭上へ飛びあがっており、『氷の爪』を巨大化させ、回転しながら突進したのだった。それは傍からみたら氷の槍の様であった。

ゴリラは倒れ伏し、みるみる内に小さくなり、元の男の姿になった。胸を貫かれてはいるが、まだ息はあり、銀は凍結させ仮死状態にした。

『はあ、はあ・・・主、私は勝ちましたよ・・・はあ、早く、緩奈を・・・』

しかし、銀は血を流し過ぎたため、目が霞始めてきている。

『せ、せめて・・・』

銀は気絶する前に、力を振り絞り、『氷の爪』を投げつけた。そして、そこで気を失ってしまった。

銀の投げた爪は、緩奈が閉じ込められている容器に当り、そして・

第十五話 VS 『鋼王』

「ちっ！」

慧は闇で作った刀で、フリードが放つ斬撃を捌く。

今、フリードが使用している剣は慧が最初に切り捨てた剣とは違う。ダマスカス鋼、おそらく現存する最高の金属だ。

現在、この金属の精製法は失われ、新たに造り出す事は不可能と
言われている。科学と魔法を合わせた錬金術でも、精製できてい
ない。それこそ『六魔天』でもだ。

だが、フリードはそれを可能にする。この男の属性『鋼』による
ものだ。

「どうした、慧！防ぐだけでは俺には勝てんぞ？」

さらに、身体強化へ回す魔力を上げ、斬撃の速度を上げてくる。
慧も、足と腕の闇の密度を上げ、身体強化と同様の効果を上げる事
で対応し応戦するが、闇の刀が形を保てなくなってきた。形を
維持できない事を悟った慧は、至近距離で闇の刃、『闇刃』^{ダーク・エッジ}を無詠
唱で構成し放つ。フリードはその刃を金属の刃を作り、撃ち落とす。

その隙に慧はフリードから距離を取り、闇の刀を再び生成する。

「ふっ、俺の教えた魔法を使いこなしているか・・・流石だよ。セ
ンスだけならお前の方が上だな・・・慧。」

「それはどうも。」

そう、この魔法はフリードが慧に教えたものだ。それは、フリードも同じような事をしている事からうかがえる。

この魔法の名前は『属性武装』。己の属性に属するもの、フリードなら、金属全般。慧なら闇や影そのものを自分の体の一部として使う魔法だ。使用できるようになれば、一々詠唱などしなくても、他に干渉できる。そして、この魔法の一番のメリットは・

「うらっ！」

慧は闇の刀を鞭の様にして振り回した。フリードはその不規則な軌道を読み、避ける。そして、周囲の鉄を集め『鉄の弾丸』を放つ。慧は弾丸を、上体を反らすだけで避け、『闇刃』を次々と放つが、全て避けられるか切り捨てられる。

この魔法のメリットはその変幻自在性だ。一々、新たに詠唱しなくとも闇を鞭にも刀にもできたりすることができる。もちろん、無詠唱など、他にもやり方はあるが、速度はまず最速だろう。

しかし、この魔法は大変難しく、夜城や白河でさえ、「良くそんな事ができるな・・・」と言わせる程だ。まあ、その魔法に詠唱破棄などで普通に対応できる夜城や白河も異常なのだろうが・・・

ところで、闇を操るのが『闇』属性、金属を操るのが『鋼』の属性の特徴といったが、普通に操った場合、このような事は出来ない。そもそも、闇を操ったところで、影絵などは出来るだろうが、何かに干渉、まして切る事などできない。それは『鋼』にも言える事だ。確かに金属を操り勢いよく振り回せば切れたりもするだろう。しかし、『刃』には出来ない。

それらを行うのが魔法であり、術式なのだ。それは他の属性にも言える。ただ『火』を操ったところで、燃やせるものはたかが知れているし、『水』を操ったところで出来る事は少ない。

その事を知るものなら解るだろう。この二人の行っている事の異常性を。本来、一つの結果を起こすのは一つ魔法だけだ。つまり、干渉や現象、形を取るのに別々の術式を用いる必要がある。それは詠唱破棄でも同様だ。しかし、この二人はたった一つ『属性武装』という魔法で闇や金属そのものを操り、このような現象を起こしているのだ。

「闇よ！襲え！」

慧は闇を津波の様に広範囲に広げ、フリードを襲わせる。このような『闇』属性の魔法は無い。単に闇を操り『属性武装』による効果で干渉出来るようにし、質量を伴わせて攻撃しているのだ。

「その程度！」

フリードは気合い一閃。ダマスカス鋼の剣で『闇』を切り裂く。しかし、『闇』が目くらましを果たし、一瞬とはいえ慧を見失う。

そこに、頭上から、『闇』の槍が雨の様に降り注ぐが、鎧に弾かれ、攻撃が通らない。いつの間にか銀色の籠手は無くなり、まだら模様の入った籠手になり、同色の鎧・・・ダマスカス鋼の鎧となっていた。

「ふん！」

お返しにと、フリードが銀色の剣を複数作り、頭上へ向けて放つ。

その剣は天井をたやすく突き抜け、空へと消えた。しかし、手応えはない。

そこへ、目の前から慧がいきなり現れた。闇にまぎれ接近していたのだ。そして、一閃。ゴギン！という斬撃とは程遠い音が鳴り響き、フリードは地面を削りながら、耐える。

見ると、フリードのダマスカス鋼の鎧は少し凹んでいる。が、慧の刀は『闇』にあるまじき、へし折れ方をしている。

「まったく、なんだ？その鎧に剣。なんで俺の『闇』を切れるし、刀がへし折れる？」

慧が疑問に思うのは当たり前だ。普通の金属では『闇』を切る事など不可能だ。もちろんそれはダマスカス鋼にも言えることで、以前、稽古を付けて貰っていた時も剣に纏った魔力で吹き飛ばしていたのだ。

「なに、俺もあれからさらに磨きをかけたということだ。慧、知っているか？対魔の力を持つ金属の事を。」

「対魔？鉱物以外じゃ、大概術式を金属に掘る位だが・・・俺の『闇』に有効な金属なんて、それこそ架空の金属、ミスリル銀しか・・・っておい！まさか!？」

「そう、そのまさかだ。このダマスカス鋼にはミスリル銀を含んでいる。最初にお前の拳を受け止めたあれがミスリル銀だ。ダマスカス鋼とミスリル銀を混ぜることで、この鎧と剣は出来上がる。まあ、魔力の消費量は大きくなるがそのおかげで、お前の『闇』さえ切れる。」

慧は呆れる。架空の金属まで再現するその技術と努力に・・・長い時間をかけて研？を積んできたのだろう。己が望む世界を手にするために・・・その執念に呆れると同時に、感嘆する。

「さあ、どうする慧？お前の『闇』は俺には効かない。そして、時間をかければ、あの少女は助からないぞ？」

「くっ！」

慧はどうすればよいか考える。一番はフリードと戦わず、緩奈を助け銀と逃げる事だが、この男を相手に逃げる事は不可能だ。背を見せれば、殺される。美夜には逃げると言ったが、戦って勝つしか道はない。

どうやって現状を打開しようか考える慧。そこに

『ウホホー！』

という、ゴリラの、喜びを大いに表す声が聞こえ、次にズシン！という、巨体が倒れる音が続いた。そして、倉庫の中から絶えず響いていた音は無くなり、魔力も消えた。

「なっ！」

さっきまでこの荒れ狂う魔力の残滓の中でも感じる事ができた暴走した魔力。それがいきなり消えたため驚くフリード。

「・・・くっ、くくく・・・ははは！銀、やりやがった！」

消えたのはあのゴリラと化した男の魔力。銀の魔力は微弱ながら

残っている。慧と銀は繋がっているため、この魔力の残滓の中でも無事な事が解るのだ。

「なら、俺がこんな所で負けていけないよな！」

銀が、あの男に勝ったのだ。自分が負けていられないと、慧は気合いをいれる。

そして、魔力と『闇』の密度を上げ、刀に集中する。フリードの刀を、鎧を打ち破るには、それを打ち破るだけの力を込めた攻撃でなければならぬが、今の慧ではそのレベルの攻撃を連続で放つことは出来ない。つまり、一撃で決める必要がある。

流石のフリードもその力に、余裕を無くす。あれは、夜城が慧に教えた技・・・そして慧が己の技として昇華させた、まぎれもない、慧の技。

周囲の闇を一点に集中し、斬撃を放つ。その一撃は『虚無の騎士』さえ消す事が出来なかった、罪を切り裂く闇の牙・・・

「『罪裂黒牙』！」

「そんなもの！当たらなければ！」

その一撃は真直ぐな軌道だ。避けられないものではない。しかし・・・

「なっ！これは！」

闇がフリードの足に絡みつき、動きを制限される。先ほど起こし

た闇の津波、それにより広がっていた『闇』を操り、捕縛したのだ。

そして

「喰らええエエ！」

「ぬおおおお！」

その一撃は確かに、フリードを捕らえた。

そして、フリードを捕らえただけでは留まらず、直線上にある倉庫が幾つも切り裂かれ闇に沈んだ。

「はあ、はあ、はあ・・・どうだ・・・」

慧は、その一撃で魔力のほとんどを持って行かれ、息も絶え絶えだ。これで終わらなければ、手札がない。いや、そもそも、この一撃以外、有効なものがないのだ。これまでの攻撃はこの攻撃を当てるための布石だ。干渉できる闇を広げ、動きを封じ、確実に当てるための・・・

「・・・・・・・・」

慧は数秒、警戒を続け、フリードの気配を感じない事を確認すると、急いで緩奈と銀の下へ行こうとする。銀はどうやら、勝ちだったが緩奈を助けるまでには至らず、力尽きたようだ。でなければ、既に出てきていてもおかしくない。そして、背を向けようとした瞬間

「つつつつ！」

膨れ上がった魔力と殺気に、とっさに、飛ぶ。そして、飛びながら自分がついさっきまでいた場所をみると、巨大な鉄の剣が轟音と共に突き刺さるところだった。

慧はその衝撃の余波を、両手を顔の前に出すことで防ぐ。

「ふははは！流石だな、慧。俺に、傷を負わせるとは・・・」

慧が着地し、声がした方を向く。慧が放った斬撃により発生した煙の中から、右肩から下まで切り裂かれ、大量の血を流しながらも、五体満足な状態で、強大な魔力と殺気を放つフリードが笑みを浮かべながら現れた。

「まさか、この鎧がこうもたやすく切り裂かれるとは・・・魔力で強化したにも関わらず・・・まったく、あきれるな。」

そう言いながら、切り裂かれた所を金属で防ぎ、止血を始める。

さらに、切り裂かれた鎧も修復をはじめめる。

「よく言う。俺の斬撃を受けて五体満足でいるあんたにこそ呆れるよ。まったく、これが、魔力の差か・・・」

魔法使いの戦闘において必要な事は、センスや技術、知識。そして経験、魔力が代表的だろう。しかし、この中で、慧がフリードに勝っているのはセンスと技術だけだ。そして何より、慧とフリードの魔力量には差があり過ぎるのだ。

慧の魔力をランクで表すと、実質A～Sクラスだ。そこに、経験とセンス、技術が入り、『魔法使い』のランクを付けるなら、SSクラスの實力となる。しかし、フリードは魔力量自体SSSクラスなのだ。その差が現状の差と言っても良い。

大けがを負っているのは確かにフリードだ。しかし、焦燥の色が濃く、手札もないのは慧なのだ。

「さて、今度はこちらから行かせてもらおう！」

フリードは駆けだすと、一気にトップスピードに入り慧に突進してくる。慧は横へ飛んで避けるが

「遅い！」

「ぐお！」

突如、背後に現れたフリードに蹴られ吹き飛ぶ。その勢いを利用し、距離を取ろうとするが

「せい！」

すぐ目の前に、ダマスカス鋼の籠手がせまり、その一撃が慧の顔面を捕らえた。

「ぶはっ！」

慧は鼻血を流しながら、吹き飛び、幾つもの瓦礫の山を崩し、やっと止まる。

「どうした慧もう終わりか？」

フリードは『属性武装』による強化と身体強化の魔法の二重掛けにより、更に速度を増しており、これまでの比ではない。消耗して

いる慧では、どうする事もできない。
だが・・・

「くそっ！」

慧は、残り少ない魔力で闇を纏い、フリードに向かい突撃する。

「そうこなくては、な！」

フリードは、再びダマスカス鋼の剣を生成し、攻撃を繰り出す。
慧も『闇』で刀を作り応戦するが、打ち会う度に『闇』は刀の形を保てなくなっていく。

「くっそ、が！」

慧は『闇刃』を放ち距離を取ろうとするが、鎧には、体力や魔力が消耗し、制御が甘くなっている今の慧の『闇刃』は万が一にも通らないため、無視して切りかかってきた。慧は距離をとることが出来ず防戦一方。

「これで、終わりだ。」

そして、一閃。『闇』の刀ごと、慧の体は切り裂かれ、自らの血でできた血だまりに沈んだ。

「はぁ、はぁ、はぁ、流石に、俺も血を失いすぎたか・・・だが、これでもう邪魔するものはいない。これで・・・」

フリードは慧に背を向け、倉庫へ向かう。神の復活を見届けるために。だが・・・

「・・・け・・・い？」

容器に入っていたはずの少女が、銀色の狼を抱え、ぼうっと、フリードを、いや、倒れている慧を見ていた。

「何が・・・どうやって、容器を・・・まさか！」

あの状況で、考えられるのは一つ。少女、緩奈が抱えている銀色の狼、銀が容器を破壊した事だ。

フリードは容器が壊れ、どうするか考える。魂を別の器に入れる事は博士にしか出来ない。そのため、緩奈が、慧の下へ駆けよるのも無視する。それは、この場の誰も自分から逃げられないと確信していたからでもある。

「け・・・い？ 慧！ しっかりしてよ！ 慧！」

傍らに気絶している銀を置き、緩奈は懸命に慧の名前を呼ぶ。血だらけの慧の体を抱きしめ、泣きながら・・・

「無駄だ、慧はもう助からない。そして、君もだ。」

フリードは考えをまとめ終えた。聖遺物と緩奈を回収し、一度身を潜める。そして、再び似たような事を研究している組織を探し、協力を仰ぐ事にしたのだ。神の研究をしている組織は実は裏表問わず、結構あるのだ。そこを頼れば問題ないと判断したのだろう。

「そんな事ない！ 慧は、慧はあんたなんかに負けない！」

緩奈は必死に抵抗するため、種を取りだし植物を成長させる魔法を使い、フリードに向けて攻撃するが、フリードは植物を全て切り刻む。その歩みは止まらない。

『植物』の属性は植物を呼び出したり、成長を促進させたり、変化させたりする事ができるが、『鋼』の前には無意味であった。

「無駄だ、君は慧より遥かに弱い。それでは、俺の歩みを止めることすらできない。」

緩奈は必死に魔法を放つが、どれも歩みを止める事すらできない。罵は切り裂かれ、樹は真二つに割られ、草の刃も通らない。

そして、とうとう、辿りつかれたしまった。

「残念だったな。お嬢さん。もう、終わりだ。」

「い、嫌！」

フリードは強引に緩奈の腕を取り、連れて行こうとする。緩奈は必死に暴れるが、びくともしない。

「慧！慧！」

「無駄だ、その傷だ。もう助からない。」

緩奈は必死に慧の名を呼ぶ。しかし、反応はない。

ピク・・・

だから、フリードは完全に油断していた。

ガギン！

「ぐあ！」

『闇』の刀が下から打ち上げられ、緩奈を掴んでいた手に一撃、フリードは緩奈をお落とす。

「慧！お前！」

「へ、へ、へ・・・そう簡単に、俺がくたばるかよ・・・」

慧はゆっくり、ながらも、確かに立ちあがった。

「慧！」

「はは、緩奈。ありがとうな。お前の声、聞こえた。銀と一緒に下がっていてくれるか？」

「で、でも・・・」

緩奈は血だらけの慧を見て、一瞬引き下がるが、自分達がいっても足手まといにしかないだろうと悟り、銀を抱き、距離を取る。

緩奈達が十分距離を取ったのを見て取ると、フリードは口を開く。

「ふ、まさか、そんな状態で、まだ立ちあがるとはな。そんなにあの少女が大事か？」

「決まっているだろ、ゴホッ！大事じゃなかったら、はあ・・・俺

がこんなところに来て来るはずがないだろ・・・」

「それも、そうだな。だが、どうする？ お前では俺には勝てないぞ？」

傷の状態もそうだが、魔力により顕著に二人の優劣が現れている。フリードの魔力はまだまだ残っており、慧はもう、ほとんどない。この状態でどうやって勝つというのか・・・

「・・・勝てるさ・・・いや、必ず勝つ。」

慧の目は諦めておらず、まだ勝つ気でいるらしい事がわかる。その目に息を飲むフリードだが、首を振る。もう、打つ手などないのだから。

「まあ、まともな方法では、確かに勝てないだろうな。だが、まともじゃない方法なら、まだ、道はある。行くぞ・・・」

そして、慧は実行する。まともじゃない方法、外法中の外法、禁呪と呼ばれる魔法を・・・

「闇よ、俺を喰らえ！」

「なっ！ 止めろ！ 慧！ 死ぬ気か！」

「あんたを倒せるなら、緩奈を助けられるなら、それも良いかもな。まあ、死ぬ気はないけどな・・・行くぞ、覚悟を決めろ！ フリード・ディゼンダー！」

「『闇黒武装・幻型黒龍王』」

慧がそう、唱えた瞬間、闇が慧を呑み込み、そして、姿を変える。蝙蝠の様な翼、蜥蜴のような尻尾、鋭く大きな角と爪、そして、恐竜のような顔、と牙・・・

黒い、闇の龍王がそこにいた。

正確には、闇がその様な形を取っているのであり、慧の肉体が変化したわけではない。大きさとしては、慧より少し大きい位だが、その質量、威圧感は莫大なものだった。

実際の龍と異なるのは、全身を覆っているのが鱗ではなく、『闇』そのものという点だろう。

『グオオオオオオ！』

叫び声とともに、踏み込むと、高速でフリードへ近づく。フリードはその動きについて行き、剣で迎撃しようとするが、振り下ろされた爪の一撃は

「何！」

たやすく、フリードの剣を切り裂いた。

慌てて距離を取るフリードに今度はシッポが襲いかかる。

「グフッ！」

フリードは直撃を喰らい、吹き飛ぶ。

その尻尾は闇の塊であり、大きさに似合わず、とてつもない質量をもっている。その一撃は、ダマスカス鋼とミスリル銀の鎧をゆがませる。

これはいったいどういうことか・・・未だ、魔力量という点ではフリードの方が圧倒的に有利である。しかし、今、押しているのは慧だ。

「ゴホッ！はあ、はあ、なんていう量の『闇』だ・・・魔力の差を覆すか・・・」

それは、『闇』に理由がある。そもそも慧の『属性武装』は『闇』そのものを操る魔法だ。つまり、この魔法の力は操る『闇』の量に比例する。つまり、魔力の差を覆すほどの『闇』だということだ。しかし、通常は魔法であるため、己の技術と魔力で操れる量に制限が設けられている。

なら、何故、魔力がほとんどない状態で、これほどの『闇』を纏うことができるのか・・・それは、『闇』に己を喰わせることで、魔力の変りとしている。そして、そこに制限はない。が、己を喰わせると言う事は自殺行為そのもののなのだ。

ここで、喰わせている己とは、魔力であり、知識であり、意識であり心であり、魂である。つまり、人として生きるために必要なものを犠牲にし、力を得ているのである。

そのため、今の慧に理性というものはない。あるのは、『闇』に秘められた破壊衝動。そして、己の命を危険へと至らしめたものを排除しようとする指向性だけだ。

慧は咆哮を上げると、フリードへ向かって突進する。その角で突き刺そうというのだ。

フリードは体制を崩しており避けられないと瞬時に悟ると、周囲にある金属を掻き集め、『属性武装』の密度を上げる。そして、慧を迎え撃つ。

『グオオオオ！』

「うおおお！」

ズウン！という大地が震える音と、空気が震える音と共に、ぶつかり合う『鋼』の王と『闇』の龍・・・

フリードは慧の角を掴み、その突進を止めていたが、ズルズルと押されている。少しでも気を抜けばこのまま角に貫かれる。

「はあああ！」

しかし、それでは終わらないフリード、気合いと共に、一歩踏み込む。そして、慧の突進が完全に止まる。が、

「何！」

突如、掴んでいた角が伸び、フリードの鎧ごと肩を貫いた。

「ぐあああ！」

痛みに怯みそうになるが、それを堪え、鉄の塊で竜を型どり、慧の横から突っ込ませる事で、強引に引き剥がす。貫かれた肩からは大量の血が吹き出ている。

「くそっ・・・『属性武装』が・・・」

フリードの『属性武装』が剥がれる。別に魔力が切れた訳ではない。先ほど、制御できる以上の金属を操ったため、強制解除されたのだ。慧の突進を止めるだけの強度を保ちながら、慧を引き剥がすため、身に纏うのではなく別に金属を操ったため、フリードが制御できる量を越えたのだ。

確かにフリードの方が魔力は大きく、操ることのできる金属の総量は大きいかもしれない。しかし、一度に操ることのできる量でいえば、慧の方が上だ。それは慧の方が制御が上だからだ。だからこそ、フリードと戦い、傷を負わせることが出来たのだ。

そして、なにより・・・

「相変わらず、『闇』との相性が良すぎだろう。それに・・・はあ、慧と戦うのにこの時間は不味かったか・・・」

今はもう、夜。当たりは微かな光はあるが、ほとんど闇に包まれている。

現在、制限なく『闇』を扱える慧にこの状況は幸とも不幸とも言える。この状況は『闇』の力を存分に振るう事ができるが、禁呪を使っている慧には命をより早く縮める結果となっている。

『グウウウ!』

慧は鉄の竜を引き裂き、地を踏みしめると、大きく息を吸う。その口には『闇』が集まり、濃縮されていく。

「これは、不味いな・・・」

フリードは、本日二度目の危機を感じる。本能が警報を鳴らす。あれを喰らっては、いや、放たせてはならないと……

「『我が司りしは『鋼』の力……『鋼』に属する全てのものよ、我が呼び声に答え、その力を我に貸せ……』」

フリードは初めて呪文を唱える。

「『全ての金属はただ一つ、我が前に立ち塞がるものを切り裂く鋼の刃……その刃こそ王の剣……』」

『鋼』の魔法は希少故、知られていない。だから、これはフリードだけ魔法。そして、フリードが使える最高の切れ味を誇る魔法……『鋼王』の由来となった魔法……その名を……

「おうけん・こうじん『王剣・鋼刃』！」

『グオオオオ！』

全ての敵を切り裂く鋼の刃を持つ王の剣と、全てを呑み込む闇の光線が交差した。

そして……

「慧！慧！しっかりしてよ！」

慧は、『闇黒武装』が解かれ、気を失い倒れた。緩奈はそんな慧

を揺さぶり、起こそうとする。出血がひどく、このまま気を失い続けるのと、体温が低下し死に至ってしまう。

慧とフリードの戦いは会い打ちだった。慧の放った闇の光線をフリードは切り裂く事が出来ず、呑み込まれた。そして、慧はその闇を放った後、急激に『闇』が薄れ、禁呪が解除された。

「い、いったいどうすれば・・・」

銀は未だに気絶しており、周囲に人影は見当たらない。そもそも、慧とフリードの戦いで辺り一面の建物は破壊しつくされており、人がいたらまず助かっていないだろう。

慧の血は未だ止まらず、体温も下がってきている。慌てる緩奈は頭が働かず、どうすればよいのか、思い付かない。

「君の植物に止血できるものはないのか？」

そこに、声が掛けられた。視線を上げると、直ぐそこにフリードがいた。全身ボロボロで、出血も酷く、立っているのがやつのようだ。これまで感じていた威圧も感じない。

「あ、あ、あ・・・」

「はぁ、緩奈といったか？しっかりしろ！今、この場で慧を助けられるのは君しかないのだ。」

緩奈はその声で正気に戻り、改めてフリードをみる。そして、不思議に思う。先ほどまで慧と殺し合いをしていた男が、自分を誘拐した男が、今度は慧を助けようと言っているのだ。

「な、なんで？なんであなたが慧を助けるのを手伝ってくれるの？」

「手伝いはしない。俺はアドバイスを与えるだけ。全ては君の腕にかかっている。」

しかし、緩奈は納得しない。フリードをじっと見上げる。

「はあ、慧とは古い知り合いなんだよ。多分君よりな。だから、こんな所で死なせたくはないのだ。まあ、ついさっきまで、慧を殺そうとしていた男の言葉だ。信じられないかもしれないがな・・・」

その言葉を、そこに含まれる真摯な思いを感じ取り、緩奈は首を振る。

「ううん。信じるよ。少なくとも、あなたが慧に死んで欲しくないと思っている事は本当だと思う。それで、どうすればいいの？」

緩奈は聞く。どうすれば慧を助けられるのかと。

「ゴホッ・・・はあ、先ほど俺に使った植物の種はまだ持っているか？」

「う、うん。あるけど？」

そう言って、種をだす。『植物』の属性は、植物に働きかけることにより、その植物の成長を促進させたり、植物に本来の成長とは異なる成長をさせ、新種を発生させる事もできる。さらに、植物を召喚できたりもできる。しかし、緩奈は好き勝手に召喚出来る程の技術がない。そのため、種をいつも持ち歩いている。

「なら、それを慧の傷に植え、成長させて、止血に使い。全て使うなよ。残りの種で、傷を癒す植物を作り、治療するんだ。」

緩奈は言われた通り、実行し、慧を治療していく。

しかし、フリードには心配な点が一つある。禁呪を使った以上、記憶や心、命を削っているだろうからだ。どれだけ削れているかにより、緩奈の絶望も変わるだろう。

緩奈はひとしきり、慧の治療を終えると、フリードに先ほど生み出した薬草を渡す。

「・・・良いのか？俺は・・・」

「慧を助けるのを手伝ってくれたお礼です。」

断ろうとしたが、有無を言わさぬ緩奈の態度に、苦笑し、感謝してから使用する。

「これで、一命は取り留めた事だろう。しかし、禁呪を使用した影響は俺にも解らない。もしかしたら君の事を覚えていないかもしれない。」

「・・・そうですか・・・でも、それでも、慧は慧です。もし記憶をなくしていても、また作ればいいんです。」

その言葉に、フリードは強いなど、感想を漏らすと踵を返す。

「どこへ行くんですか？」

「なに、先ほどの慧の一撃で聖遺物も消えてしまったからな。君にこだわる理由も無くなった。ここにいては、捕まるのでな。逃げるのだよ。」

「そう、ですか・・・」

「ああ、それと、慧が起きて今日の事を覚えていたら言っておいてくれ・・・もう、禁呪は使うな。大切なものを失うぞ・・・とな。」

「わかりました・・・」

緩奈は確かに頷く。あの慧はもう見たくないと思う。見ていただけでわかる。あれは大切なものを削る魔法だと。

緩奈が頷くのを確かめると、フリードは一度も振り返らずに去っていった。

フリードが去って、どれくらいたったのだろうか、慧の呼吸も安定してきた時、周囲が騒がしくなり始めた。

「慧！銀！」

その声に緩奈が振り返ると、美夜が駆けよってくる場所だった。

こうして、一連の事件の幕が下りたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2153x/>

闇の断罪者と無の還元者～世界の秘密と魔法使い～

2011年11月18日05時10分発行